
憂愁の旅人

霧野ミコト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

憂愁の旅人

【Nコード】

N9078P

【作者名】

霧野ミコト

【あらすじ】

もう俺には大切な人はいない。

みんな死んでしまった。

だけど、だからと言って死ぬわけにはいかないんだ。

みんなが死んだからこそ、俺が生きなくちゃいけない。

生きて、その人たちの分まで未来を見なくちゃいけないから。

孤独の中で生きる少年はある日、気がついたら全く知らない場所にいた。

聞いた話では、異世界らしい。

驚きつつも、その事実を受け入れた少年は、旅を始める。
残酷な運命が待つ旅を。

消えた未熟な魔術師のお店で連載していた小説です。
原作通りの展開になる予定です。

プロローグ

極上のビロードのカーテンとその他の嗜好品で囲まれた一室に二人の男がいる。

片方の男は、最高といっても遜色など全くない豪華なすに座り、片方の男は机を挟んで男の前で立っている。

「王よ、ご決断ください。もはや、われわれにはこの手しか残ってはおりませぬ」

立っている方の男がそういう。

へりくだった言い方をしているのだから、おそらく臣下なのだろう。

ただしその顔には何の表情も浮かんではない。

しかし、その瞳にだけは、感情が灯っている。

ある種、悲しみとも取れる感情が、だ。

「しかし、そのようなことをすれば、まず間違いなく、私は娘に憎まれるだろう」

王と呼ばれた男も答える。

その顔は苦渋で染まる。

なんらかの作戦を行うのだろうが、その作戦の代償に娘に憎まれる

という事になるらしい。

そして、王はそれがいやなようだ。

「ですが、だからといって、この手に頼らなければ、この世界は滅んでしまいます」

けれど、臣下は王に残酷な言葉を投げかける。

この王にどちらかをとれと言うのだ。

数多くの民衆の命か、または娘からの愛情か、と。

王は、深くうなった。

反論の仕様がなからだ。

そして、自分がどうすべきなのか、ということもまた、分かっていた。

そう。

王となった以上、すべての私情を捨てて、公務に没頭しなければならない。

あらゆる贅沢を許された代わりに、あらゆる私を失わなければならない、そのことを。

「わかった」

だから、王はこう答えるしかなかったのだ。

「私が娘に嫌われよう。それで、多くの民衆の命が助かるなら。それなら、私は、ここで今私を殺そう。それが王の責務ならな」

生きた人形として生きていく、と。

この世界の管理者として。

そして、この世界の生贄として。

「召還してくれ」

最後に王は全く感情のなくなったガラス細工のような瞳でそういった。

第一話 ここはどこ。私は誰…いや、自分のことは分かってるけど。

（俺は、こう思う）

（人は何かを手に入れるために生をうけたんだと）

（だけど、その何かを手に入れるためには代償が必要だ）

（何かを手に入れるためには何かを失わなければならない）

（たとえそれがとても大切で、失いたくはないものだったとしても）

（そして、俺は、その摂理のとおり、あるものを手に入れた）

（誰にも縛られることなどない自由だ）

（俺は自由を手に入れた）

（けれど、それと同時にあるものを失った）

（そのあるものは……）

（家族だった）

（いろいろと口うるさかった家族はいない）

（そう、今俺が住んでいる家にいるのはただ一人）

（たった一人）

（俺だけなんだ）

薄靄の中で少年は覚醒した。

年のころは大体、16, 7だろうか、まだ幼さの残る顔をしている。

目を覚ますと、同時に、少年はあたりを見やった。

けれど、目に映るものすべてが全く見覚えのないものばかりだった。

眼前には、淡緑の芝生と新緑の木々が生い茂り、振り返れば、白亜の壁が聳え立っている。

けれど、そのすべてに少年は全く見覚えがなかった。

いや、その一つ一つならば、ほかのどこかで見たことがあるかもしれない。

ただ、そのすべてが一体となっているこの景色は見たことがないだけだ。

少年はもう一度辺りを見回す。

けれど、いくら見回したところで、全く見覚えがないことには変わりはない。

結局、ここがどこなのか全く分からないことに答えが落ち着いた少年は

「ここはどこだあ！！！！！」

叫ぶことしかできなかった。

けれど、それが間違いだった。

いや、もしかすると、ある種救いなのかもしれない。

その声を聞きつけた衛兵―白に朱色の細いラインの入られた鎧を着込んだ男―が、その少年の怒号を

「曲者だあ！！！」

同じく怒号で返したのだから。

「ひい！！！」

わけも分からず、思わず叫んでしまった少年は、その怒号につられて返ってきた怒号を聞いて、しばらくの後に、悲鳴を上げた。

別にその声に驚いたわけではない。

その、声の主を見て驚いたのだ。

最初のうちは、声が返ってきたので安心していただけだが、その声の主の顔を見た瞬間、言いようもない戦慄に覚えたのだ。

少年は急いで立ち上がると、走り出す。

不思議なことに体は非常に軽く、あたかも空気を掻き分けるかのよ

うに走り、体で風を感じる。

周りの景色もどんどん変わっていく。

まあ、相変わらず、白亜の壁と新緑の木々で覆われてはいるが。

それでも、少年は走り続ける。

というか、そんなことに思考が至ってないのかもしれない。

余裕が全くないこの状況で、そんなことを考えている余裕などないのかもしれない。

けれど、余裕がないおかげで、先ほどまですぐそばで聞こえていたはずの足音も聞こえてこなくなった。

よし、このままなら、逃げ切れる。

少年が、そう思った次の瞬間。

「へ？」

少年の情けない声と同時に、体が、宙に浮いたと思うと、そのまま地面にたたきつけられた。

あたかもまるで少年の体が、木の葉かのように、だ。

少年は、わけも分からず、呆然としつつも、逃げなくてはと思い、立ち上がろうとしたのだが

「さて、そろそろお縄についてもらおうか？」

追いかけてきていた衛兵が後ろからそう告げた。

その声の調子がにやついていることが分かる。

少年の心に深い絶望感が生まれた。

今まで必死になって逃げてきたが、こうもあっけなく、ゲームオーバーとは。

けれど、それでも、少年はしっかりと振り返り、衛兵の顔をしっかりと見る。

そして、その少年の目に衛兵の姿が映る。

ざんばら髪に、原始人用にもじゃもじゃの髭に、熊のような大きな体をした、にやついている中年の衛兵の姿が。

その中年衛兵の顔を見た瞬間少年は、一瞬失神するかと思った。

それぐらい強烈な顔なのだ。

けれど、その衛兵は、そのことには気づいておらず、逆に、何をとち狂ったのか、自分の力におびえているのだと思い、さらににやつく。

それを見て少年はさらにおびえる。

まさしく、悪循環この上なかった。

「んで、貴様はどうやってここに入った」

ひとしきり悪循環を終えると、衛兵のほうから口を開いた。

どこか厳かに神託をを告げるような様子だが、言ってる衛兵が原始人を生き写しにしたようなものでは、単なる冗談のようにしか見えない。

少年もそのことをちらっと思ったが、すぐにそれを掃いて捨てると、

「いや、気がついたら、ここにいた」

素直に答える。

まあ、さっさと自分の家に帰りたいからなんだろう。

なんだろうが、逆にそれが災いした。

「ほう。気がついたらここにいた、か。そんなことで、この王宮に入ってこれるかぁ!!」

衛兵の怒りに火をつけることになったのだ。

けれど、少年には全く意味が分からない。

実際、気がついたらここにいたのだから、そうとしかいいようがないのだ。

なのに、いきなり怒られた。

全く不本意でしかない。

「だけど、本当のことだから仕方ないだろう！！」

だから、怒鳴り返したのだが、それがさらに火に油を注ぐ結果となり。

「んな、夜惑い事を言う奴は牢にぶち込んでやるわあ！！！！」

思いつきり少年の首根っこをつかむと、ずりずり引き摺り、どこかに連れて行こうとする。

さすがにあせった少年は、必死になって、もがき、

引き剥がそうとする。

その結果。

「ぐへえ」

思いつきり衛兵の後頭部に拳が極まり、ノックダウンさせてしまった。

少年はこれ幸いと思い、逃げ出そうとした次の瞬間。

ゴン。

何かに思いつきり後頭部を殴られ、意識をブラックアウトさせてしまった。

第二話 この地は、エルノリア

「い、いてて。ああ、もう、なんだったんだ？」

いきなりの後頭部の一撃をくらい、意識を失っていた少年はようやく目を覚ました。

けれど、目を開けてみたはいいが、またまったく、見覚えのない場所だ。

薄暗く、どこかかび臭くて、こんなところでいれば、すぐに気がめいってしまいそうな、そんな場所だ。

そんなところを少年が知っているはずもなかった。

だから、またまた考え込んでしまうことは、当然のことで、うんうん唸っている。

けれど、答えなんかが出てくるわけもなく。

「いったいここはどこなんだあ!!」

またもや、意味もなく叫んでしまう。

答えなど返ってくるわけも……

「牢よ」

……あった。

少年もまさか答えが返ってくるとは思っていなかったのだろう、首が外れそうな勢いでひねり、声がしたほうを向く。

けれど、そこにいたのは、こんな場所とは不釣り合いな人物だった。

少年と同じ年頃の少女だった。

腰の辺りまで伸びた、まるでシルクのような金髪。

ただ、それだけで、豪華な飾りをまとうているかのように見える。

また、その瞳も目を見張る。

まるで、アメジストを埋め込んだかのように、透き通った紫硝石色の瞳をしている。

その瞳が埋め込まれている肌もまたキメ細かく、また白磁器のように白く、艶かしい。

そんな少女がこんな薄暗くじめじめとした場所にいる。

少年は呆然と見ることにできなかった。

いや、呆然と見惚れることにできなかった。

その少女の神々しい美しさを前にして。

しばらく見惚れていた少年だったが、そんな間抜けな自分によく気がつく、顔を引き締めると

「ろう、って言ってたけど、どういうことだ？」

質問する。

いまだに状況をつかめていないからだろう。

「今あなたは投獄されてるの。侵入者として、ね」

そう質問した少年に対して答える少女の目はどこか冷やかだ。

ある種の侮蔑の念すら持っているように見受けられる。

少年もそれを敏感に感じたのだろうが、それは、あえて無視することにして

「侵入者、て言うことらしいが、俺はもともと意図的に入ってきたわけじゃない。気がついたらそこにいただけだ。だから、さっさと出してくれ」

弁解することに努める。

さっさとここから出ることをまず先決させたからなのだろう。

けれど、少女は薄ら笑いを浮かべると

「それは無理ね」

冷たく返答した

「たとえば、あなたの意思がどうであろうと、この王宮に許可なく入った時点で嚴重な罰を受けることになるし、それに、あなたは、衛兵に怪我を負わせてるからね」

少年はそれを聞いた瞬間軽く舌打ちをした。

ここがどこなのかはまったくわからない。

ただ、わかるのは、自分が自衛として行ったことのせいで、自分は罰せられることになる、ということだ。

けれど、それでも、少年はあせることはしなかった。

たかだか、不法侵入と、過剰防衛。

それだけで、大きな刑罰を受けるとは思えないからだ。

そう、日本とはそんな国なのだ。

そう思っていたのに、

「よって、あなたはこの国の法の名の下に処刑されます」

少女が冷たくそっくり渡した。

少年はその言葉を聴いた瞬間愕然とした。

いや、むしろ、驚きのあまり一瞬言葉を失ってしまった。

けれど、すぐに気を取り戻すと

「ふざけるな！！そんなばかばかしい法律があるか！！」

噛み付き返した。

「不法侵入と過剰防衛で殺されることなんてあったまるか！！」

少年の言い分はもつともだった。

日本という国では、そう簡単に死刑が言い渡されることはない。

日本では。

「だけど、それがこの国の法よ。エルノリアのね」

ただし所変われば、法もまた、であった。

場所が変われば適用される刑も変わってくる。

けれど、そんなことを知らない少年はいきなりの発言にまた言葉を失ってしまった。

いや、何がなんだか、わかっていないと言う事の方が正しいのだろう。

いきなりの話題の展開でよくわかっていないのだろう。

それでも、少年は必死になって、頭の中を整理した。

自分がいたのは日本。

けれど、目の前にいる少女の話では、この国はエル何たららしい。

そして、この国では、不法侵入と過剰防衛は死刑。

その経緯から予想されるのは……。

治外法権。

つまり、ここは、日本にある大使館なのだ。

それならば、何とかまだ理解の範疇にある。

少年の思考は、そう結論付けることに至った。

至ったのだが、

「まあ、異世界からの訪問者のあなたには、これを理解してもらうのは不可能かしらね」

また、少年の頭をかき回すような発言が出てくる。

そう、せっかく整理でき始めた頭の仲をさらに引っ掻き回すような発言が、だ。

少年は少女のいった言葉を最初はまったく理解できなかった。

ただ、それを何とか吟味していこうとした結果、それに合致する言葉を見つけたのだ。

けれど、それはある種少年にとってはあまりよろしいものではない。

いや、むしろ、気づかなかったほうがよかったのかもしれない。

その証拠に少年の顔が蒼白になってきている。

後もう一押しあれば、また叫びだすことはまず間違いないだろう。

そんな姿を少女はいまだに冷ややかに見ている。

その容貌にはまったく合っていない。

彼女のような少女にはもっと愛らしい笑顔が似合うはずだ。

けれど、少女は能面のような表情で、少年を見据えている。

少年は少年で、ショックから立ち直れていない。

短い間で立て続けに通常ではありえないことがおきたのだ、それは当然のことだろう。

そして、それぐらいのことは少女だってわかっているだろう。

だから、この場合、その少女が少年に気を使うのが当然なのだ。

なのに、少女は冷ややかに見るだけ。

少年の気持ちなどお構いなしといった感じだ。

それでも、少年はなんとか、自力で平静を取り戻した。

ここまで立て続けに起きたからこそなのかもしれない。

ある種の諦めにも似た感覚から来ているのかもしれない。

または、慣れにも似たような感覚なのかもしれない。

それはわからないが、少年は平静を取り戻すと、

「んじゃあ、俺はどうなるんだ？」

落ち着いた声の調子でそうたずねた。

それだけでも、十分評価に値する。

けれど、それでも、少女は少年を見下したような眼で見ると

「今から、私と旅に出てもらいます。」

衝撃の言葉を投げ返した。

「わかった。」

少女の問いに少年は全く動じることなく、はっきりそう答えた。

覚悟が決まったのだろう。

その瞳を見ればよく分かる。

先ほどまで、不安そうにゆらゆら揺れていた瞳が今は、はっきりと

彼女のことを見据えている。

そのとき初めて少女の表情が一瞬変わった。

軽度の驚きだった。

けれど、それもすぐに隠すと、

「んじゃあ、すぐに準備に移ってもらうわね。鍵は衛兵が開けるから、心配はする必要はないわ」

と、必要なことだけ言うと、彼女は、その場から離れようとする。

けれど、何か思い当たることがあったのだろう、もう一度足を止める。

そして、少年のほうへと振り向くと、

「私の名前は、リエラ・ウォルレグナー・ハルトネス。好きなように呼んで頂戴」

最後にそういい残すと、今度は振り返ることも立ち止まることもせず、少年の前から立ち去った。

そして、その場に残されたのは少年一人。

けれど、その少年もまた、少女——リエラが出て行くと同時に入ってきた衛兵に外に出される。

その場を出た瞬間に少年は目を見張った。

先程までは、ごつごつした岩肌だった壁が今度は光り輝く白亜の壁に変化していたからだ。

その壁をよく見てみれば、ところどころに、燭台がついており、その装飾の見事なことはなんともいえない。

少年は初めて見る豪華な品物に目を奪われるばかりである。

半ば放心するかのように、見るものすべてに目を奪われながら歩いていると、ようやく、案内していたのだろう衛兵が立ち止まった。

どうやら、目的地にたどり着いたのだろう。

見てみれば、今まで見た扉の中でも、飛び切りの装飾を施された扉が目の前にある。

少年は、ごくりと唾を飲み込んだ。

ここにかなりえらい人物がいるのは、誰にでも分かることだ。

「さあ、お待ちだ」

そして、少年は、衛兵にそういわれるのと同時に、その扉を開け、中へと入っていった。

これから、始まる、運命へ立ち向かうために。

第三話 旅立ち

王は言った。

「君には、これから、私の娘と旅にでてもらう。目的地は、フォルモリストの森。別名、始まりの魔女の森だ。そこにいったん入れば、帰ってこれるものなど居ないといわれるほどのいわくつきの森だ。そこに、行ってもらいたい。もちろん、費用はこちらで出す。いや、とは言わせないつもりなんだろう？まあ、私としては奏してもらいたいけれど、強制はしない。ただ、ひとつだけ言える事は、始まりの魔女が居るそこには、君が自分の世界へと戻る方法があるかもしれない。そのことだよ」

そして、少年にはひとつの道しか残っていなかった。

雲ひとつない晴天のうららかな午後。

町は人々の喧騒にあふれており、にぎやかな市が開かれている。

こんな日には、外でお茶を飲みながら、のんびりとするのが…

「ほら、早くして頂戴。時間がもったいないわ。」

良いのだが、それをしていないところもあるみたいだ。

むしろ、この二人組みにそれを求めるのは酷なのかもしれない。

その二人組みというのが、ついさっきこの世界に来たばかりの少年と、そしてなぜかその少年のことを極端に毛嫌いしている、少女リ

エラなのだ。

この二人組みが穏やかに、話せるわけもない。

実際、二人の会話を見てみれば、

「ほら、なにしてるのよ、あんたの武器を選んでのよ、のらりくらりしないで」

「わかってるよ。つか、いったい何回言ったら分かるんだ。名前で呼べつうの」

「確か、悠城谷だったわね??」

「そうじゃなくて、城谷悠。それがうちの国の習慣なんだよ」

「ふうん。あつそ、私にはそんなことは関係ないわ。たいした戦力にもならない、あんたなんて、それで十分よ」

「おまえ、ほんとむかつくな」

とまあ、そんなこんなで、喧嘩ばかりしている。

まあ、リエラがけんか腰になっているせいだというのもあるが、それにいちいち食って掛かる少年も少年だ。

いや、悠と呼んであげるべきなのだろう。

そうでなければ、彼も報われない。

「お前、いい加減にしろよ。俺には、城谷悠っていう、ちゃんとした名前があるんだから、それで呼べよ。んじゃないと、俺もお前のことをこれから、ずっとお前で通すぞ?」

「勝手にすれば?」

まあ、どんな主従関係になるかは一目瞭然だが。

そんなこんなで、けんかしながらも二人は、並んで武器を選ぶ。

そこには数多くの種類の武器が並んでいる。

悠はそれを適当に眺めては、手に取り、元に戻す。

どれをとっても、そればかりで、もう一度手に取るような事はしない。

そして、店に飾られている武器を全部手に取ると、

「どれもこれもだめじゃん」

そういうと、ため息をついた。

「どれもこれも手にしっくりなじまないし、軽すぎだし、でぜんぜんだめ。使いにくい」

悠はそういうと、リエラの方へと向きなおし、

「つうわけで、別のところに……」

行こう。そう言おうとしたんだろうが、思いっきり頭を殴られた。

いきなりのことなので、当然ガードもできるはずもなく、無様にそれを受けると、うずくまる。

かなり強烈な一撃だったのだろう。

「何するんだよ!!」

現実には、悠は殴られたところを必死でさすりながら文句を言っている悠の目には涙が少しだけ滲んでいる。

それに対して、リエラの反論といえば、

「あんたみたいな、役立たずは、役立たずの武器でも使ってればいいのよ」

なんともまあ、血も涙もない言葉だ。

聞いている方が悲しくなってくる。

しかし、当の言われた方の本人は、

「役立たずが役立たずな武器を持ったら死んじゃうだろうが!!」

自分が役立たずであることを認めていた。

まあ、戦闘経験どころか、まともな訓練を受けたことすら全くの皆無なのだから、言い返すわけにも行かないだろう。

まあ、だからと言って、こんな風な言い返し方も少しばかり、情けない気がしないでもないが。

と、それはさておき、実際、悠の言っていることは事実だ。

ただでさえ足手まといなのに、使えない武器を持っていると、さらに足手まといにしかない。

やはり、ある程度使えるものを持たせてやらないといけない。

リエラもそれを分かっているんだろう。

居るんだろうけど。

「ちょうどいいから、死んじやいなさい。そうすれば、私も万々歳よ」

どうしても、悠とは一緒に行きたくないのだろう。

そういつて斬り捨てる。

結局、悠の武器は、見るに見かねた店長が、店の奥にあった物を持ってきたバスターソードに、決まった。

それでも、まだちょっと軽いようだったが、これならいよりもましだと思ったんだろう、それを買うことに決めた。

まあ、店の奥に大事しまっておくようなものだったためかなりの値段だったが、そこは一国のお姫様と旅をすることになるんだ。

苦もなくそれを払うと、さっさと店を出た。

第四話 師匠発見

それから、しばらくは二人は待ち合わせ場所を決めると別れることにした。

まず悠は、マジックショップへと立ち寄った。

この世界には、魔法がある。

それを知ったのは、この二人旅が始まるときに、聞いたことだった。

もちろん、悠は魔法は使えない。

もともと悠の世界には魔法がなかったのだから、使えるはずがない。

けれど、だからと言って使えないと言うわけでもないらしい。

と言うことで、早速魔法を覚えるために、立ち寄ることにしたのだ。

けれど、悠にとっては、そんな場所に立ち寄るのは初体験だ。

さっきの武器屋もそうだが、魔法屋はまた微妙な怖さがある。

やはり、魔法と聞いて、どうしても陰鬱とした雰囲気を感じ浮かべてしまいがちなのだろう。

けれど、やってきた、魔法屋は悠が予想したものとは違っていた。

それどころか、少し間が抜ける感じがした。

目の前にある魔法屋は……

とってもファンシーだった。

それこそ、普通に女子高生が入り浸ってそうな感じがする。

悠も最初は、間違えたのかと思い、思わず看板を見てみたが、そこにはしっかり「オルティアマジックショップ」と書かれている。

しかも、ピンクで。

悠は入るのを止めようかとも思ったけれど、魔法はどうしても欲しいので、諦めると、気を引き締め、中に入る。

「いらっしやいませ〜♪」

けれど、その引き締めた気を、削ぐようななんとも言えない、珍妙な声が聞こえてきた。

否、ファンシーな声がしてきた。

さすがの悠もがつくりとしてしまったけれど、それでも何とか気を引き締めると、中を物色し始める。

「て、なんだ、これ!!」

けれど、あるものあるものすべてが、ファンシーグッズで埋め尽くされている。

まあ、マジックアイテムなんだろうけれど、悠が欲しいものはない。

それこそ、魔術書なるものなどどこにもおいてないのだ。

悠は、再度がつくりする。

なんだか、一生懸命気を引き締めてきた自分がばかみたいだ。

そう思えてしまう。

けれど、諦めるわけにも行かない。

なんといっても、魔法なのだ。

あのゲームとか漫画とかによく出る、あの魔法なんだ。

あれが使える。

それが悠にとっては至上の楽しみなのだ。

よって、止めるわけにはいかない。

しかたないので、悠は店員に訊ねる事にした。

もしかすると、武器屋の人のように、裏から持ってきてくれるかもしれない。

そんな期待からだ。

そして、その期待は案の定あたり、

「はい、ありますよ。これです」

目の前に一冊の本を差し出した。

見たところかなりの年代ものようだ。

けれど、悠にはそれがさらに価値あるものと見えたらしい。

にやにやと笑みを浮かべている。

そして、なぜか、店員もにやにやと笑みを浮かべている。

はたから見ると、お互い変人でしかない。

けれど、悠にはそれに気づく余裕などもなく、しきりに頷くと。

「いくら?..」

値段を訊ねる。

けれど、それと同時に愕然とすることにもなった。

そう店員が、

「1万リオラです。」

にっこりと笑ってそう答えたからである。

「ちょっと待ってくれ、それはあまりにも高すぎるだろう!!」

いきなりの大金を吹っかけられて、悠も驚いている。

この世界の貨幣価値は日本の約百倍。

つまり、日本円に直すと100万円ということになる。

大体、銅貨一枚、つまり、1リオラもあれば、簡単な食事は取れる。

その一万倍ということは、その本だけで、一万回分の食事が消えるということだ。

悠もさすがに、その場か高い値段を聞いて度肝を抜いたのだろう。

「けれど、魔術書というものは、とても貴重なものですから、これぐらいはするんですよ」

けれど、店員はそんな事は我関せずといった感じで、にこやかに言い返す。

そう出られては少年にも返す手はない。

そもそも、魔術書なるものの相場が分からないのだからなんとも言えない。

少年はしぶしぶとポケットから、金貨を一枚出す。

ちなみに、金貨一枚で、銅貨一万枚分。

つまり、一万リオラということだ。

ついでに言っておくと、銅貨百枚分で銀貨一枚。

結局、銅貨百枚で、銀貨一枚に、銀貨百枚で、金貨一枚に、ということになる。

ちなみに、金貨百枚で、白金貨一枚になる。

とはいっても、白金貨なんてものを、持つ人は居ない。

落としたりしたら、その瞬間に、かなりの財産を失うことになるからである。

と、それはさておき、悠はしぶしぶといった面持ちで、金貨を店員に差し出そうとした。

けれど、その手をいきなりつかまれ

「その本にそんな値打ちはない」

やんわりと、元の位置に戻すと、そつとつぶやいてくる人が居た。

悠はよく分からず、その行為の主の方を見た。

そこにいたのは、自分よりほんの少しぐらい低いぐらいの結構高い黒髪黒目の女性がいた。

しかし、それよりも、もっと目を見張ったのは……

右手に持っている杖だった。

それこそ、ルビーにサファイア、ダイアなど多数の宝石がちりばめられており、一目見ただけでも、明らかに、かなりの業物だというのが分かる一品だ。

「この本は確かに魔術書だ。ただ、かなり昔の、基本のみが書かれている奴だな。今の時代、こんなものは二束三文にすらならないよ」その女性は、店員をにらみつけるようにして、そう告げると、今度は悠の方へと向き直り、

「あと、魔法の魔の字も知らないような君は、こんなところに来るべきじゃないわね。学校かどこかで、教えてもらってから着なさい」冷たくそう言う。

けれど、悠はそれに対して怒りを感じるどころか。

「どうもありがとうございます」

にこやかにお礼を言う。

目の前にいる女性が少し引いているぐらいだ。

それでも、悠は止めない。

とまらない。

「というか、杖持っているって言うことは、魔術師ですよ？ しか

も、そんなすごいものを持っているって言うことは、かなり高位の
ということは、魔法についても詳しいんですね？ だったら、俺に
教えてくれませんか、魔法？」

もうほとんど食いつかんばかりの勢いだ。

当の女性も勢いにおされ気味だったが、何とか体勢を整えると、

「お断……」

「ちゃんと月謝も払いますし、なんなら、宿も食事もあります!!」

断ろうとしたのだけれども。

「わかったわ」

最後の一言を聞いて、意見を翻したのだった。

第五話 魔法講義

魔法の師匠を見つけた悠はホクホク顔で通りを歩いていた。

そして、その隣で、悠と同じようにホクホク顔をした女性がいる。

悠の魔法の師匠だ。

名前は、キュアフロート・フルミエル。

悠は彼女のことをキュア師匠と呼ぶことにしている。

年齢は21歳。

その歳に似つかない高位魔術師で、現在世の中に出ている魔法のほとんどもを体得しているらしい。

それが事実ならば、まさしく天才である。

魔法の種類は、100種類どころではすまない。

そんな多くある種類の魔法のほとんどもを体得しているのだから、そういつても過言ではない。

悠はもちろん、その言葉を聴いて喜んだ。

当然だ。

やはり、たいしたことない魔術師に師事するよりも、断然キュアの

ほうがいいに決まっている。

だからこそ、悠の顔は緩みきっているのである。

と、話を戻すと、そんな彼女は一人で旅をしていた。

手に持っている杖は、旅の途中で立ち寄った、古代遺跡で見つけたらしい。

まあ、盗掘とも言うが、少年にはそんな発想は思いつかなく、さらに喜んでいる。

それで、今まで一人旅をしてきた、キュアだが、そろそろ、仲間が欲しいと思ったところで、悠にあった。

そう言う事らしい。

まあ、運のいい偶然だ。

悠も悠で状況を話した。

旅の目的地や、自分の連れについてだ。

もし、途中で嫌だといわれたら困るからである。

そして、もちろん、一緒に歩いているのだから、答えはイエスだった。

それで、話し合いの終わった二人は待ち合わせ場所に行っている。

やることを全部終えたのだから、そうするしかない。

けれど、待ち合わせ場所についても、まだリエラは来ていなかった。
どうやら、少し早すぎたらしい。

というわけで、悠は早速

「ねえ、魔法について教えてよ」

魔法の授業に移ることにした。

キュアも一瞬思案するそぶりを見せたが、

「いいわよ」

そういうと、頷き返し、

「いい？ 今から言う事は基本だからしっかりと覚えてなさい」

説明し始めた。

「そもそも、魔法というものは、簡単なものなら誰にでもできるわ。魔力というものは誰にでも備わっているものだからね。ただ、その魔力を魔法に還元する仕方が難しいだけ。そして、その還元の仕方がうまければ、難しい魔法だって扱える。逆に下手だったら、簡単な魔法だって扱うのも難しくなる。それで、私達がまず鍛えるのが、その能力なのよ。魔力を還元する方法ね。それで、その還元する方法なんだけど、簡単に言うと、魔力をいったん一つの場所に集めて、その集めた魔力を、イメージによって魔法に変える。ただ、それだ

けのことね。ただ、それだけのことだからこそ難しい。それができなければ、絶対に魔法が使えないからね。逆にそれができればどんな魔法だって扱えるわ。相応の魔力があればね」

とまあ、こんな感じかしら。

最後にそう付け加える。

どうやら、これが始めての講義らしい。

いきなり理屈っぽいことばかり並べられて、少々びっくりしたけれど、それでも内容把握はできたみたいで、しきりに頷くと

「ありがとうございます。」

丁寧にお礼を言った。

そして、彼女の説明は続く。

「それで、その還元する能力を養うために、必要なのはイメージトレーニング。まあ、要するに、自分の中にある魔力を自由自在に扱えるようにイメージすることね。それでその魔力をある程度イメージの中で扱えるようになったら、頭の中で自分のやりたいように、具現させてみる。まあ、一番簡単なのは炎かしらね」

そして、そう言うと、悠の方を見る。

どうやら、やってみろってことらしい。

とはいっても、期待はしていないだろう。

通常そのレベルに達するまで、1年はかかる。

天才のキュアですら、それをするのに一月かかったのだ。

だから、まあ、いきなりできるとは……

そう思いながら、観察していたのだが、すぐに表情が変わった。

悠のまわりに、あふれ出した魔力が充満しているのだ。

もちろん、それが導き出していることは一つだ。

悠はそのイメージを完璧にこなしているのだ。

悠にもそれが感じ取られるのだろう、それを止めると、ぱっとキュアのほうへと向き直ると、

「できたけど、こんな感じでいいのかな？」

そう訊ね返す。

あくまでもイメージをするだけなので、聞いてみたところで分かるはずもないのだが、素で訊ねている。

まあ、天才だから、もしかして、と言う思いがあったのかもしれないが。

それはさておき、いきなり、非現実的なものを目の前に突きつけられ、少々驚いた、キュアだったが、それでも、師匠として、表情に

は出さずに、

「んじゃあ、イメージすることもできるようになったみたいだから、次に進むわね」

さらに先へと進めることにした。

「魔法と言うものは、皆が呪文とか魔方阵を使って、使う物だって勘違いしてるけど、実は違うの。実際の魔法はもっと単純で、簡単な奴ならイメージするだけで使えるの。たとえばこんなふうだね」

そういうと、キュアは悠の目の前に手をかざすと、ポツ、と小さな炎を出した。

それこそ、実戦では全く使えないような小さなものだけれども

「すっげえ!!」

悠にとっては、驚愕に値することらしくしきりに驚いている。

そして、それに気を良くした、キュアは続ける。

「でも、もちろん、イメージだけじゃどうしようもない物だってあるわ。そのときに使うのが、呪文や魔方阵ね。まあ、簡単に言うと、イメージを増幅するためのものって感じかしら。でも、まあ、私ぐらいになれば、ある程度の魔法なら詠唱無しでできるわ。たとえばこんな感じだね」

そういつて、手を空にかざす。

けれど、魔法を知ってるものなら分かることだが。

キュアの手に、魔力が集まっていつている。

そして、次の瞬間には、一抱えぐらいありそうな火球が生み出されていた。

悠はそれを呆然と見ることにできなかった。

けれど、それも束の間の事。

目の前にある火球をひとしきり凝視した後、

「すげえ!!！」

やはり、おおはしゃぎし始めた。

「まじ、すげえよ、これ!!！ねえ、いったいどうやってやったのさ!!！つうか、かっけえ!!！やっぱり、天才の名は伊達じゃないよ!!！ていうか、俺もそれできるようになるのかな!!！てか、できるよね!!！」

隣にいるキュアといえば、あまりのおおげさにため息をついている。

まあ、恥ずかしいというのもあるのだろう。

大勢の人の前でこうもおおはしゃぎされてしまえば。

でも、まあ、素直に感嘆されているのだから、悪い気はしない。

むしろ、嬉しいぐらいである。

さらに気をよくしたキュアは「

まあ、今の私がやったことは、呪文の省略なんだけど、これは、まあ、簡単よ。イメージすればいいだけのこと。そのイメージ力が強ければ強いほど、はつきりとしたものになりやすいわ。その代わり、魔力の供給も忘れちゃだめよ？まあ、イメージさえしつかりとすれば、魔力もそれに呼応して、集中していくけど、やっぱり、イメージするときに、魔力を流し込むイメージをするかしないかでは、威力の違いも出てくるわね。だから、しておいたほうが無難よ」

説明を始める。

どうやら、教師としての才能もあるみたいだ。

もちろん、悠もそれをすぐに理解できたので、言われた事を思い出して、実践し始める。

もちろん、一朝一夕でできることではない。

ある程度魔法の才能がある人でも、キュアのしたことを同じくするにはかなりの時間がかかる。

よって、すぐにできることは……

「あ……」

できた。

さすがに、キュアまでとはいかないが、大体成人男性の頭ひとつ分ぐらいの大きさのものが出てきた。

キュアといえば、先ほどと同じく呆然としている。

あくまでもいうが、並みの才能でも、詠唱なしで使えるようになるにはかなりの時間がかかる。

キュアのような天才でも、既存の魔法を覚えてから、省略なしへとたどりつくには、1週間はかかる。

体に覚えこませる必要があるし、それ以上に制御も難しいからである。

けれど、悠はそれをいともたやすく成し遂げて見せた。

いや、それだけではない。

その火球に魔力を送り込み、さらに巨大化させている。

もちろん、これも技としてある。

ただし、かなりの高等技術で、まず間違いなく、初めて習ったものができるようなものではない。

キュアは目の前にいる少年の才能の桁の違いを目の当たりにして、少々驚きが隠せなかった。

「ねえ……」

目の前にある非現実的なことに心奪われていたキュアだったが、悠の声を聞いてわれに返った。

「これ、どうすればいいの??」

悠はそう言って自分の手のひらにある火球を指差す。

さすがにいつまでも持っておくわけにも行かない。

キュアもそれを思い出したらしく、慌てて氷球を生み出し、それにぶつける。

相殺された火球は消えてなくなった。

それに安心した、キュアはいったん呼吸をすると

「ちなみに、相反する属性の魔法をその対象魔法にぶつければ、相殺することができるわ。さっきみたいにね」

今起きた事象のことに説明する。

説明したのだが、

「その前に俺の腕どうにかしてくれませんか」

悠が情けない声を上げていた。

よくよく見てみれば、先ほど掲げられていた腕がそのままの形で凍っている。

おそらく、キュアの放った魔法のほうが強すぎて、余波を受けてしまったのだろう。

それにすぐに気がついたキュアは、またまた慌てて、今度は炎を生み出す。

そして、生み出したものをそのまま悠に放つ。

しかし、放ったのはいいのだけでも。

「あっちい！！！！」

今度は、炎の勢いが強すぎて、焼け焦げてしまった。

ここまでくれば、もう重症だ。

氷の魔法を使ってみたところでどうにもならない。

悠は今にも失神しそうだ。

現に、焦点が定まってない。

今度こそ、本格的に慌てた、キュアは

『我が声を聞け、我が祈りを聞け、そして、我が願いを聞け、癒しの神よ。ホーリーブレス』

呪文を唱え、悠の腕に手をかざす。

その瞬間に眩い光が悠を包み、それが消えると、

「これでよし、と」

完全に悠の腕は元に戻っていた。

それで、悠もようやくわれを取り戻し、自分の腕をしげしげと見ると、

「ねえ！！今のって、回復魔法ってやつ？？やっぱり、そういうのもあるんだ！？」

また、騒ぎ始めた。

キュアもいい加減小うるさくなってきたのだろう、こめかみのあたりに青筋が浮いてき始めている。

けれど、腕を氷漬けにしたり、焦がしてしまったことがあるため、思い切っていえない。

けれど、やはり、うるさい。

ならば……

『ダウンスリープ』

眠らせる魔法を使うことしかなかった。

いや、それはそれで、間違いなんだろうが、頭に血が上りかけているキュアにはわかるわけもなく、使ってしまった、悠はそのまま眠り

こけてしまった。

それから数分後に、悠は目を覚ました。

キュアが魔法を解いたからだ。

けれど、解いたはいいがが、さすがに今回は、さすがの悠も少々不貞腐れているようだ。

まあ、氷漬けにされたり、焦がされたりした後、眠らされたんじゃ、少々頭にきても仕方が無い。

原因は自分にあれど。

悠にもそれぐらい分かっていた。

だから、表きって非難はしないが、それでも視線が少々非難がましくなっている。

そんなわけで、しばらくなんともいえない雰囲気があたりを満たしていたが、それも待ち人が来ることで解消された。

ようやく、リエラが戻ってきたのだ。

けれど、戻ってきて早々、キュアを見たりリエラは、

「あら、もう、女を引っ掛けてきたの。そう言うことに関する腕だけは確か見たいね」

悠に向かって毒をぶちまけた。

悠の方は、ここに来るまでの会話でなれたので、なんとも無い顔をしていたが、キュアの方は哑然としていた。

彼女が予想していたお姫様、そう言うものとは違っていたからだ。

確かに、言葉遣いはそれと言ってもいいだろう。

けれど、言葉の中に含まれている、毒は、そうとは思わせない。

なにせ、キュアが想像していたのは、こんな感じだったのだ。

「お待たせしました。さて、行きましょう」

けれど、現実とは、それとはまったく違っていた。

それを、リエラに期待するな、そう言いたいのは、やまやまだが、何も知らないキュアには無理だろう。

それに、誰しも、一国のお姫様、そう言うのには、幻想を持ちたいものだ。

まあ、その幻想も完璧にぶち壊されてしまったが。

それで、キュアは呆然としているわけだ。

けれど、それでは話が進まない。

悠は、少々めんどくさそうにしているが説明をし始めた。

彼女のこと、そして、その彼女に自分が師事する事。

それをかいつまんで教えた。

リエラは一瞬考えて、少々難しい顔をしたが

「まあ、いいでしょう」

了承を出した。

「あなたと、二人きりよりは万倍ましですからね」

その後、毒を付け加えたが。

第六話 珍道中

さて、早速旅をはじめた三人だったが、やはりというか、あまり言い雰囲気とはいえなかった。

あいもかわらず、リエラが悠の事を目の敵にして絡んでくるからだ。

例えば、

「へえ、この街道って、リシュの街道って言うんだ」

と、小声で、悠が呟けば、

「何も知らない無知は黙ってさくさく歩いていればいいのよ」

なんて事を言い出し、挙句のはてには

「まあ、無知なあなたじゃ、私たちが言ってる事の一万分の一もわからないでしょうけどね」

なんて事を言い出す。

徹底的に交戦態勢のリエラだ。

けれど、それとは逆に、今の悠は落ち着いていた。

というよりも、完全に視界の外といった感じだろう。

リエラの毒舌が披露されるとすぐに、魔法の練習を試みたり、キ

ユアに話し掛けたりしている。

もちろん、キュアと話す内容は、当然の如く魔法関係の事だ。

やはり、早く、マスターしたいのだろう。

とはいっても、どんなに頑張っても、通常、キュアの位置に辿り着くまでは十年以上は掛かる。

まあ、魔力を操る事に関して、ぴか一の才能を誇る悠なので、それよりも早く済むかもしれないが。

キュア自身もそれを感じているのだろう、素直にどんどんと教えていった。

しかも、その才能に決して嫉妬する事無く。

そこが、キュアが魔術師に相応しい点だ。

魔術師の使う魔法は、全て自分の精神力に大きく関わっている。

そのため、強靱な精神力を持つものは、威力の高い魔法を扱う事ができる。

けれど、逆に、精神が脆弱だと、魔法もまたそれと同じようになってしまう。

そして、キュアは前者の方に当てはまる。

小さな事にはこだわらず、常に自分自身に向き合い、そして自分を

高める。

そして、決してその心根を折らさない。

その不屈の精神こそ、彼女が天才魔術師であるが所以でもあるのか
もしれない。

まあ、ある程度の魔力も必要だが。

と、それはさておき、三人はなんだかんだと言い合いをしながらゆ
っくりと街道を進んでいく。

ちよつとした、言い合いーリエラが悠に噛み付いてただけだがー
以外には何もなかった。

まあ、基本的に街道はそれぞれの領主がそれぞれ自警団を擁してい
るので、安全なのだ。

それこそ、モンスターや盗賊が現れること事態稀なぐらいだ。

悠も最初こそ冒険といわれて、少々気を張っていたが、危険が無い
と知ると、すぐにいつも通りだ。

のんびりと遠足気分で歩いている。

まあ、それが気に食わないー悠のする事全てが気に食わないのかも
もしれないがーリエラは

「ばかみたいに、緩んだ顔をしてないで、しゃきつとしたらどうな
の」

すぐに毒を吐く。

「まあ、あんたみたいなのは、できないかもしれないけどね」
聞いているキュアも顔をしかめるぐらいの毒を、だ。

けれど、それでももう悠は気にしない。

「なあ、もうそろそろ日もくれるし、どっかで宿をとらない??」
おもいつきりリエラの事を無視して、キュアに話し掛ける。

「そうねえ。近くに集落があるから、そこにしましょうか」

キュアのほうも、いつまでも、リエラの毒舌を聞きたくないのだろう、すんなりと答える。

「了解」

悠も自分自身が言い出したことなので、別に異論があるわけでもなく、すぐに了承を出す。

そして、ひょっこりと前に一歩出ると二人の方へと向き直り、

「んじゃあ、さっさと行きますか?」

二人をそう言って促す。

「あなたに言われるまでもないわ」

まあ、約一名それに腹を立てているものもいるが、

「了解」

誰も、それに対しても異論を出す事無く、即決する。

まあ、早めに行っておかないと宿がなくなってしまうので、当然なのかもしれないが。

「よし、レッツゴー♪」

それはさておき、三人は宿を目指して歩き始める。

「ちょっと、悠。あなた、集落への道知ってるの?？」

「いや、知らない」

「これだから、無知は」

その道程が楽しく弾んだものではないかもしれないが。

集落へと向かって歩き始めて、2時間。

ようやく、今日の宿へと辿り着いたのだ。

「やっと着いた」

悠はそう言うとおもいつきり、ベッドの上に突っ伏した。

ただ・・・

「全くあの程度で疲れるなんて、だらしないわね」

三人同室だが。

「というよりも、どうして、私がこんな何をしでかすか分からない馬の骨と同室なのよ」

それが気に入らないのだろう、また悠に絡み始める。

「うるせえ。俺だって、あんたみたいな過大被害妄想女と同室とか止めて欲しいね」

ただ、今回はさすがに悠も絡み返した。

やはり、変態の野獣扱いされたくは無いみたいだ。

まあ、男なら誰でもそうなのだろうが。

「んじゃあ、あんただけ、外で寝てきたらどうなの??」

「そう言うあんたこそ、外で寝てきたらどうなんだよ」

「何よ」

「なんだよ」

その結果、出会った当初のような言い合いを続けてしまう羽目になる。

キュアといえば、溜め息をついて成り行きを見ているだけ。

この二人の言い合いをとめようという気は無いらしい。

まあ、一度止めてみたところで、またすぐに起きるのだから、そう思っても仕方ないかもしれない。

止めてみたところで、無駄でしかないのだ。

なら、無駄に余力を使うよりも、さっさと休んでしまった方が、利口だ。

というわけで、キュアは部屋の外に申し訳程度に作られている流しで、顔を洗うと、さっさと寝てしまった。

そして、結局いつまでも止まらない言い合いを続けた二人が、寝ることになったのは、夜もかなり更けてからの事だった。

第七話 体調管理は冒険者にとって鉄則です

「眠い」

これが目を覚まして初めての悠の発言だった。

こんな事を悠が言えば、リエラも黙っていないだろう。

だろうけれども、今回は違った。

リエラもまた、非常にまだ眠たそうな顔をしている。

悠に絡むだけの気力も無いのだろう。

「眠いのは分かるけど、それは自業自得。さっさと朝ご飯を食べて、進むわよ」

けれど、そんな二人とは対照的にキュアは全く昨日どおり。

さすが経験者だ。

旅慣れしている。

まあ、十分な睡眠さえとれば、誰だって大丈夫だろう。

悠とリエラが間違えたただけだ。

悠とリエラもそれがわかるのだろう。

それに対して、何か言うわけでもなく、キュアに従って歩く。

下に降りると、食堂があった。

街道そばにある宿屋はどこもこんな感じだ。

まだ朝も早いので、あまり人はいない。

けれど、それでも数人は居た。

そして、その数人が全員の視線が、降りてきたリエラ、キュアに集まる。

確実に並以上の容姿を持った人たちだ。

そうならない方がおかしい。

だからこそ、最後に降りてきた、悠は一番いやな思いをする事になる。

ここまで来るまでもそうだったが、明らかに周りが悠を見る視線は冷たかった。

冒険者というものは大抵は男ばかりだ。

たまに女もいるが、その場合は大抵一つのパーティに一人か二人程度だ。

もちろん、比率は男の方が多い。

けれど、悠のパーティを見てみればどうだ。

明らかに女の比率が多い。

しかも、綺麗どころばかりが、だ。

こうなれば、妬みの視線で見られても仕方がない。

悠としては、元々好き好んで今の状況にいるわけではない。

だから、どうしても溜め息をついてしまうことになった。

悠一人だけ、強烈な視線を浴びる事になった朝食を終えると、三人は出発した。

ただ、外に出ても相変わらず悠だけは嫉妬の目で見られつづけたが。

そして、それと同時に奇異の目でも見られることになる。

今回泊っていた宿は、冒険者用の宿だった。

施設としては粗末だが、安価なために、冒険者たちに重宝されている。

だからこそ、宿内では羨むだけの視線だった。

けれど、街道に出れば、違う。

冒険者だけではなく、普通の旅行者、端またちよつとした買い物のためのお出かけ、そんな人たちもいる。

よって、奇異の目で見られることもあるのだ。

まあ、もちろん、その目には妬みの意味も含まれているが。

それも、当然だろう。

やはり、旅の道連れは綺麗過ぎる。

一人は気高く凛とした強さをかもし出す少女。

もう一人は、涼やかにも麗しい女性。

男の嫉妬を買っても仕方がない。

ただ、やはり、悠が望むべくしてこうしたわけではないが。

「なあ、今日はちゃんと予定を立てて行かないか？」

だからだろう、周りの視線をごまかすようにして、二人に話し掛ける。

「へえ、役立たずのくせにちゃんと……」

「経験者としての意見を聞かせてくれない、先生？？」

いや、キュアに対してだけだろう。

すでに、リエラとまともな会話ができるとは思っていない。

まあ、あれだけかみつかれれば、そんな気も起きないだろう。

「そうねえ。日が暮れるまでには、宿に入っておきたいから、ルザイアでいいんじゃない？ あそこは、確かこの時期近くの街で大きな市があるから、臨時の宿もたくさんあるだろうし」

「へえ。市か……。んじゃあ、そこにしようか。道案内はよろしくね」

「うん。任せて。」

「私を無視するつもり??」

それでも、なんとかして話に入ろうとするも

「んじゃあ、出発」

あっさりと無視されてしまったが。

ルザイアに着いたのは夕暮れ時になってのことだった。

本来なら、夕暮れ前につく予定だった。

その予定が崩れた理由は

「ほら、さっさと宿を探すから、しゃきしゃき歩きなさい。」

悠とリエラ、二人のせいだった。

昨日しっかりとした睡眠をとっていなかったため、疲れが残っていたのだ。

そのため、ペースが思ったほど伸びず余計に時間が掛かったのだ。

しかし、まだ悠はまともだった。

この世界に来てからなのだが、身体が軽いのだ。

それは昨日も感じた事だったが、普段どおりに歩こうものなら、二人を置いていってしまう形になった。

だからこそ、まだまともについてこれた。

けれど、リエラはそうじゃない。

キュアもそうだが、リエラも女の子にしては体力のあるほうで、しっかりと歩いていた。

けれど、それはしっかりと体力があった上での事で、しっかりと体を休めていない今日はそうもいかない。

なんとか、キュアについて行っている悠よりもさらに遅く、少しずつ遅れていた。

もちろん、一応名目上二人は、リエラのことを警護しなくてはいいけない。

悠としては、そんな事は絶対したくないだろうが、だからといって放って行く訳にもいかない。

そのため、結局ペースダウンする事になり、遅くなってしまったのだ。

「うん。今日はちゃんと二部屋取れたみたいね」

それでも、なんとか部屋は二つ確保できたみたいで、キュアが安堵の息を吐く。

また、寝不足でペースダウンって言う事だけは勘弁してもらいたいのだろう。

「そうだね。俺もゆっくり休めるよ」

そして、悠としては、昨日と同じように無駄な言い合いはしたくないのだろう。

昨日今日と歩いてばかりだったため疲れている。

その疲れをさっさと癒しておきたいのだろう。

まあ、お約束なら、ここでリエラが悠の発言に対して嘸み付くところなのだが、

「私はさっさと休ませてもらうわ」

疲労がピークに来ているのだろう、そんな余裕もなく、二人を置い

て部屋に入る。

明日のための鋭気を養うにはちょうどいいだろう。

第八話 二人でお出かけ

「なあ、先生、市ってどんな感じなの??」

リエラが部屋に入るのを、確認すると、悠はキュアにそう尋ねた。

まあ、神疲れないための予防みたいなやつだろう。

ほとんど、気力の残っていないリエラなのだから、それも無用な気もするが、念には念を、と言う事だろう。

「そうねえ。街の広場にいろんな出店が出てる、て言う感じかしら」

その悠の質問に対して、キュアは苦笑混じりで答える。

その飯の返答しか出来なかったからだろう。

できれば、もう少し詳しく言いたかったんだろう。

けれど、残念ながら、詳しく言おうにも、言えるような事じゃなかったのだ。

「そっかあ」

しかしながら、悠はそれだけでも満足そうで、しきりに頷いている。

悠の世界、つまりこちらの世界では、市はさほど身近なものではない。

知っていると言えば、青果市場や魚市場などの業者が買い付けるような市ばかりだ。

だから、悠にとっては、キュアの説明だけでも十分だった、と言うわけだ。

そして、それと同時に

「んじゃあ、ちょっと行ってみようかな」

好奇心を揺さぶるにももってこいだった。

「ええ!!」

けれど、それはキュアにとっては驚きだった。

昨日今日とずっと動き続けている。

しかも、まともに体を休めずに、だ。

さらに言えば、キュアもすぐにわかった事だが、悠は旅なれしていない。

全くといってもいいほどだ。

だから、当然リエラのようにおとなしくしているものだと思っていた。

「何驚いてるんだ？」

けれど、悠にしてみれば、それを何で驚かれるのかが逆に不思議だった。

「えっと、あなた疲れてないの？」

その反応があまりにもけろりとしたものだったので、逆にキュアは面食らってしまった。

けれど、それを何とか押さえ込むと、悠に聞き返す。

「いや、疲れてるけど、別に動けないわけでもないけど？だから、折角だし、社会見学の意味で、市に行ってみるのもありかなと思って」

それに対して、悠はあっけらかんと答える。

どうして、そんな事を訊かれるのか全く分かっていないのだろう。

「で、折角だから、キュアが案内してくれない？」

だからこそ、こんなことをのんびりと言えるのだ。

当のキュアは、げんなりとして頷く事しか出来ないでいた。

「ねえねえ、これは何？て、これは？？」

悠は市につくと同時にはしゃぎ始めた。

ルザイアに到着した時とは大違いだ。

その変わり様を見て、キュアも呆れる事しか出来ない。

「へえ。ほんと初めて見る物ばかりだ」

けれど、悠はそんな事お構いなしで、いろんな出店を見ては、一人で興奮している。

田舎から出てきてはじめて都会に来た子供と同じだ。

いや、図体が大きいため、さらにはた迷惑だから、もっと困るか。

ある程度市を見回った後、出店で売っていたものを食べながら、市の中央へといってみた。

出店で聞いた話だが、ちょっとしたイベントがあるらしい。

折角こうしてきたのだから、記念に行ってみるのもいいだろう。

そう言うことになったのだ。

もちろん、キュアの了承も取っている。

むしろ、キュアのほうが乗り気だった。

こう言った市のイベントには、大抵競売もはいつている。

その競売で、無銘の業物が出る事も多々ある。

もちろん、その業物を選ぶにはかなりの目が必要となるが、今までダンジョンなどで、鍛えたキュアに掛かれば、お手の物だ。

あっさりと見破る事ができる。

「て、すごい人ごみだな」

中央に着てみれば、すごい人ごみだった。

まあ、この市のメインイベントなんだから、当然なのかもしれない。

「どうやら、始まってみるみたいね」

その人ごみを抜けると、ようやく視界が広がる、

そして、目の前には大きなステージ。

そこには、色々な品物が並べられており、今は、剣を競売にかけている。

しかし、たいしたものではないらしく、キュアは全く興味を持っていない様子はない。

それは、悠も同じだった。

まあ、普通の剣では軽すぎるし、今の剣でも十分なのは違いないので、当然だ。

競売も進み、やがて最後の品となる。

悠は別に物を買いに来たわけではなく、単に興味本位でここに来ただけなので、ほくほく顔をしている。

どうやら、十二分に楽しめたみたいだ。

そして、それに代わって、渋い顔をしているのがキュアである。

全く掘り出し物を見つけないことが出来なかったのだ。

もちろん、それなりにいいものは出た。

出たのだが、キュアがお気に召すようなものは一つとしてなかったのだ。

これは、失敗したかな、そう思っている。

「それでは、最後の品です」

そして、最後の品となる。

「古の時代から存在する、邪悪の化身。全てのものに災いを振りまく存在として恐れられる者。その者の中でも特に忌まわしいとされる者。そう、魔族です。今回の最後の品はこれ、魔族の娘です!!」

司会者が大々的にそう叫ぶと、ステージ上にイスを持ってくる。

そこには、見た目だいたい12、3くらいの少女が目隠しをされて縛り付けられている。

客は大騒ぎしている。

当然だ。

魔物と言えば、人族にとっては、恐怖を振りまくだけの敵。

しかも、その中でも最高ランクに位置する魔族がいる。

慌てるのは当然だ。

「ご安心下さい。この娘は、しっかりと呪具により魔力を封印されているため、何もできません。たんなる娘と同じです」

けれど、次の瞬間、先程まで騒然としていた場が静まり返る。

そして、それと同時に競売が始まる。

しかも、先程とは比べものにならないほどハイスピードに。

「な、なんだよ、これ」

悠はいきなり活性化し始めた競売を見て驚いた。

いや、そもそもいきなり人身売買をはじめたこと事態にも驚いている。

まあ、魔族は人間ではないので、人身売買とは言い切れないが、悠にしてみれば同じだ。

「どうなってるんだよ」

わけがわからなくなり答えが欲しいんだろう、キュアに訊いてみる。

「うん?? 単なる魔族の娘の売買でしょ?? まあ、金持ちの道楽ね」
けれど、キュアはなんでも無さそうに、いや、むしろ面倒くさそう
で、どうでもよさげに答える。

実際彼女にしてみればどうでもいいのだろう、魔族の事なんか。

彼女もこの世界の人間。

魔族には嫌な思い出があるのだろう。

だからこそ、どうでもいいような態度を取るのだ。

「何で、そんな事してるんだよ。おかしいじゃないか!!」

けれど、悠にとってはそれは異質なものでしかなかった。

「何がおかしいの?? 元々、魔族って言うのは、私たちの故郷を奪
ったりしたりしてきた存在よ? それに比べればまだかわいい方よ」

悠の中ではそんな事はないことだ。

しかし、それはあくまでも悠にとってであって、キュアとは違う。

キュアにとって魔族は忌むべき存在であり、決して人の上にあって
はいけない。

そう言うことになっている。

むしろ、この世界の住人がすべてそうだ。

全ての人間が魔族を嫌い、そして忌んでいる。

「でも、あの子はまだ子供じゃないか。しかも、キュアやリエラと違って血の匂いがしない。まだ何もしてない子かもしれないだろう」

悠もそれを感じられたんだろう。

だろうけど、それを素直には認められない。

例え魔族であっても、見た目はまだ子供。

しかも、全く汚れていない。

悠にはそれがなぜかわかった。

この世界に来て、全ての感覚が鋭くなっている。

そして、嗅覚も、まただ。

もちろん、血の匂いがぷんぷんするわけではない。

ただ、直感にも似たようなものを感じる。

それぐらいのものだ。

「なのに、どうして!!」

けれど、それでも悠には十分だった。

キュアに訴えかけるようにそう叫んだ。

「けど、だからといって、これからずっと殺さないとは限らない。それなら、今のうちに手を打っておいたほうが無難でしょ？自分のみを守るために戦うすべを持つ、それと同じような物よ」

けれど、キュアは悠の言葉に全く耳を貸さなかった。

価値観が違うのだ。

悠はここまで価値観が違うとは思わなかった。

そもそも、悠は魔族に何もされていない。

だから、魔族に対して、何も感じていない。

全く未知の存在なのだ。

だから、恐怖を感じようが無いし、嫌う事も出来ない。

悠は、ステージを見上げた。

並みの人間以上の域まで達している悠の目に競売にかけられている魔族の少女の姿が見える。

その身体はどこか震えている。

当然だ。

もし、彼女がその姿と同じくらいの年齢なら、これはまさしく恐怖でしかない。

たくさんの人間の狂気と欲望の甲冑に一人で放り込まれる。

そんなものの耐えられるようなものではない。

悠は放っておけなかった。

確かに、ここまで来るのに魔族に着いているんな話を聞いた。

どんだけ、残虐な事をしてきたかも知っている。

けれど、それでも、この状況を甘んじることは出来ない。

それは単なる偽善なのかもしれない。

けれど、悠にとってはそんなことはどうでも良かった。

これが例え偽善だったとしても、それでかまわない。

ここで何もしないで後悔するよりかはましだ。

「1000万リオラ!!」

悠は、50万リオラのところでうろうろしている状況で一気に高値を吹っかけた。

その一言に場が静まり返った。

「おおっと、ここで、本日の最高値ができました!!」

しかし、それも一瞬の事で、一気に場が盛り上がる。

いくら街道沿いとは言え、ここもいわば辺鄙な田舎町である。

そんな田舎町の市でこんな高値が出たのだ。

盛り上がらないほうがおかしい。

「1000万リオラ。この高値に挑戦する人はいますでしょうか？
どうでしょうか？」

さらに、視界がそれを盛り上げる。

けれど、すでに勝負は決している。

こんな田舎町で、1000万リオラを超えるお金を持っているもの
がいるはずが無い。

誰もが沈黙をした。

「誰もいないようですね。ならば、1000万リオラで落札です。」

そして、悠の落札が決定する。

途端に場が騒ぎ始める。

「ちょっと、悠。あなた、何をするつもり」

キュアも一瞬呆然としたが、落札が決まった事で我を取り戻した。

けれど、悠はキュアの問いには答えず、ステージに立つと

「ほら、代金だ」

代金分の金貨が入った袋を手渡す。

「はい、確かに受け取りました。」

その中身を確認をすると

「はい、こちらが商品です。」

その魔族の少女をイスごと渡す。

どうやら、下に車輪がついているらしい。

悠はそれには何も答えず、イスを押しながら、ステージを降りる。

そのところどころで、完成と拍手が起こる。

けれど、それでも悠はそれを見捨てず、競売会場から離れていった。

第九話 決して埋まらない価値間の溝

「立ち上げられるか？」

市があつた場所からずっと離れた林へと行くと、少女を縛り上げていたものを全て取り払い、そう尋ねる。

けれど、少女は何も答えない。

先ほどの恐怖のせいなのだろう。

震えきつて答えられそうにも無い。

「くそがつー！」

それを悠も感じ取れたのだろう、おもいつきりそばにあつた木を蹴る。

怒りと異常なまでに上がっている身体能力のせいで、木に足がめり込む。

「ひっ」

しかし、少女の事を思い出して、後悔をした。

案の定、それにびっくりしたのだろう少女は悲鳴を上げるとさらに身をすくませる。

例え、それが自分に向けられたものでなくとも、気が昂ぶっている

今の少女は全て自分に向けられている、そう感じてしまうのだ。

「すまない。別に君が悪いわけじゃないんだ」

少女が悪いわけではない。

その旨を伝えようと謝ってみるが、やはり怯えているだけで、どうとも反応しない。

悠は内心で舌打ちをした。

もちろん、あの市の主催者だ。

確かに、魔族はこの世界の人々にとっては、忌むべき存在なのかもしれない。

だからと言って、この仕打ちは無いと思う。

これでは、この少女があまりにもかわいそうだ。

悠は、少女にゆっくりと近づくと、優しく頭を撫でてみる。

今の悠にはこれぐらいしか出来ない。

けれど、それでも十分だった。

最初こそは身体をすくませていたが、すぐにそれもなりを潜めると、震えが止まった。

「ちょっと、私をおいて行って、帰れるの？」

ようやく、少女が悠になれた頃になって、キュアが追いついた。

その声はどこか非難がましい。

それは、置いていかれたことに不満を持っているからなのだろうが、それだけでもない。

おそらく、魔族の少女の方が優先権が強い事にもまた不服なんだろう。

自分が最も忌み嫌う魔族なんかよりも、ぞんざいに扱われた事が。

「ああ、悪い。て、この人は、俺の魔法の師匠で、キュアフロート・フルミエル。あ、ついでに言っておくと、俺の名前は城谷悠。こっちでは、悠城谷だったかな?？」

けれど、そんなキュアの心情を無視して、さっさと話を進めていく。

まあ、気にしても仕方ないが。

それに、できるだけ友好関係を築いておいたほうがいいだろう。

悠は、この魔族の少女とは、別にどうこうするつもりは無い。

あくまでも、あのまま放っておく事が出来ないでいたから、競り落としただけだ。

まあ、それ自体に、悠は嫌悪感を抱いているが。

「あ、えっと。私の名前は、フェルナ・ルビッツで」

それは、さておき、少女も悠に習って、自己紹介をしようとした。

まあ、ある種義務感から来るものだろうが、それでも、答えないよりは格段にまだ。

「ちょっと、悠、勝手に人の名前を魔族なんかに言わないでくれる」
だけれども、それを面白く思わない人もいる。

もちろん、キュアだ。

キュアにしてみると珍しいが悠の発言に早速噛み付いた。

まあ、大嫌いな魔族なんかに、名前を教えたくないのだろう。

「いいじゃんか、別に。初めて会う人には自己紹介するのは当然だろう?」

けれど、悠にはそんな事は関係ない。

もちろん、キュア的心情だって分かっているが、譲れないものもある。

この初めて会う少女を、無駄に傷つけたくはない。

「それに、これから、いっしょに旅をする仲間なわけだしさ」

そして、それと同時に無責任な事もしたくなかった。

こんな所で、少女一人で放っていけるわけも無い。

もちろん、キュアを驚かせる羽目にはなったが。

「ちょ、ちよっと、待ってよ。いっしょに旅をするってどういうつもりよ」

キュアから出てくる問いはそれは当然の事だった。

いきなり、魔族の少女を競り落としたかと思うと、次は旅の仲間。

キュアにしてみれば冗談じゃない。

リエラだって許すとは思えない。

「だからといって、放っておくわけには行かない。見たところ、この子は、フェルナだっけ、たいした力も持っていない。こんな所に捨てていけば、またさっきと同じ目に会うのが関の山だろ」

けれど、だからといって、悠にはそんな無責任な事は出来ない。

忌み嫌われているからこそ、フェルナは危険なのだ。

目の敵にされてしまう。

そんなことを許容できるはずも無い。

「だからと言って、そんなの連れて行けると思ってるの。私たちは、王宮の使いとして動いているのよ。その王宮が、魔族なんかを引き

連れてるなんて思われたら、王家に泥を塗るのと同じなのよ」

しかし、キュアにだって守らないといけない筋がある。

どちらとしても、譲りようが無い。

結局話は平行線へと向かうことしかできず

「そこで、頭でも冷やしてなさい。この偽善者!!」

最後にそう言うと、キュアは悠とフェルナを置いて、戻っていった。

「そっちこそ、頭を冷やしてこいよ」

そして、悠は悠でそれに返すように吐き捨てるように言った。

フェルナと言えば、ずっとうつむいているだけで、何も言わない。

いや、いえないのだろう。

いくら、幼くても分かる。

誰のせいで、この二人が喧嘩したのかが。

だから、何もいえないのだ。

キュアが二人を残して、この場から去ってからしばらくの間沈黙で満たされていたが

「ごめんな?」

悠の謝罪の言葉でそれも壊された。

けれど、フェルナにしてみれば、逆に不思議でしかないみたいで、首をかしげている。

「いや、なんかうちの仲間が悪い事をいってさ」

それも、悠がしっかりと付け加える事で、ようやく合点がいった。つまり、キュアのかわりに悠が謝っている。

そう言うことだ。

けれど、フェルナにしてみれば、むしろ逆だ。

自分が謝りたいぐらいなのだ。

しかしながら、なんと言っているのか分からない。

まだまだ幼いフェルナにこんな時はどういえばいいのかなんて分からない。

「えっと、私こそごめんなさい」

それでも、何も言わないわけにはいかない。

そう思って謝罪の言葉だけ出してみる。

もちろん、許してもらえるなんて思っていない。

むしろ、逆に怒られるかもしれない。

そんな風に思える。

これじゃあ、何を謝っているのか分からない。」

それが、辛くて、そう言った後、フェルナは、目を伏せる。

いや、それだけでなく、うなだれてしまう。

ちゃんと謝れない自分にショックを受けているんだろう。

「いや、いいんだよ。別に君が悪いわけじゃないんだからね」

けれど、そんなフェルナに向かって、悠は優しい笑みを浮かべると、頭を撫でながらそう言う。

その言葉に、フェルナはさらに安心した。

うつむいていた身体はほんの少し、びくついていたのだが、それも消える。

その二人の姿は、どこか、兄妹のようにも見える。

「だから、絶対に自分を責めないでね」

そのフェルナを慈しむような目で、声で問い掛ける悠の姿は。

「さて、それはいいとして、これからどうする？」

ずんと沈んだ雰囲気。

さすがに、いつまでもそんなわけにも行かないので切り出す。

「俺としては、さっき行ったように出来れば君と一緒に連れて行きたい。手段としてはあんまり褒められた事じゃないけど、君がこうしてここにいる以上、君の面倒は見たい。こんなところで、放り捨てるのは、なんとなく気が引けるしね」

まあ、強制はしないけど。

心内の読めない笑みを浮かべると、最後にそう付け加える。

単に助けたいがために、あんな事をしたわけなので、フェルナの行動を強制できない。

そんなことをしたら、それこそ、あの場所で群がっていた人々と同じになってしまう。

だから、悠にしてみれば当然フェルナの意志を尊重する形になる。

「えっと」

けれど、その言葉を聞いて、フェルナは、困惑する事しか出来なかった。

いや、そうなるのが当然か。

いきなり、そんな事を言われても、どう答えていいのかわかるわけ

も無い。

フェルナだって、悠が普通の人間と違うのは分かる。

自分の事を助けてくれようとしているのだってそうだ。

けれど、考えはそこで止まってしまう。

結局のところ、フェルナには、悠が何をしたいのかわからないのだ。

まだ、幼い彼女には、悠が内心で考えている事なんて予測なんてつくわけも無い。

しかしながら、だからと言って、答えないわけにもいかない。

それでは、なんとなく、悠に悪いような気がする。

だから、困惑しているのだ。

そして、しばらくフェルナなりに一生懸命に考えた後・・・

「えっと、一緒には行きません」

悠にそう告げた。

「やっぱり、魔族ですから」

その言葉を聞いて、悠は何も言わなかった。

半ば以上予測できた言葉だからだ。

むしろ、それが予測できない方がおかしい。

ただ、それでも、歯がゆかった。

ただ助けたかっただけなのに、結局は傷つけてしまった。

それが許せなかった。

「それなら、大丈夫。俺がちゃんと説得する。魔族だから、その事だけで判断させない」

けれど、それでも、このままフェルナを見捨てる気はなかった。

そんな事を許せるわけも無かった。

「ううん。たぶん、無理だよ」

しかし、そんな悠とは裏腹にフェルナは首を振り、答える。

その表情はどこか寂しげに見える。

何かに絶望した、いや、あらゆるものに絶望したような表情。

容姿から想像する年には不似合いなものだ。

それは、悠にも十分に感じ取れた。

「いや、そんな事ないよ。きっと、話せば分かってくれる」

けれど、それに素直に頷くわけにはいかない。

頷けば、さらにフェルナに辛い思いをさせる事になる。

だから、必死になって説得をする。

見捨てられない。

何があっても見捨てるわけにいかない。

だから、フェルナがなんと言っても、頷く気はない。

心にそう誓った。

そう、誓ったのに……

「ううん、無理。だって、この国の騎士がたくさんの無抵抗な魔族を虐殺したんだもん」

彼女が言った理由は何とも厳しいものだった。

フェルナの話ではこうだった。

フェルナがすんでいた集落には、数十の魔族がいた。

もちろん、家族でだ。

その魔族たちは、人や他の魔族から隠れるようにして、ひっそりと暮らしていた。

争う事を嫌っての事だった。

けれど、ある日、いきなりその集落が大群で襲いかかれた。

しっかりと手入れのされた白銀の甲冑。

それは、王国に召抱えられた騎士の証だ。

どこで知ったのか、分からないが、いきなりの強襲だ。

対策を立てる余裕すらなかった。

しかも、集落には、小さな子供だっている。

おまけに、元々争いは嫌っているのです、すぐに投降した。

いや、投降しようとした。

投降を申し出た彼らを、騎士団はなんと有無を言わず虐殺したのだ。

逃げ惑う子供や病人にまでも。

それは惨劇だった。

特に、フェルナにとって見れば、悪夢だった。

それでも、フェルナは逃げられたからでした。

彼女の両親が命をかけて、逃がしたのだ。

けれど、逃げる途中で、冒険者に出会ってしまい、捕まり、売られてしまい、さっき競売にかけられたのだ。

それに対して、悠は何もいえなかった。

いや、この場合は言うべき言葉なんてない。

何を言っても、意味をなさないことぐらい、悠もわかっていた。

「悠さんは、王宮の使いなんですよね？だから、無理ですよ。王宮の人にとって、魔族Ⅱ虐殺の対象なんだから」

そして、それもまた、どうあがいても、否定できる事ではなかった。

「ごめんなさい」

そして、フェルナはそう言うとその場から去る。

それを悠には止められない。

止められるわけがない。

「ちょっと待って」

けれど、それでも出来ることは有る。

「これをもっていくといいよ。」

悠はフェルナの傍まで行くと。

餞別を渡す事。

これからの始まる旅のはなむけとして。

悠はフェルナに自分がつけていた、指輪を渡した。

「こいつは、魔除け用のマジックアイテム。魔物よけにちょうどいいと思う。それに、魔力の放出も抑えてくれるから、君が魔族だと感づかれる事もたぶんなくなると思う。」

小さなルビーが埋め込まれた金のリング。

そのルビーにはそう言う呪が駆けられていた。

これは、旅に出る前に国王から選別としてもらったもの。

けれど、今は自分以外にも、旅なれをした人がいる。

だから、悠にはそれほど必要ではなかった。

「ありがとうございます」

それをフェルナは素直に受け取った。

断れるわけではない。

フェルナにだって、悠がすごく心配している事ぐらい分かる。

だからせめて、それに答えられないなら、自分でできることなら、

全てかなえる。

そう言う心持だった。

「それじゃあ、頑張って」

悠はそう言うのと、かすかな笑みを浮かべると、手を振る。

そして、それに答えるようにして、フェルナもこくりと頷くと、歩き始めた。

第十話 パーティからの脱退

宿についた。

けれど、その顔は暗く沈んだものだ。

悔しいのかもしれない。

自分のその無力さが。

自分には、あの小さな少女を助け出す事は出来ない。

あの暗い闇の中から助け出してやる事は出来ない。

その暗闇の中を生きつづけてきた彼にとっては、それが痛いほど分かった。

あの痛みを誰も分かる事は出来ない。

有する事なんて出来はしない。

慰めなんていう言葉は必要ない。

ただ、見送る事しか出来ない。

ただ、見守る事しか出来ないのだ。

「ただいま」

悠はそういうと、自分の部屋に入る。

けれど、返事が返ってくるわけでもない。

無人の部屋。

それが、今自分の心に爪を立てる。

こらえようもない虚無感に。

「くそっ」

けれど、こんな状態ではられない。

明日からも旅は続く。

こんな精神状態じゃ、まともに、進む事は不可能だ。

それぐらいの事は、旅初心者の悠でもわかった。

だから、悠はずっと部屋から出ると下に降りる。

ちょうど、今回の宿には酒場がある。

いや、食堂が夜は酒場と化す、その表現の方が正しいか。

そして、悠がこの酒場に下りてきた理由。

それはたった一つしかない。

自棄酒。

それだった。

下に降りるとすぐに飲み始めた悠は、一時間もすれば、そうとうの量を飲んでいた。

けれど、その眼はいまだに理性を失っていない。

それどころか、逆に鋭敏さを増している。

それが腹立たしくて、さらに飲む。

そして、それが災いして、さらに精神が研ぎ澄まされていく。

悪循環だった。

だけど、止められない。

それぐらいしておかないと気がすまなかった。

それから、一体どれくらい飲んだのだろう。

普通の男なら、ひっくり返って、中毒になってもおかしくないぐらいの量を飲んだ頃に、悠の前の席に人が二人が腰掛けた。

もちろん、リエラとキュアだ。

けれど、その二人の悠の見る目は、ひどく冷たくて、蔑んだものだった。

二人にしてみれば、ここまで、酒をあおるようなものは、単なるばかでしかないのだろう。

おまけに、魔族の少女をいっしょに旅に連れて行こうとした。

そんな眼で、見られて当然なのだろう。

「あなた、馬鹿だと思ってましたけど、ここまでとはね」

リエラがあからさまな態度で悠に話し掛ける。

この有様を見て、何かいわずにいられなかったんだろう。

「魔族をパーティに?? 冗談じゃないわ。あんな、汚らしい一族と、何が悲しくて、いっしょに行動しないといけないのよ。貴方みたいに、汚らしい存在なら、ピッタリかもしれませんけど、私のような高貴な物とは相見える事などありえないのよ」

だから、すらすらと出てくる。

悠を貶す暴言が。

この二人にとっては、悠のしていたことこそ、二人を侮辱する事だった。

悠にもそれがわかった。

分かっていたけど、もしかすると分かってくれるかもしれない。

魔族の全てが悪だとは限らない。

それが分かってくれるかもしれない。

そう思っていた。

けれど

「わめくな」

もう、我慢の限界だった。

「貴様らとは、もう一緒にいる気はない。吐き気がする」

悠は、そう言うのと、立ちあがると、自分の部屋に戻る。

そして、きているものを全て脱ぎ捨てると、こっちに来る前に、着ていたものに着替えなおす。

それが終わったら、下に散らばっているものを袋に集め、下に降り、二人の前まで来ると

「これは全部返す。金は使ったが、それもここまでの、護衛代、それとこの女の紹介料と言う事にしてもらう。それでいいな？」

まずは、その袋をリエラに渡す。

そして、今度はキュアのほうに向き直ると

「あんたには、何も貸しはない。代金も払ってる。それでいいな？」

「？」

冷たく一瞥すると、吐き捨てる、宿から出る。

その瞬間に、今までむしむししていた空気が一気にすがすがしくなった。

気分も。

「ちょっと、待ちなさい。これはどういうつもりかしら」

このまま、いけたら。

けれど、キュアがそれを止める。

悠が怒るのは分かる。

しかし、どうして、脱退するのか分からない。

たかが、魔族のために。

魔族のためになぜそこまでするのかが分からない。

あやまりさえすれば、自分は許す。

そう、二人が怒っているのは、単にフェルナを誘った事に対してだけで、悠ではない。

それが、キュアの心情だった。

「いきなり、人のことを誘って置いて、いきなり自分は脱退。それは、ないんじゃないの？」

だからこそ、こんな事が平気でいえる。

悠が本当はどうして怒っているのかが分からないから。

「あんたらの言ってることは正しいかもね。魔族という存在は常に恐怖だ。だから、先手を打って、殺してしまえ。その気持ちは分かるつもりだし、魔族全体を恨む事もね」

悠はどこか寂しげに、口を開いた。

「だけど、んじゃあ、何もしてない。罪もないものを消すのか？ただ、存在自体が忌むべきものだからといって消すのか？？それじゃあ、罪人の家族を殺すのと同じだ。あいつの親は、兄弟は、人殺しだから。だから、その子供も、兄弟も、みんな人殺しかもしれない。もしかしたら、殺されるかもしれない。殺されたくない。だから、殺される前に殺してしまえ、てね。あんたらは、そんな事を平気でしてるのか？我が身恋しさのために、他人を容赦なく殺すのか？それが簡単にできるのか？いや、出来るんだろう？なら、俺は、一緒に行かない。いや、こっちから願い下げだ。そんな血なまぐさい奴らと一緒にいたくない。常に人を憎み、殺し、そして、さらに恐怖し、殺す。こんな事を延々と続けているようなやつらとはいいたくない。いつ、俺自身も殺されるか分かったもんじゃない。」

悠はそう吐き捨てると、方向転換して、走り出す。

目的地は、さっきの場所より進んだところ。

フェルナを追いかける。

そして、いっしょに旅をする。

お互いこの地は不慣れ同士だけど、まあ、どうにかできると思う。

そう、思った。

それに、二人とは一緒にいたくなかった。

悠は知っている。

罪もないのに糾弾されて辛酸を舐めさせられている人たちのことを。

そして、その人たちは、絶望し、やがて心が死んでいく。

いや、大抵はその前に殺されるか。

社会的に。

例え生き残ったとしても、心が駄目になる。

自分で自分の存在を否定して、壊れていく。

壊されていく。

だから、それを堂々とやってのけるような人とは一緒にいたくなかった。

それは、単に優越感に浸りたいだけの事なのかもしれない。

自分は違う。

自分はそんなことで差別をしたりしない。

そんなふうに思いたいだけなのかもしれない。

だけど、それでも、悠はこの二人より、フェルナを選んだ。

第十一話 フェルナ救出作戦

悠は、急いだ。

あれからかなり時間が経っている。

だから、かなり遠くに言っているはずだ。

おまけに行く場所が断定できない。

おおよそ、そのまま直進していったんだろうとは思うが、100%
ととは言い切れない。

だから、できるだけ急いで、日が昇る前に探しておきたい、手遅れ
になる前に。

そして、二人が別れた場所にたどり着いた。

ここからが、大変な事だ。

まずは、手がかりを見つけないといけない。

悠は、魔力を右手に集中させると

『ライト』

小さな光球を生み出す。

やはり、光がないと見えない。

そして、すぐに痕跡は見つけられた。

足跡だ。

はつきりとしたものではないが、あきらかにできたばかりの足跡が有る。

茂みを通ったのだから、当然だが、悠にしてみれば正直ラッキーだった。

これで、比較的楽に見つけられる。

そう思ったからだ。

悠は、その足跡を走りながら辿る。

これなら、たぶん日が昇る前に見つけられる。

そう思った。

「え?？」

けれど、足跡が急に止まっていた。

いや、草がいろんなところではげた後、また足跡はあるが、その足跡は、少し、いやかなり大きい。

それが、フェルナのものとは思えない。

ならば、どうして。

そう思って、詳しく、そこを調べてみる。

そして、見つけてしまった。

悠が渡したはずの指輪と所々にある血痕を。

悠は急いで走り出した。

おそらく、どこかに連れ去られたのだろう。

もし、ここで殺されたのなら、もっとおびただしい血溜りがないとおかしい。

当然、それを消したという可能性があるが、においもしない。

よって、連れ去られた、そこに決着がついたのだ。

それを瞬間で導き出したのだ。

もちろん、大体の場所は見当がついている。

今自分が指輪を手を持っているということは、フェルナは持っていない。

なら、簡単だ。

魔力探査をやればいい。

それぞれの魔力は独特だ。

同じように見えても、全く異なる。

そして、そのフェルナ独特のパターンを悠は覚えておいたのだ。

もちろん、探査の仕方を知らなければ、到底できない。

けれど、すでに魔法を使える悠にしてみれば、簡単なことだった。

魔力探査というものは、そもそも魔力操作の中でも基本中の基本。

魔法を使うときに、自分の魔力を探し出さなくてはならない。

その時にだって、魔力探査は行われている。

つまり、魔法が使える＝魔力探査ができて当然なのだ。

悠は、駆ける。

意外と、近くだったのだろう。

数分と走らないうちに到着した。

そこは、大きな屋敷だった。

おそらく、どこかの大商人か、貴族だろう。

目の前にある門が豪奢なつくりをしている。

まあ、前に見た王宮とは比べ物にならないほど安っぽい感じが受けられるが。

悠は、目を閉じ、集中する。

フェルナの位置をより細かく調べるためだ。

そして、感知した。

微弱ながら、感じられるフェルナ独特の波動を。

まずは、門番を無力化した。

以前、悠がはしゃいでいた時に、キュアがつかっていた、ダウンスリープの魔法だ。

夜も遅い時間なため、比較的楽にかかった。

眠っている門番を適当な茂みの中に放り込むと、中に忍び込む。

とは言っても、そんな経験など一度もないので、気配なんてものは殺せない。

できるだけ、明かりがついていない所を、中心に歩を進める。

けれど、それもすぐに止める。

周囲の気配を感じ取れたからだ。

もちろん、気配といっても、魔力の気配だが。

それはさておき、どうやら、外には、基本的には、衛兵は居ないみたいだ。

ところどころ、たまに感じ取れるが、気をつければ、軽くやり過ごせる。

悠は、素早い足取りで、明かりのついてない部屋の窓際に、へばりつくど、カシヤンと窓を割る。

隠密行動では一番取ってはいけない行動だが、もとよりそんなものができるわけでもないので、さっさと中に身体を滑り込ませる。

『ライト』

そして、それと同時に明かりをつける。

何か、武器になるものを探すためだ。

けれど、残念ながら、どこにも見受けられない。

たんなる客室のようだ。

悠は、周囲の気配を探りながら、部屋の外に出る。

部屋の外は明かりなどいらないほど明るかった。

燭台がいくつもならんでおり、そのおかげで、楽に周囲が見渡せる。もちろん、逆にすぐに見つけられるという事もあるが、見つけられ

たら、見つけられたで、倒せばいい。

今のところ、気配は一人ずつで動いている。

瞬時に倒しさえすれば、どうにでもなる。

まあ、もちろん、それだけの、実力がないといけないが、魔法がある分どうにでもなるだろう。

それぐらい、魔法というものは重宝されるのだ。

「ここか」

遭遇したときのことを考えながら、気配を探っていると、ようやく目的地にたどり着いた。

悠は、そっとドアを開けると、中に入る。

そこは、無人の部屋だ。

そして、それと同時に、フェルナがいるであろう部屋の真上だった。

悠は、まず簡単な魔法陣を床に描く。

六芒星にその周囲に二重の円。

誰にでもかける簡易なもの。

悠は、それを描くとその円の端に手を置き、魔力を流し込む。

ガンとそれと同時に、爆発音がした。

埃と粉塵が部屋中に立ち込める。

悠は、それを手で払うと、床へと視線を戻す。

床には、しっかりと穴が開いていた。

地下室。

おそらく、フェルナはそこにいる。

魔力探査をこの屋敷の手前でしたときに、感知した。

まあ、逃げ場のない場所に捕まえておかなくては、いけないのだから、自然とそうなるだろう。

それは、さておき、悠は、穴が開くとすぐにそこに身体を滑り込ませる。

もちろん、そこには、見張りが居たが、降りると同時に黙らせておいた。気配さえ分かれればどこに配置されているのが手に取るように分かる。よって、対策を立てるのも

簡単だ。

悠は、見張りを、動けないように、床に置いてあった縄で、簀巻きにしておく。

それが終わると、早速フェルナを探し始める。

地下室は割りと広く、少々探すのには手間がかかりそうだ。

悠は、溜息をつく、一つ一つの部屋を見回る。

いや、部屋ではなく、牢獄か。

壁と鉄格子だけの空間。

それを部屋とは言えないだろう。

そして、フェルナもそこにいた。

一番奥の簡素な牢獄に。

悠は、まず見張りから奪い取った剣を構えると、魔力の炎を纏わせる。

刀身が赤く光り始める。

悠は、それを横薙ぎで上下二振りする。

鉄が焼けるような音がすると、鉄格子は、崩れ落ちた。

中に入ると、横たわるフェルナを抱き上げると、牢獄から出る。

どうやら、葉か何かを嗅がされただけ、寝ているみたいだ。

何もされていない事にほっとすると、悠は出口へと向かう。

さすがに降りたところからは戻れない。

一人ならまだしも、今は、フェルナを抱き上げている。

もしものことを考えると、それはできない。

暗い地下牢を歩く。

気をつけないと、物に足を引っ掛けてしまいそうだ。

気配は、ほとんどない。

「ん?？」

もうそろそろで出口。

そう思ったところで、気配を感じた。

けれど、それは人間独特のものではなかった。

なんだろう? そう思って、牢の中を見る。

薄暗い牢の中は普通に見ても見えそうにはない。

悠は、覗き込むように中を見る。

しっかりと目を凝らして見る。

ぼんやりとながら、何かが見えた。

銀色の毛の塊。

それがたまにもぞもぞと動いている。

悠の中で、すぐに何か思い浮かんだ。

魔獣。

悪魔とは、また違う人とは違う存在。

どうやら、この魔獣もまた、フェルナと同じく、商品として捕まえられたのだろう。

悠は、フェルナを降ろすと、先ほどと同じように剣を構え、放つ。

鉄格子は見事に切られた。

そして、中に居る魔獣に向かって悠は

「これで自由だ。君の事を束縛するものはなくなった。逃げるがいい」

そう言い放った。

魔獣は、悠の声を聞くと同時に、悠へと飛び掛った。

魔獣を捕まえたのは人間。

なら、その魔獣にとって、悠は敵にも等しいのだろう。

けれど、それでも悠は、動揺一つ見せることなく、自分の周りに結界を張る。

結界魔法の中では、低級だが、それでも魔獣の攻撃を防ぐには十分だった。

魔獣のつめは、結界によって阻まれ、攻撃が悠に届く事はなかった。

「君が、人間を恨むのも分かる。だが、今は、こんなところで、そんなことをしている暇はないだろう？ せっかく自由になったんだ、さっさと逃げたほうが得策だと思うが？」

そして、いったん魔獣が距離を置いたところに、言葉を投げかける。

けれど、それは確かに正しかった。

いつ、この部屋に人が来るのかは分からない。

堂々と侵入してきたのだ、ばれてないほうがおかしい。

ならば、逃げ場のほとんどないここに居るよりかは、さっさと外に出て、安全な場所に出たほうがいい。

今なら、まだこの近くには、人の気配はない。

さっさと逃げたほうが段算得策だ。

魔獣もそれに気づいたのだろう、うなり声を上げて悠のことを牽制しながら、考える。

どうやら、魔獣の中でも、かなり知能が高いらしい。

まあ、もとより獣といっても、魔獣の中には、魔法を使う物だって居るのだ、知能が低いはずもない。

魔法を使うには高い知能が必要となる。

ぽんぽん簡単に使えるようなものではない。

魔獣は、しばらく考えた後に、さっと飛び出した。

けれど、今度は、悠は身構えたりしなかった。

魔獣は、悠の脇を通り過ぎると、さっさと出口へと向かったのだ。

悠は、その反応にほっと一息を着くと、もう一度フェルナを抱きなおし、地下室から出て行った。

一階に戻ると、かなりの騒ぎになっていた。

いろんなところから、怒号が聞こえてくる。

いろんな魔力の気配が、せわしなく動き回っている。

悠は、手近にある部屋に入ると、その部屋の窓ガラスを叩き割って外に出た。

第十二話 初めての死闘

「ち、やっぱりそう簡単にはいかないか」

悠は、目の前に立ちはだかる男を見て、思わずそう毒づいた。

窓ガラスを割り、すばやい足取りで庭園を抜けて、もうそろそろで出口、そう思った矢先に、出てきた。

しかも、はっきり言って相手は最悪だった。

悠は、走りながらも、もちろん気配を探っていた。

けれど、目の前に居る男は、それに引っかからなかった。

どんなに魔力が弱くても、それでもしっかりと把握する事はできる。

つまり、完全に気配をたっていたのだ。

それができるぐらいの、実力者と言う事だ。

はっきりいって、今の悠が勝てる相手ではない。

勝てる要素がない。

悠は、フェルナを片手で抱えなおすと剣を構える。

だからといって、戦わないわけにもいかない。

守ると決めた以上、置いて逃げるわけにはいかない。

「ほう。私と戦うか」

男もそれを見て正直驚いたらしい。

置いて逃げるとでも思ったんだろう。

悠は、それに反応することなく、しずかに腰を落とす。

特別に戦闘の訓練はした事はない。

けれど、ぼうっと突っ立っているわけにもいかないことぐらい分かっている。

悠は、しっかりと相手を見据える。

フェルナを担いでいる以上受身にならざるを得ない。

ならば、相手の動きをしっかりとみなければ、あっさりとやられてしまう。

攻撃に転じられない分、明らかに不利なのだ。

そして、戦闘が始まった。

男が獣のように低く腰を落とす。

その姿を悠が見る限り、隙らしいものは、見受けられない。

悠は、生唾を飲み込むと、魔法の詠唱に入る。

フェルナを担いでいる以上、剣は使えない。

よって、接近戦はできない。

なら、魔法を使つての中距離戦しかない。

『我が声を聞け、我が想いを汲め、我が力を喰らえ、そして穿て、
焰の顎・ウォルティッドⅡサラマンダー』

剣を男に指す。

その瞬間、剣から、焰の獣が姿を現し、男へと襲い掛かる。

ウォルティッドⅡサラマンダー。

中級炎系の魔法だ。

けれど、男は、それを難なく交わすと、地面をすべるように移動すると、悠との距離を詰める。

明らかに、入念な戦闘訓練を受けた物の動きだ。

『グレイブ』

それを今の悠では、対応しきれない。

距離を置くしかない。

無詠唱で使える魔法を、男へと放ち、さらに思いつき後退する。

男も、後退する事で、攻撃をやり過ごし、またすべるようにして間を縮める。

詠唱魔法を使わせる気はないみたいだ。

悠は、思いつきり舌打ちをすると、

『アイスランサー』

今度は槍状の氷を生み出すと、男に向けて放つ。

けれど、今度は、男はそれを身体を捻る事でよけ、そのまま突っ込んでくる。

男は、内心でほくそえんだ。

これで勝負が決まった。

そう思ったからだ。

『大地よ、紅蓮の炎を抱き、焦土と化せ・フレイムドーム』

けれど、男が構えた剣が悠に届く前に、悠の魔法が発動した。悠はアイスランサーを放つと同時に詠唱に入っていた。

悠を中心として、炎が半球状に大地を焼き払う。

そして、その炎は、男も薙ぎ払った。

半径2 mほど地面が焼け爛れていた。

魔法の威力のほどが見受けられる。

通常の人なら、これを受けたら生きていけない。

けれど、悠は構えを崩さなかった。

目の前に、男がまだ立っていたからだ。

少々、服が焼け焦げてはいるが、ダメージらしいダメージは受けていない。

どうやら、ぎりぎりで回避したみたいだ。

悠は、それを見て、また舌打ちをした。

別に、この一撃で、倒せるとは思っていなかった。

ただ、少しでもいいから、ダメージを与えておきたかった。

そうすれば、多少なりとも、活路が見つけられると思った。

けれど、それは失敗に終わり、逆にさらに状況を悪化させたみたいだ。

男の目の色が変わっていた。

どうやら、ついに本気になったらしい。

目が爛々と輝いている。

悠は、もう一度、剣を構えなおすと、魔法の詠唱に入る。

『我放つは、氷の礫…』

そして、放とうとした。

けれど、気がつけばそこには姿はない。

悠は、詠唱を中断すると、その場を飛びのく。

その直後、先ほどまで悠がいた場所に、剣を振り下ろした姿で男が居た。

あきれたスピードだ。

どうやら、先ほどまでは、かなり手加減をしていたらしい。

悠は、もうこれで今日何度目か分からない舌打ちをした。

完璧に状況は不利だ。

けれど、男は、攻撃を止めない。

間を一気に詰めると、悠に向かって次々と、剣戟を放つ。

悠はそれをやり過ごすので精一杯だ。

いや、やり過ぎてても居ない。

ところどころに傷を負っている。

体力がどんどん削られていく。

そのせいなのだろう、足元がおぼつかなくなり、身体がぐらついた。

この隙を逃すような者ではない。

男がまたほくそえんだ。

今度こそ勝負は決した。

男が、剣を振り下ろした。

振り下ろされる剣を見て、悠は瞳を閉じた。

（また守れなかった）

悠は思わず心内でポツリとつぶやく。

情けなかった。

絶対に守る。

そう自分自身で決めたはずなのに、相手にダメージを与えられずに、殺される。

それがたまらなく悔しかった。

剣が風を切る音が聞こえた。

全てが終わる。

何もなせずに終わる。

「ぐおおおお！！」

そのとき何かが吼えた。

男は、思わず振り返った。

背後に気配を感じたからだ。

けれど、それよりも早く、その吼えたものが、強烈な体当たりをした。

攻撃体勢に入っていたため、隙だらけだったのだ、思いっきり吹き飛ばされる。

男は分けも分からず、その攻撃の主のほうを見る。

そこには、人の姿はなかった。

あるのは、銀色の塊。

男には理解できなかった。

「お前！！」

けれど、悠はすぐに気がついた。

悠も吼える声が聞こえると同時に目を開いていた。

そして、すぐに目に捉えた。

銀色の主を。

「なんで、こんなところに、いるんだよ!？」

悠は、そばまで歩み寄ると、しゃがんだ。

意味が分からなかった。

とっくの昔に逃げたものだと思っていた。

けれど、その狼がまだここにいた。

しかも、なぜか自分を助けている。

この状況は全く理解不能だった。

けれど、本来なら今はそんなことをしている余裕はなかった。

現状を真っ先に理解しなおした男は、即座に間合いを詰める。

わざわざ隙を見せてくれているのに、見逃す手はない。

悠は、思わず剣を構えるが、とうてい間に合いそうもない。

男は、

（今度こそ）

そう心のなかで、つぶやくと、剣を振るう。

しかし、それもまた届く事はなかった。

銀狼が攻撃を結界を張ることで遮断したからだ。

『借りを返す』

呆然としながら、自分の周りにある結界を見ると、何かの音が頭に響いた。

『我の名は、ジルフイネス・フェンリル。フェンリル族の名にかけて、汝の力になろう』

その声が続ける。

どこか厳かで、全てを見透かしているような感じを受ける。

けれど、そこでようやく気がつく。

そばにいる銀狼の声だ。

悠は驚いた。

あの時見た銀狼の目は人のことを憎悪していた。

呪い殺されそうだった。

だから、そんな彼が、まさかその事を借りに思っている、そんなふうには思えなかった。

けれど、正直助かった。

悠にしてみれば、圧倒的不利だった状況が、好転したのだ。

感謝以外なんでもない。

「ありがたい。俺が後から援護するから、頼む」

悠は、その言葉に礼を言うと、早速魔法の詠唱を始める。

銀狼―フェンリルは、男に飛び掛る。

綺麗に磨がれた爪が男を襲う。

それをなんとか剣で防ぐ。

『闇夜を切り裂く刹那の閃光。我此処に請う。邪悪なる者を滅す、聖なる光の槍を。ホーリーランサー』

しかし、追い討ちをかけるようにして、悠が魔法を放つ。

そこが狙い目だった。

悠の放った魔法が男の太腿へと向かう。

必中のタイミングだ。

（捕らえた）

そう思った。

けれど、男はそれを交わした。

あたかもその攻撃を読んでいたかのように。

悠は内心で舌打ちすると、新しく魔法の詠唱に入る。

フェンリルは、咆哮をあげると、火炎弾を生み出し、放つ。

人が使う魔法とは少々形式が違うタイプだ。

男は、それを、体を反転する事でかわすと、悠へと肉薄する。

けれど、その前にフェンリルが立ち上がり、もう一度爪の一撃を浴びせる。

鋭利な爪が風を切る音が響く。

しかし、それも男は、剣で軽くないなすと、フェンリルのそばを抜き、悠へと向かって、何かを投げる。

礫だった。

どうやら、懷から出したのだろう。

『我戴くは、漆黒の翼。墮天の証。神をも裏切り破壊を尽くす銀の力。今此処に全てを放ち、我が身に宿れ。カオテッドウィング』

けれど、それが届く前に魔法の詠唱は終わった。

詠唱が終わると、悠の身体の周囲に黒い靄のような物が生まれる。

礫は、その靄を突き破るように押し込まれていく。

しかし、それは、悠を捉える事はなく、礫はそのままどこかに消えてしまった。

そして、現れるのは、漆黒の翼を戴いた悠の姿。

『カオテッドウィング』

術者の能力を一時的に上昇させる上位の補助的魔法。

そして、それは悠が唯一使える上位魔法でもある。

キュアが悠の特徴を考えた上で教えてくれた魔法。

並外れた身体能力を持っているからこそ教えた魔法だ。

悠は瞬時に男までの距離を詰めると、近距離から

『ファイヤーボール』

無詠唱版の魔法を放つ。

今度こそよけられない。

絶好のタイミングだった。

男はおもいきり仰け反った。

直撃だった。

爆炎が男の身体を覆いつくし、飲み込む。

悠は、いったん、間合いを取ると、さらに詠唱を始める。

フェンリルは、さらに後退する。

そのそばには、いまだに眼を覚まさないでいる、フェルナの姿がある。

『我下すは、怒りの鉄槌。雷光の一撃。対なるは紅の衝動。ボルテイクサラマンダー』

それを確認しつつ、悠は詠唱の終えた魔法をさらに追い討ちをかけるようにして放つ。

雷を纏い帯電した炎の渦が男に迫る。

男は、どうにか自分がかぶっていた炎をかき消すと、後退する。

その息は荒い。

かなりのダメージを受けている事は容易に予想がつく。

それでも、男はその一撃をかわした。

そう思った。

けれど、炎の渦は地面に着弾した瞬間破裂した。

男めがけて。

これが、悠の本当の狙い目。

むしろ、直撃させる気はなかった。

もし、あれが直撃していれば、男は死んでいただろう。

悠には、そんなことはできなかった。

爆風が男の身体を包み、吹き飛ばす。

屋敷の壁に身体を叩きつけられた。

肺の中にある酸素が全て吐き出されていく。

おまけに、呼吸ができない。

視界が真っ白になっていく。

酸欠だ。

おまけに、身体が思うように動かない。

完全にどこかしの骨がいかれてしまったみたいだ。

そして、それは同時に、男の負けを意味した。

第十三話 銀の翼

悠は目の前に倒れこむ男をぼんやりと見ていた。

先ほどまで背中に浮かんでいた漆黒の翼はすでに消えている。

どうやら効力が切れたらしい。

男は、荒い呼吸を必死になって、落ち着かせている。

けれど、その目からは戦う意思はすっかり抜け落ちてしまっている。

潔い負け方だ。

悠は、右手に魔力をためる。

右手に集中していく魔力は次第に姿を変え、小さな火球になる。

そして、それを放つ。

男の頭のすぐ右へ。

男は意味がわからなかった。

何がどうしてこうなっているのか。

ここで死ぬ。

そう思っていた。

けれど、そうではない。

しかし、その疑問も瞬時に答えが導き出された。

遊ばれているのだ。

自分の命を。

男は内心で舌打ちした。

辱められながら、殺される。

それがたまらなく悔しかったから。

けれど、それでも、目を閉じた。

たとえどんな辱めを受けようとも心だけは、そうはさせない。

その心からくるものだった。

けれど、悠は一度空を見上げると

「これで俺の勝ち。だから、これで逃げさせてもらうな」

男にそう言って、そのままフェンリルのほうへと向かっていった。

男は呆然とした。

そして、それと同時に、あきれた。

悠のしていることを見て。

おそらく、さっきの魔法が直撃していれば、死んでいた。

だから、男の負け。

そういうことなんだろう。

けれど、それは、甘いと思った。

殺さずに、背を向ける。

たとえば、相手がどんなにダメージを負っていたとしても、敵に背後を見せてはいけない。

それなのに、悠は背を向ける。

すきだらけの姿で。

それは甘い。

その後姿に追いかかってくる奴はいくらでもいる。

だから、そんな姿を見せる、悠は甘い。

そして、そんな姿を見せているからこそ、後ろから襲われても、何もいえない。

やるかやられるか。

この二つしかないから。

けれど、男はそうしなかった。

確かに、甘いかもしれない。

いつか、その甘さをつかれるかもしれない。

だけど、自分はそうしたくはなかった。

たとえば、どこまで墮ちたとしても、誇りだけは失いたくはなかったから。

男は、きしむ体に鞭打って起き上がる。

その瞬間に、ぴくりとフェンリルが反応したが、悠がそれを制する。

ほとんど、体全体を引きずるようにして、悠の前まで歩く。

それは、自分の誇りからくるものだった。

敗者にできる唯一のことだった。

「裏口へと案内しよう」

出口を教えることは。

フェンリルは即座にその提案に難色を示したが、悠は二つ返事でうなづくと、ついていった。

別に、男を信じたからではない。

ただ、あれだけ派手に脱出をして、さらには、中庭でやりたい放題したのだ。

おそらく正面玄関はぎっしりと守りは固められているだろう。

ならば、可能性としては低いかもしれないけれど、男についていったほうがまだ。

ただ、唯一の不安材料は、男のような実力を持っている人間が、ほかに多数いることだ。

もちろん、フェンリルがいる今、簡単に負けることはない。

けれど、勝つ自信もまたなかった。

先ほどの戦いで力を使いすぎた。

しかも、最後に使ったあの上級魔法。

あれの反動で、かなり体が痛んでいる。

実際、魔法で無理やり体の能力を上げているんだから、痛まないはずがない。

だから、たとえば、もう一度使ったとしても、いつまでもつか分からない。

いや、そもそも、それだけの魔力も残っていない可能性も高い。

上級魔法だけあって、消費もかなり激しいのだから。

しばらく歩くと、喧騒も消えてき始めた。

人の気配も感じない。

どうやら、男は正直に教えてくれたらしい。

悠は内心で一安心した。

やはり、ここは安全に行きたい。

自分はまだしも、フェルナがいる。

フェルナだけは無事に逃がしてやりたいから。

小さな門を開ける。

これで、逃げられる。

そう思うと力が抜けた。

その瞬間それが隙となった。

何かのはじける音がした。

気がつくど、目の前には鉄の塊が自分めがけて飛んできていた。

罨か!!

悠は内心で舌打ちした。

必死に体の力を抜き、体を倒す。

結界がはれれば、いいが、あいにく悠にはまだできない。

だから、よけるしかないのだが……

間に合わない!!

けれど、自分の胸に向かって鉄の塊がすぐ傍まで来ている。

思わず目を瞑った。

今度こそは、もう無理だ。

悠は諦めていた。

けれど、その鉄の塊は、悠には当たることはなかった。

あたったのは……

男だった。

悠はわけが分からなかった。

これは、男の罨だ。

そう思った。

けれど、その罨を張ったはずの男が、自分をかばった。

おかしいことだった。

倒れ行く男の体を抱きかかえ、前を向く。

そこには、大勢の人間がいる。

気配のほうは、相変わらず感じない。

どうやら、全体に気配を隠す魔法が何かをかけているんだろう。

悠は、魔法の詠唱を始める。

状況はいまいち理解はできない。

ただ、逃げなくていけないことには変わらない。

『我戴くは、漆黒の翼。墮天の証。神をも裏切り破壊を尽くす銀の力。今此処に全てを放ち、我が身に宿れ。カオテッドウィング』

まずは、身体能力を上げる。

二人も抱えなくてはいけないのだから、通常では難しい。

それに、あわせて、フェンリルが咆哮をあげて、火球を放つ。

それが、合図。

悠は、その場所から飛び出す。

そして、目の前にいる敵に、詠唱なしの魔法を放つ。

倒すことを考えずに、怯ませるためだけの魔法。

省魔力をしないと、到底切り抜けそうもない。

次々に来る魔法や、剣戟を悠はするりと潜り抜け、塊を抜ける。

そして、全てを抜けきった。

そう思った矢先だった。

何かが、左足に当たった。

そう思うと同時に、焼けるような激痛が走った。

思わず、倒れこむ。

また、先ほどの一団が集まってくる。

悠は、自分の左足を見る。

何かが貫通したような、傷跡があった。

悠は、思わずうめいた。

こんな感覚初めてだ。

いや、そもそも、こんな感覚に陥ること自体がはじめてだ。

あそこにいたときは、こんな痛みを感じる必要なんてなかった。

そんなことが起こりうる世界じゃなかったから。

けれど、悠はその痛みを必死に耐える。

気を抜けば、失神してしまいそうだ。

いや、そもそも、ショック死しなかったのがおかしいぐらいだ。

けれど、こうして生きている限りは、たたなくてはいけない。

守らなくてはいけないから。

悠は、消えかけている漆黒の翼に魔力を供給する。

もう、どこまで、持つかは分からない。

けれど、全てが終わるまで、諦めるつもりはない。

死ぬわけにはいかないから。

悠は、さきほどの攻撃の主を探す。

けれど、それはすぐに見つけられた。

一人だけ、高いところにたっている人間がいる。

きらびやかな衣装を着た男。

おそらく、この屋敷の主人。

その男が、舌なめずりをしながら、喜色満面でこちらをみている。

まるで、遊んでいるかのようだ。

……いや、遊んでいるのだろう。

決して、自分の命が危険にさらされることがない。

それが分かっているから。

兵士たちが、群がってくる。

悠はそれに、魔法を放つことで応戦する。

詠唱なしの魔法でけん制して、追い討ちをかけるようにして、中級魔法を放つ。

それをかいくぐって入ってきたものは、徒手空拳で応戦する。

少しずつながら、数を減らしていく。

これならば、いつかは、限りが出てくるだろう。

体力が持てば。

けれど、残念ながら、悠の息は荒い。

もうそろそろ体力の限界だ。

それは、フェンリルも同じ。

いつまで、もつかが、分からない。

すでに、負けは見え始めている。

『我が声を聞け、我が想いを汲め、我が力を喰らえ、そして穿て、
焰の顎・ウォルティッドⅡサラマンダー』

魔法を放つ。

目の前にまで来ていたものは、全員吹き飛ばされて、失神する。

これで、そこにいたものは、戦闘に復帰はできない。

すでに、戦力はかなり削った。

しかし、もうほとんど限界だ。

数だって、まだ半数以上悠々という。

もう耐えられそうもない。

ならば

「フェンリル。お願いがある。この男とフェルナをつれて、逃げてくれ」

せめて、この二人だけを逃がしたかった。

死ぬわけにはいかない。

自分の命は、たくさんの人の未来を背負っている。

これから、多くの未来を見なくてはいけない。

だから、死ぬわけにはいかない。

だけど、どうも、無理そうだ。

ならば、せめて、守りたい。

今まで、守ってもらってばかりだったから、せめて最後は守りたい。

『死ぬつもりか??』

フェンリルがそうたずねる。

いや、それは確認だろう。

悠は、うなづく。

『分かった』

それをフェンリルはとめなかった。

『全てを終焉へと導く破壊の衝動。虚無へと導く銀の閃光。神はもうおらず、恩恵は与えられず。ただ滅びるのみ。銀の翼よ、我が前にその姿現せ！！シルバーウィング』

そして、悠は、魔法をもう一度はなった。

先ほどまで、漆黒だった翼の色が変わる。

淡く月色。

光り輝く銀に。

悠は、思いつき大地をける。

先ほどよりまして、動きはしなやかかつ力強い。

これが、『カオテッドウィング』の本当の力。

二段詠唱による、二段パワーアップ。

だからこそ、上位に位置する。

悠は、兵の頭上へと飛び上がると

『ホーリーランサー』

『ボルティックⅡサラマンダー』

『フレイムⅡドーム』

『ウォルティッドⅡサラマンダー』

魔法の雨を降らせる。

次々と、倒れていく。

けれど、それも束の間の事。

すぐに、動きが鈍くなる。

中級魔法の詠唱なし発動。

二段階目だからこそ、できることだが、それでもやはり、消費は通常に比べて激しい。

単なる時間稼ぎ。

そのためでしかない。

あがくようにして、魔法を放つ。

すでに、大地はめくれ上がり、ずたずたになっている。

それでも、悠はとめない。

『ホーリーランサー』

聖なる槍の一撃を放つ。

これが、最後の魔法。

もう、これ以上は打てない。

銀色に光り輝く翼が消え始める。

これでおしまいだろう。

だけど、せめて…

悠は、最後の気力を振り絞って、大地をける。

群がってくる兵を吹き飛ばしつつ、前へと突き進む。

狙うのはたった一人。

一人だけ、安全なところで物見遊山している男。

悠の行動を理解した男が、あわてて鉄の塊を放つ。

どうやら、銃のような仕組みのようだ。

それを肩にくらった。

それでも、悠は止まらない。

そして、男を目の前まで来た。

捉えた。

そう思った。

けれど、目の前にいる男は、にやりと笑みを浮かべると悠に向かってもう一発はなつ。

右脇腹への一撃。

今度こそ、ひるまずに入られなかった。

体中の力が抜けていく。

いや、それだけじゃない。

視界までもぼやけてくる。

内心で毒づく。

最後の最後で失敗してしまった自分が悔しい。

けれど、どうしようもない。

男が、悠の持っていた剣を手にとると振り下ろす。

最後は自分の手で。

そういうことだろう。

それを悠は朦朧とした、頭で防ごうと右手を出す。

けれど、防げるはずもない。

今度こそ終わりだ。

終わるはずだった。

割り込みがこなければ。

巨大な爆音がしたと思うと、目の前にいた男が押し倒される。

目の前には、白銀のよろいを着た男たち。

騎士団だろう。

助かった。

悠は、ぼやける意識の中でそう思った。

それと同時に、体中の力が抜けていく。

それでも、必死になって立ち上がろうとする。

フェルナの元に行かなくては。

その想いだけで。

けれど、体はすでに限界を超えている。

思いは思いで止まってしまい、そのまま崩れ落ちてしまった。

第十四話 護るもののために

目の前にあるのは、漆黒の闇。

悲しみに塗りたくられた黒。

辺りを見回しても何も無い。

俺は、それが怖くて走り出す。

夢中になって、走る。

だけど……

出口など見当たらない。

光なんてものは見当たらない。

もしかすると、こんなところには、そんなものは存在しないのかもしれない。

そう思うと、馬鹿らしくなって、立ち止まってしまう。

それに、今更だった。

俺の心の中には、闇しかないのだから。

みんなを失ったときから。

その場に腰を下ろす。

相変わらずの、闇。

どこまで続くか分からない虚無空間。

それは、今の自分の姿を現しているみたいだ。

相変わらず、俺は、誰も救っていない。

たくさんの命を……

未来を背負ってきたはずなのに、今の俺は、何もなせていない。

それどころか……

守られ続けている。

果たしてそんなことでいいのだろうか？

良くない。

決してよくない。

俺は、自分が思う大切なものを守り、消えていった人たちの未来も見えていかなくちゃいけない。

それが、俺の唯一の指針だから。

だから、俺は……

俺は、たとえ虚無空間のただなかにいようと、闇に喰われようが、
どうなるうが、生きて、未来を見続けなくちゃいけない。

それが、約束だから。

ねえ、そうだろう？

父さん、母さん、志保……

そして、瑞樹？

目覚めた場所はまったく見覚えの無い場所だった。

悠は、痛みで軋む体に鞭打ち起き上がる。

けれど、力が入らず、その場に崩れこむ。

確認してみないと分からないが、筋肉の繊維がぼろぼろになっている
だろう。

それでも、悠は、無理やり体を起き上がらせると、立ち上がり、今
の状態を確認する。

おそらく、気を失うと直前に出てきた、騎士団に助けられたのだら
う。

今の悠は、上等なシルクで包まれている。

悠は、それを脱ぎ捨てると、自分の体も確認し始める。

けれど、どこにも、傷はなく、まっさらな体。

どうやら、完全に治癒してもらったみたいだ。

それを確認し終わると、部屋を見回す。

けれど、ものは何も無い。

以前まで自分が着ていた服すらない。

悠は、もう一度着なおすと、部屋を出る。

どうやら、監視はいないらしく、あっさりと出られた。

そして、周りを見渡す。

とはいっても、行き先は決まっている。

魔力探査を使い、目的物がある場所を探る。

数秒間、じっと探っていたが、すぐに感知すると、そこに向かって歩き出す。

もちろん、軋む体に鞭打っているのだから、その歩みは遅い。

それでも、一步一步確実に歩を進める。

時々、人とすれ違うけど、誰も気にしない。

それぞれが、それぞれ重傷人だから。

だから、人の事を考えている余裕など無い。

ドアを開け、外に出る。

けれど、生憎の雨。

空を見上げる。

空には、厚い雲が張り、いつ雨が上がるのか、まったく分からない。

しかし、悠はそのまま外へと出る。

そして、向かうのは、ごみ山。

たくさんのごみが置かれている。

そして、その中には、悠の持ち物もあった。

ぼろぼろになっている自分の服を見る。

いたるところにおびただしい血痕がくつきりと残っている。

もう、着れないだろう。

悠は、それを抱きしめるようにして、持つと、また歩き始める。

院内ではなく、外へと。

そして、羽織っているシルクの衣を脱ぎ捨てると、ぼろぼろの服を着る。

いまだに傷の痛みが響き歩きたびに、痙攣する。

その姿とぼろぼろの服があいまって、さらに痛々しく見せる。

それでも、悠は歩き続ける。

自分を待っている人がいる。

そのはずだから。

すれ違う人々が、悠のことをいぶかしげに見る。

当然だ。

もともと、悠のいた世界と、この世界での衣装はまったく異なる。

それだけでも、十分目立つというのに、さらにその服はぼろぼろ。

奇異の目で見られても、文句の言いようが無い。

まあ、実際問題、たとえ文句を言おうにも、それだけの体力がないというのもあるが。

その中を悠は歩き続けた。

しばらく歩いているうちに小さな集落についた。

旅人の姿もちらほらと見える。

悠は、それをふらつく体で器用によけると、集落の奥へと入っていく。

そして、一軒の宿に入る。

「いらっしゃい」

おかみの元気のいい声がする。

悠は、それを耳にしながら、すぐ傍にある階段を上る。

店員は、それを何も言わない。

宿泊客だと勘違いしているのだろう。

たとえば、身なりがおかしかったとしても。

そして、悠は、二階へと上がると、一番奥の前で立ち止まる。

そこからは、懐かしい波動が感じられた。

自分が守る。

そう決めた存在の波動が。

軽くノックすると、悠は中に入る。

まず一番初めに目に入っただのは、銀の塊。

フェンリルだ。

そして、次に入っただのは、

「体のほうは大丈夫か、フェルナ？」

フェルナの姿だった。

悠の姿を見つけた瞬間びっくりしたような顔をしたが、それもすぐに引っ込めると

「あ、ええっと、まあ、落ち着いて」

しっかりと飛びついてきた。

耳を済ませてみれば、少しだけ嗚咽を漏らしている。

悠は、内心でため息をつく、フェンリルのほうへと向きなおす。

『お前が死に掛けたのは、自分のせいだ。そう思って、ずっとふさぎこんでいた』

それと同時に、フェンリルは悠へとテレパスを送る。

まあ、最初から、どういう意味で、向いてきたのか分かっていたの

だろう。

それと同時に、悠は、ある程度、こんなところだろうとは、予測していた。

実際、しっかりと話したわけではない。

ほんの少しだけ、それこそ、お互い知る間もなかった。

だけど、それでも、こんな反応をする。

それぐらいは、予測できた。

悠は、そつと頭をなでてやる。

フェルナは、依然として泣き続ける。

小さな小さな妹が、兄にしがみつく。

部屋の中は、嗚咽が響いてはいるけど、どこか暖かい。

ほんの少しだけ懐かしいホームドラマ。

そんな感じのするワンシーン。

悠は、フェルナが泣き止むまでずっと優しく頭をなでてやった。

第十五話 差し出す手と伸ばされた手

ようやくフェルナが泣き止むと、悠は、ベッドの上に腰をかける。

さすがに、これ以上はたっていられなかったみたいだ。

その隣にフェルナが腰掛ける。

どうやら、すっかりと懷いてしまったらしい。

「あ、そうだ。あの男はどうなったんだ」

しばらくは、ここでのんびりでもしておこうか。

そう考えていると、不意に男のことを思い出した。

あれだけぼろぼろになっていたのだから、普通は助からない。

けれど、それなら、悠もまた同じだ。

肩と腹部と足。

三箇所を貫通されただけでなく、小さな傷もそこら中にあった。

傷が無いところを探すほうが、大変なぐらいだ。

けれど、それでも、悠は生きていた。

だから、男も生きている可能性はある。

『あの男なら、今頃司法院だろう。いくら雇われたとはいえ、共犯みたいなものだからな』

そして、その可能性は、否定されなかった。

「そうか」

とは言え、あまりいいものでもなかったが。

けれど、それぐらい、悠も予想はしていた。

断ろうと思えば、断れた。

それを断らなかったのだから、共犯と思われても仕方が無い。

悠は、内心でため息をつく。

けれど、だからと言って、悠にできることは無い。

そもそも、あの男も罪人だ。

自身が認めていたのだからそうなのだろう。

ならば、償わなくてはならない。

だからこそ、これはいい機会なのかもしれない。

あの男にとって。

悠たちは、それからしばらく、のんびりとくつろいでいた。

悠はいまだに体力が回復したわけではないので、うろつくわけにも
いかない。

フェルナは、そんな悠が心配で、傍から離れない。

そして、フェンリルに関しては、完璧にフェルナのペット化して
いる。

傍から離れようという意味がまったく見えない。

おそらく、フェルナが行くところなら、どこにでも着いていくつも
りだろう。

だから、こういう形になった。

ちりちりと筋肉が痛む。

いまだに、悠の体は熱を持っていた。

おそらく、無理がたたったのだろう。

悠は、ため息をつくと眠りへとつく。

こういうときは、さっさと寝てしまうのが一番だ。

頭の中が真っ暗になる。

意識に霧がかかってくる。

もうそろそろしたら、眠りに着くだろう。

悠が無意識ながら、そんなことを思っていると、不意に扉が大音を立てて開いた。

驚く周りのことをまったく無視して、ずんずんと中に入っていく。

そして、うつらうつらしている、悠の前に止まる。

金色の長い髪が窓から入ってくる風にさらさらとなびく。

フェルナとフェンリルはそれをただ、ぼんやりと見つめる。

まあ、おそらくとめに入ったところで、無意味だろう。

何せ、この人は自己中心なお方だ。

他人が何か言ったところで、聞いてくれるような生易しい人じゃない。

そんな金色の髪の人物は、軽く深呼吸をする。

何かの準備だろう。

いや、何かではなく、予想なんて簡単につくか。

「何をのんきにこんなところで寝てるのよ!？」

そういつて、思いっきり悠の頬をはたく。

まあ、これぐらいしかないだろう。

そして、無防備な状況で、その痛恨の一撃を浴びた悠は吹き飛ぶ。

もう、それはすごい勢いだった。

悠がその攻撃を受けてから、完全に復活したのは、1時間ほどあとのことだった。

どうやら、予想外にクリティカルヒットしたみたいだ。

まあ、体力がほとんど残っていなかったのだから当然か。

ライフゲージで表せば、真っ赤なわけだし。

つまるところ、瀕死だったわけだ。

そんな状態なわけだから、こうなるのは、当然のことだろう。

けれど、その攻撃の主は、まったく気にしているそぶりは無い。

「さて、病院から逃げ出したわけをさっさと说着てもらおうかしら」

それどころか、むしろ高圧的だ。

「てめえにや、関係ないだろ」

悠もそれに対して、もちろんけんか腰で応対する。

まあ、この二人がそろえば、こうなる以外ありえないが。

そう、先ほど悠に痛恨の一撃を与えたのは、リエラだった。

もちろん、キュアの姿もある。

「あら、無様に死に掛けてたのを助けてやったのは、私たちよ。その命の恩人に対して、その対応はいかがなものかしらね」

「くっ」

それはさておき、二人の言い争いはいよいよ熾烈を極めてきた。

とはいっても、この鶴の一声のせいで、いつきに悠のほうが不利になる。

「それとも、もしかして、助けなかったほうがよかったかしら？まあ、無様にのたれ死んでいるほうがびつたりですものね」

そんなことリエラも分かっているのだろう。

言い返すことのできない悠を見ながら、嘲笑いつつ、毒を吐いていく。

どうやらかなりフラストレーションがたまっていたのだろう。

いつもの倍増だ。

一緒の部屋にいるフェルナなんて今にも泣き出しそうだ。

というよりか、すでに涙が瞳に滲み出している。

そんなフェルナを目の端でとらえても、リエラは止めない。

キュアもとめようとしなない。

圧倒的に不利だ。

「それには、感謝してるよ」

悠は、不承不承にそう答える。

明らかに、納得いつてない様子だ。

それでも、実際問題礼を言わないわけには行かない。

悠がこうして、フェルナたちに会えたのは、彼女たちのおかげなのだ。

あの後、二人は、悠を放っていくつもりだった。

特に、リエラにしてみれば、悠のことなどどうでもよかった。

いっそのこと、フェルナと一緒にやられてしまえばいい。

そこまで思っていた。

……本人が聞いたら、絶対けんかになるだろう。

というか、ひどすぎるような気がしないでもないけど。

そして、キュアも釈然と行かないまでも、そのつもりだった。

悠のことを放って置きづらかったけれど、フェルナの存在があった。

やはり、キュアもフェルナと一緒に行動するなどという選択肢は無かった。

けれど、それも状況が変わった。

一応、報告しておこうと思い、通信用のマジックアイテムを使って国王につなげた。

すると、どうだ。

国王は、恐ろしいことを言った。

悠が始まりの魔女の森へと入るための通行手形だと。

実際、始まりの魔女の森は、ある種の結界空間だ。

よって、通常のパターンでは入ることはできない。

だから、そのための鍵が必要となる。

そして、それが異世界人である悠なのである。

とはいっても、別に悠が特別なわけではない。

単に国王が、悠が逃げられないように、そうしただけである。

実際、リエラにそれをかけておけば、悠のことは放って置かれていたのだろう。

だから、急遽二人は、悠を追いかけたのだが、ついてみれば、激しい打ち合いをやっている。

というわけなので、即座に騎士団を呼んだのだ。

まあ、ついでに、密売者を捕縛したが。

そんな流れがあるわけである。

そして、例えそれが彼女たちの本意ではなかったとしても、悠は命を拾ってもらった。

そういうことになるわけだ。

「それで、あんたらは、どうしたいんだ？」

言い合いもいい加減で飽きたらしく、悠は二人に問うた。

まあ、ある程度の説明も受けているから、聞いたのだろう。

「私は、どっちでもいいわ。できれば、魔族と旅なんて出たくはないけど、だからと言って、あんたらを二人にしたら、言い合いだけ

で終わってしまいそうだからね。だから、付き合ってあげるわ」

それに対して、キュアは本当にしぶしぶといった感じで答える。

まあ、それがキュアにできる最高の譲歩なのだろう。

悠は、内心でため息をつきつつも、ある程度は満足していた。

最初に比べればずっとずっとましだ。

極端に魔族という存在を嫌悪し、拒絶していた頃に比べれば。

リエラのほうへと向き直る。

キュアからは、いい答えをもらった。

後は、リエラだけだ。

「フォルモーリストの森に行くには、鍵であるあんたが必要なら、我慢するわ。煩わしい物が増えたと思えばいいだけのことだしね」

そして、彼女も結局了承する。

まあ、するしかないのだが。

ただ、相変わらず一言多いが。

悠は、それにほっと一安心する。

事情が事情なだけに、絶対に悠を連れて行かないといけない。

だから、もしかすると、無理やり、自分だけを連れて行く。

そんなことの可能性も考えていたからだ。

だけど、それは杞憂ですんだ。

悠は、最後にフェルナに向き直る。

人が増えて、少々おびえている。

悠は、微笑みかける。

まずは、安心させなくてはいけない。

そして、口をゆっくりと開く。

「他の二人は違いかもしれないけど、俺は、フェルナのことを仲間だと思っているし、憎悪もしてない。むしろ、君を守りたいと思う。だから、一緒に行こう?」

その言葉を言うと、ゆっくりと手を差し出す。

温かい笑顔。

フェルナは、ほとんど条件反射のように、悠の手を取っていた。

第十六話 掲げし誓約

その後、悠は、フェルナたちと別れて、病院に押し込まれた。

もちろん、病院は大騒ぎだった。

あれだけの傷を負ったのに、どこかへ消えてしまったのだ、騒ぎにならないほうがおかしい。

通常、あれだけの傷を負ったら、2、3日はまともに動けない。

傷が癒えたとしても、血の流しすぎで、体力は根こそぎ取られているのだ。

体が言うことを聞くはずがない。

だから、悠のしていたことは、常識の範疇外のことなのだ。

よって、押し込まれると同時に、ベッドに縛り付けられてしまった。

二度と、ベッドから離れさせないためだろう。

けれど、それも翌日は意味は成さなかった。

本調子ではないとはいえ、ある程度体力が回復した悠は、うまく風の魔法を使ってロープを切って脱出したのだ。

もう、ここまで来たら、お手上げである。

悠は、人が来ない頃合を見計らって、服を着替える。

今度は、ぼろぼろになってしまった自分の服ではなく、以前街で買った服だ。

一応、リエラから渡してもらっている。

まあ、一緒に行動するのだから、変な服装でいられては困るからだろう。

着替えが終わると、最後に、ベッドの下に隠しておいた、大剣を背負う。

ほんの少ししか使っていなかったと言うのに、妙に懐かしい感じを覚えた。

そして、後は、身支度を終えたと、病室を出る。

昨日に比べると、ずっと楽だった。

少々、だるい気はしないでもないが、それでもある程度は、動ける。

まあ、長時間歩くことは、まだ難しそうだが、それでも数時間なら大丈夫そうだ。

もちろん、そんな事を言えば、医師たちはひっくり返ってしまうだろう。

やはり、これも現実的に考えて、常識の範疇外のことなのだ。

ゆっくりと歩き出した悠が向かったのは、昨日の宿屋。

そこに、フェルナたちが待っている。

通りはいつもどおりだった。

昨日とは違い、普通の格好をしているから、視線を浴びることもない。

宿屋に着くと、昨日の部屋を開ける。

そして、そこには、全員の姿があった。

「もう、体は大丈夫なの？」

悠の姿を確認した、キュアはそうたずねる。

キュア自身も悠の怪我の度合いを知ってる分、聞きたくなっただろう。

「大丈夫だ。しばらくは少々ペースが落ちるかもしれないけど、それでも行ける」

悠は、それに対して、肯定した。

むしろ、いけそうにもなかったら、来なかっただろう。

「そう、分かった。んじゃあ、出発しましょうか」

キュアは悠の答えに頷くと、先頭をきって部屋を出る。

それに続くようにして、リエラ、フェンリルの順番に出る。

部屋に残ったのは、フェルナと悠だけとなる。

一度、フェルナは、悠の顔を見たが、すぐに後ろについていく。

これで、この部屋に残ったのは、悠だけ。

悠は、ぐると部屋を見渡す。

そこには、備え付けのベッドぐらいしかない。

もちろん、悠はそれを確認したわけではない。

確認しなかったのは……

自分が、また旅に出ること。

自分の世界に帰るためのたびに出ること。

そして、それと同時に、フェルナを守ること。

それが、自分にとって、どういうことになるのか。

それを確認したかっただけだった。

悠は、剣を掲げると

「我事、城谷悠はここに宣誓す。全てが終わるまで、我心に刻みし

制約を全うすることを」

声高に叫んだ。

それは、宣誓だった。

今から起きるだろう事から逃げ出さないことへの。

そして、それと同時に、何があっても、自分の心にある制約を守る
ことへの。

第十七話 初めてのお仕事

二週間ほど歩いたら、街道の終点についた。

まあ、終点と言っても、いくつもあるうちの一つではあるが。

王都から、それぞれ街道は延びていき、さらに分岐していく。

よって、終点は一つではない。

そして、その終点のうちの 하나가、密林都市『ルッツヴァイア』

始まりの魔女の森へと続く、唯一の都市だ。

ルッツヴァイアを北へと超えていけば、すぐそこにある。

もちろん、入り口がすぐそこにあるだけで、魔女がいるであろう場所とは分らない。

全てが謎なのだ。

だから、どれくらいの距離を歩けばとか、どれくらいの時間で、なんていう予想はつけられない。

「さて、どうする？」

キュアは、一同を見回しながら、そう尋ねる。

今は、食堂に集まっている。

これからの、進路について計画を練るためだ。

「そうだな。できることなら、さっさと行ってしまいたい、それは難しいんだろう？」

それに答えるのが悠。

もちろん、それは、悠どころか、全員の本心だろう。

始まりの魔女の森。

というわさはないし、できることなら、誰も近寄りたくない場所だ。

たとえば、それが魔族であろうと、神族であろうと。

それほど、異色な存在なのだ。

魔女と言うものは。

「ええ。これは、あくまでも、聞いた話だけど、あそこは強烈な磁場と結界が働いているらしく、まともに行動できないらしいわ。もちろん、魔法もそう。発動できたとしても、かなり威力が削られるらしいわ」

周りは、それを聞いて、肩を落とす。

一筋縄でいかないことが明白だからだ。

いくら、ある程度予測はしていたとしても、こうして目の前にはっ

きりと突きつけられると凹んでしまう。

「それに、森の中にいる、魔物はかなりの強敵ばかりらしいわ。はつきり言って、貴方たちにはかなりきついと思う」

そして、それに補足するようにそういうと、悠とフェルナを指差す。

もちろん、二人には分かっていた。

自分たちが、かなりの足手まといであることは。

もちろん、あれから、いろいろと学んで、技量を上げた。

けれど、それでも、弱いことには変わらない。

戦闘となれば確実に二人が脚を引っ張ることになるだろう。

「だから、私としては、しばらくこのギルドで仕事をもらって、それで実力を伸ばしていくそれでどうかしら？」

だからこそ、キュアはそう提案した。

二つ返事でキュアの提案をうなづいた悠とフェルナは翌朝ギルドに向かった。

ギルドは、街のはずれに建っていた。

まあ、一筋縄でいかない人間ばかりが集まっているので当然なのかもしれない。

ギルド周辺は特に治安が悪くなるからである。

「えっと、ここでよかったんだよな」

キュアからもらった地図を確認しつつ、目の前にある建物に視線をやる。

そこには、いかにもと言った感じの木造の建物がある。

看板も申し訳程度、と言うよりも、むしろ、今にも崩れだしそうな様子でかけられている。

もしかして、儲かっていないのではないだろうか。

悠は、半ば以上そう思いつつ、扉を開ける。

その瞬間に好奇の視線が二人に集まる。

年端のいかない少女と少年の二人組み。

しかも、二人とも明らかに貧弱そうな体つきをしている。

あまりにも場違いだからだ。

「おいおい、ここは、お前さんたちみたいなお子様がくるようなところじゃないぜ」

当然、そのような言葉だって飛んでくる。

「店主、依頼をもらいに来た。この人からの紹介だ」

けれど、悠はそれを全く取り合わず、キュアから預かった物を手渡す。

さっさと出て行くほうが利口だと思ったからだろう。

隣にいるフェルナなんて、大勢の人の姿におびえている。

どうやら、オークションのときのことトラウマとなっているのだろう。

まあ、当然のことだろうが。

それより、ギルドの店主は悠から受け取った物を見ると、それと二人の顔を比べる。

悠が手渡した物は、キュアからの紹介状とキュアのライセンス。

そのため、軽い驚きが入っているのだろう。

キュアの名はここでは割と通っているのだろう。

「はいよ、これがあんたたちへの仕事だ。ランクはBだ」

けれど、いつまでもそうしているわけにはいかないことに気づいたのだろう。

書類箱から数枚の紙切れを取り出すと悠に手渡す。

「ありがとう」

悠は、それを一度バッグの中に入れると、フェルナを連れ立って外に出る。

相変わらず二人を嘲笑する言葉は投げ続けられていたが。

「どんなお仕事なんですか？」

フェルナは、外に出るとすぐに悠にたずねた。

仕事内容が気になったのだろう。

ただ、ランクがBなだけに、簡単なことでないのには違いないう。

ギルドの仕事のランク順は、上からS，A，B，C，D，Eとなっている。

ある程度概略的に言うなら、Sは上級魔族に関するものの中でも、特に危険性が高いもの。

まあ、上級魔族と剣を交えること自体かなり危険性が高いには違いないが。

そして、Aは上級魔族に関するものの中でも比較的危険性の低いもの。

まあ、あくまでも比較的であって、通常の人にはこんな物は請け負えない。

そして、二人が請けたBは、中級魔族程度を相手にするものだ。

中級魔族とは、簡単に言うと、半獣みたいなものだ。

人と獣の合成したら出来上がった。

そんな姿をしているものだ。

魔族は、人型に近いほど力は強くなっていく。

まあ、たまに上級魔族のうちには、半獣や獣の姿をしているものもいるが、それはあくまでも例外だ。

それは置いておくとして、そのことを考えると一応、フェルナは上級魔族に入ることになる。

まあ、戦闘経験どころかそういう訓練すらしたことないので、簡単にそういつて言いわけでもないが。

それでも、一応上級魔族に入っていると考えていいだろう。

「ここから、数ガロ離れたところにある、遺跡に住み着いてる魔族の掃討らしい。その近くを通る冒険者たちに被害が出てるらしい」

それは、さておくとして、悠はフェルナの問いに対して答えた。

けれど、それと同時に眉をひそめた。

内容が内容だからだ。そう仕事内容である魔族の掃討。

けれど、魔族はフェルナにとっては同族だ。

そこら辺を気遣ってのことだろう。

「そうですか。じゃあ、行きましようか」

フェルナもそんな悠の気持ちに気づいたのだろう。

それに対して感謝しながら、フェルナはそう答えた。

二人は、雑貨屋で傷薬を買ったとさっそく出かけた。

一応、今キュアとリエラは、魔女の森に関する情報を集めている。

まあ、国王に直接聞けばすむことなのかもしれないが、当の国王は決して答えようとはしなかつたのだから仕方ない。

自分でどうにかしろ。

そういうことなのだろう。

だから、今二人はどんな些細なことでもいいから、目ざとく情報を集めている。

そして、悠としては、情報が集まり次第、旅を再開させたかった。

時間を無駄に使いたくはないからである。

実際問題、自分の世界のことだって少々気になる。

誰も搜索願とかは、出していないだろうが、いつまでも家を放っておくようなことはしたくない。

そのためにも、時間が惜しい。

もちろん、帰る方法が分かったとしても、すぐに帰るつもりはない。

フェルナのことがある。

さすがに、フェルナを放り出していくわけにも行かない。

せめて、フェルナを受け入れてくれるところ。

そこを見つけてからじゃないと。

「さて、もうそろそろかな」

それはさておき、二人は目的地にたどり着いた。

数ガロ程度の距離だったのですぐにつくことができた。

一応、周りを見てみる。

案の定魔力の流れがその場一帯に充滿している。

一応、一番強烈なところだけを確認してみる。

そこには結界が張られていた。

まあ、それが妥当だろう。

たとえ倒せないとしても、まさか放っておくわけにもいかないだろう。

いつ、街を襲うか分かったものじゃない。

そんな恐怖にさらされながらの生活なんて住民は嫌がるだろう。

「さて、さくさく行きますか。」

そして、二人は遺跡へと向かった。

そこは、小さな森だった。

とはいえ、あくまでも、密林都市ルツヴァイアの傍にあるから、そういうだけであって、実際はなかなか大きい。

普通に端から端まで通り抜けようと思えば、数週間はかかるだろう。

まあ、あくまでも、森だからだが。

普通に何もなかったところならば、一週間前後で越えられるはずだ。

森の中を通ると言うのは、そういうことだ。

決して簡単じゃない。

特に、悠達のような初心者ならば。

「たく、どれくらいかかるんだ？」

森に入った瞬間、悠はため息をついた。

一応、入る前に目印は残しておいた。

そうでなければ、方角がうまく読めない。

行きは、魔力の集中しているところを、行けばいいだけのことだが、帰りはそうはいかない。

やはり、目印は必要となる。

悠は、自分たちの周りに薄い結界を張っておく。

パーティに復帰するとそれと同時に、もう一度キュアに師事することにしたのだ。

そして、今度は結界を中心に教えてもらった。

以前のように、攻撃中心で、防御を無視した戦いにしないためにも。

自分の命や仲間の命を何があっても護るためである。

まあ、とはいえ、攻撃魔法も新しく教えてもらってはいるが。

やはり、バランスよくなくてはいけない。

一人二人の少人数ならば当然だ。

まあ、二人いるならば、片方が攻撃に特化し、片方が防御に特化しているというのもありだが。

それはそれだ。

人それぞれのやり方だ。

そして、悠はバランスを重視するほうが好みだった。

第十八話 封印の遺跡

森に入って数日たった。

結界がうまく効いているため、魔物と遭遇することは無かった。

まあ、実際問題、これはあくまでも、二人の訓練なのだから、遭遇したほうがいいのかもしれない。

やはり、経験と言うものは何にも勝る学習方法だ。

とはいえ、二人の姿を見てみれば、そんなことも言ってもらえない。

不慣れな探索。

しかも、森の中なのだ。

舗装された道ではなく、あるのはせいぜい獣道程度で、それだっところどころで切れてしまっている。

疲労困憊になってくるのは、目に見えている。

悠は、まだ体力があるほうだからかまわないが、フェルナなど少々顔が陰しい。

明らかに、限界が近い様子だ。

こんなことになるならば、フェンリルもつれてきたほうが良かった。

悠は、森に入ってしまったらしくしてそう思った。

もちろん、今更だし、何よりそれじゃ自分たちの訓練にならないから、言わないが。

さすがは、神族に名を連ねる一族と言うべきか、回復魔法もかなり熟知している。

実は、悠と以前瀕死になっていた男が助かったのも、フェンリルのおかげだ。

フェンリルがすぐに、応急処置をしたから、助かったのだ。

まあ、悠の場合は、それプラス自分自身の生命力の強さがあったが。それでも、どちらにしろ、フェンリルがいなければ、助からなかったことだ。

「さて、そろそろ、今日は、ここらへんで、休もうか？」

それはさておき、悠はキャンプにちょうどいいところを見つけると、提案した。

空を見れば、木々の合間からまだきらきらと太陽の光が差している。

本来なら、この時間帯に休憩すると言うことは、考えられない。

「は、はい。本当にごめんなさい」

けれど、フェルナは既に体力の限界。

これ以上進むのは、やはり危ない。

それに、もうそろそろ目的の遺跡はすぐそこだ。

無駄に急ぐ必要もない。

まあ、本職の冒険者なら、もうとつくの昔に到着している頃だろうから、急いだほうがいいのかもしれないが。

それでも、やはり、無理に急いで、怪我をするよりかはまだ。

下手に怪我して引き返すような羽目になるわけにもいかない。

それに、やはり、相手は中級魔族。

できる限り万全の状態で戦ったほうが無難だ。

遊びじゃなくて、これは命がけのもの。

そこらへんが、大切だ。

ゆっくり休んだ後、翌日二人は遺跡にたどり着いた。

聞いた話では、まだ、調査しきっていないらしく、はっきりとした地図はないらしい。

まあ、ルツツヴァイア付近にある遺跡はたいていそうになっている。どれもが、深い森の中にあるため、調査が簡単ではないからだ。よって、こういう遺跡にはえてして、何らかの物品が残っている。場合によっては、冒険者たちは、そういうのを、取って帰って、旅費の足しにしている。

以前のキュアがその例だ。

まあ、とはいえ、大して金に欲があるわけでもない二人にしてみれば、そんなことはどうでもいいかもしれないが。

あくまでも、これは二人にとっては訓練でしかないのだから。

悠たちは、魔力を辿りながら、進んでいく。

ところどころ、罠なんかがあったが、なんとか回避する。

たまに、フェルナが引つかかって、ベそをかくこともあったが。

それでも、比較的楽に進むことができた。

まあ、対魔族用の結界があるのと、悠自身が張り巡らしている結界のおかげではあるが。

数十分歩いたところで、階段に差し掛かる。

部屋の中央にあり、あからさまにあやしい。

まさしく、罠ですよ。

そういつているようなものだ。

悠も周囲を見回して、本当の階段を探す。

「この上から、魔力を感じます。きっとこの階段の奥に!!」

けれど、そんな子供でも分かるようなことにすら無視して、フェルナは駆け足で上っていく。

久しぶりに見た建物に安心感でも覚えたのだろうか。

その姿は、実に生き生きとしていて、はつらつとしている。

もしかすると、これこそ、彼女の本当の姿なのかもしれない。

が、まあ、当然のことなのだろう。

悠がそれに気づいて、フェルナをとめようとしたちょうどその時。

階段の段差がなくなり、綺麗な坂になった。

もちろん、呑気に陽気に階段を上っていたフェルナは

「きゃああああ!!」

絶叫と共に、その坂を滑り落ちたのだった。

ただ、運がよかったと言うべきなのか、かすり傷程度ですんだ。

まあ、さすがに、こんな所に引かかるような奴はいない。

いたとしても、フェルナのように、子供ぐらいと思ってたんだろう。

だから、この程度で済んだのだろう。

もし、本格的な罠だったなら、とつくの昔に、フェルナは死んでしまっていたはずだ。

悠は、内心でため息をつきながら、フェルナの傷を治していく。

本来なら、こんな小さなかすり傷など自然治癒の方がいい。

魔法での治癒は体にかかる負担がやや大きい。

ただ、やはり、現在魔族と戦おうとしている。

できるだけ、傷を負った状態ではいたくない。

どんな攻撃を仕掛けてくるか分からない分、用意周到でいたほうが無難だ。

悠は、傷をゆつくりと回復させながら――下手に急ぐよりは体に負担が少ないから――、あたりを観察する。

とはいえ、変わった様子はない。

けれど、明らかに、この上から、なんらかの波動を感じる。

よって、ここから、隠し階段にしろ、隠し通路にしろ、見つけださなくては前に進めない。

けれど、残念ながら、悠にはそれが分からない。

そもそも、何がどうおかしいかすら予測がつかない。

まあ、この世界の建築方式など、常識を知らない分、見分けるのは難しい。

それが、たとえば、古代に立てられた遺跡だったとしても。

とはいえ、だからといって、いつまでもここで往生してるわけにも行かない。

フェルナの回復を負えると、悠は、立ち上がり、

『今ここに来たれ、熱き衝動。全てを薙ぎ払う波動。フレイム・ウェイブ』

天井に向かって魔法を放つ。

熱を持った波動は、天井に向かって、突き進み、触れた瞬間、爆音を轟かせる。

けれど、その轟音の割りに、天井には、傷一つない。

「結界魔法か」

悠の言うとおり、結界が張り巡らされている。

せいぜい、中級魔法でしかない、『フレイム・ウェイブ』では少々役不足みたいだ。

とはいえ、だからといって、上級魔法を使うとなると、それはそれでもつたいない。

できるだけ、魔力は温存しておきたいからだ。

悠は、腕を組み、考え込んだ。

壁沿いに歩きながら、観察する。

けれど、相変わらず、特に変わった様子はない。

悠は、ため息をつきつつ、フェルナの元へと戻る。

フェルナの方もそれなりに考えてはいたみたいだが、答えが浮かんでいない様子はない。

まあ、やはり、フェルナはどちらかといえば、頭脳派ではないだろう。

とはいえ、だからと言って、武闘派でもないが。

それはさておき、悠は困りきったように、座り込むと天井を見る。

そこには、びっしりと文字が書かれている。

おそらく、古代語だろう。

魔法陣の補助の意味として、描かれている。

悠にもそれぐらい理解できた。

そして、その一部でも破壊すれば、結界として機能しなくなる。

綻びができた瞬間に穴があき、そこから、崩れ始めるのだ。

とはいえ、それにだって、もちろん、解呪用の魔法が必要になる。

そう簡単に消されてしまうような、結界なら、意味が無いからである。

悠は、自分の愛用の大剣を抜くと、刃に指をあてがう。

そして、指を軽くする。

その途端に、血が流れ始める。

何のためでもない、魔法を使うためだ。

悠は、自分の血で、床に小さく、古代文字を描くと、そこに手のひらを当てる。

そして、魔法の詠唱が始まる。

『闇夜を切り裂く破魔の光槍。古の契約の下、血を代償に、我に力を与えよ。ランス・ビア・レイ』

やがて、詠唱が終わり、手を地面から引き上げる。

その途端に、光が弾け、悠の手に一本の光の槍が現れる。

『ランス・ビア・レイ』

古代魔法でも、上位に位置する魔法。

とはいえ、威力はさほどなく、魔力消費も少ない。

ただ、魔力を凝縮させて作った槍のため、物を貫通させたいときなどにはうってつけの魔法でもある。

つまり、今回のように、結界を壊すには、ちょうどいいということだ。

悠は、その光の槍を、構えると、天井へ向かって放つ。

光の槍は見事、天井の一点を突き破った。

けれど、悠は天井を見上げて、舌打ちした。

確かに、光の槍は天井を貫通した。

けれど、結界を砕く事はできなかった。

穴があいた所を、まるで補填するかのように、うまく循環させてい

る。

そのため、決壊していかないのだ。

悠は、ため息をつくと、もう一度、部屋を隅々まで調べていく。

その目は、今まで以上に、真剣味を帯びている。

悠も気がついたのだ。

自分が予想した以上に、複雑緻密で、かなり高度の結界。

そんな結界で封印されながらも、かなり強烈な魔力の波動を放つ。

はっきり言って、Bランクで処理されるような存在ではない。

確実に、Aランク、いや、もしかするとSランクとも考えられる。

そんな相手が封印されている結界だ、簡単なものではない。

けれど、だからと言って、それが決して解くことのできないものでもないことも予想がつく。

封印した。

それは、いつか、封印を解き、弱体化したところを討つ。

そういうことだ。

いくらなんでも、結界魔法が同じ効力のままで存続する事はないか

らだ。

だから、封印が解けない事はない。

悠は、今度は魔力探査だけではなく、気の流れも読む。

これは、フェンリルに習ったものだ。

残念ながら、まだ、気をうまく使えないが、それでも流れだけは読めるようになった。

頭の中を空にして、部屋の中に溢れている、気を感じ取る。

そして、その気の流れを、見極め、さらに方向を辿る。

悠は、その感じ取った気の流れを一つ一つ選別する。

結界へとつながる気の流れを探す。

そして、数十分後悠はそれを掴み取った。

第十九話 いざ、戦場へ

それは意外と簡単な構図だった。

一箇所だけ、結界の内と外をつなぐ場所があった。

後は、パズルのように、そこに合う形式で魔力を注げばいい。

そうすれば、無事に道が開ける。

とはいえ、悠はいったんそこで休憩にした。

魔力を操作するとは違って、気の流れを読むのは意外と難しい。

少々小難しい話にはなるが、魔力による探知は、周囲にあるエーテルを利用している。

エーテルというのは、魔力に似ているようで、存在形式が少し異なっただけのことだ。

もちろん、エーテルなしでも、探査できるし、魔法の発動もできる。

けれど、体内にある魔力は少々不安定で、しかも扱いにくい。

よって、いきなり自分の魔力のみで、魔法を発動させようとすると、不安定な状態で生まれ、たいていの場合、制御できなくなる。

そのために、慣れないうちはエーテルを利用しているのだ。

まあ、簡単に言うと、自分で生み出した魔法の制御補助をエーテルにさせているといった感じだ。

もちろん、エーテルは基本的に、世界のどこにでも存在している。

世界形成の根源の一つとして考えてもいい。

けれど、そんな使い勝手のいい魔力とは違い、気となるまた変わってくる。

気とは、基本的に体内にある生命力だ。

当然、体内にあるものだから、外、大気中には存在しない。

もちろん、魔力にとってのエーテルと同じようなものも存在しない。

よって、気を扱おうと思うと、何の補助もなしでやらなくてはいけない。

当然、まだ慣れない者が使うとなると、かなり精神力を奪われる。

魔法を使うときもそうだが、気を使う―気功―も、高い集中力が必要となるからだ。

そして、悠もまだ気功に慣れていないため、疲労が蓄積している。

まあ、上級古代魔法を使ったと言うのも上げられるが。

それに、やはり、無駄に焦って失敗しないために、心を落ち着かせておくことも必要だからだ。

悠とフェルナは、それぞれキャンプの支度をする、休みについた。翌日目が覚めると二人は、携帯用の乾物を食べると、軽く支度を始める。

まずは、結界。

体の周囲数センチほど外に結界をはり、魔法・物理攻撃を遮断する。とは言っても、遮断できるのはせいぜい下級魔法程度なので、ダメージを少々軽減させる程度だ。

けれど、何もしないよりもましだろう。

結界をはった後は、剣を抜き、結界の穴に軽く立てる。

剣を媒介にして、扉をこじ開けるのだ。

魔法を増幅させる効果がエンチャントされていたみたいだ。

悠は、ゆっくりと方式に従って、魔力を流し込む。

流れ込んでいく魔力は、結界魔法陣を通り、淡く発光し始める。

感触は、いい。

キュアに師事しているおかげか、悠の魔法のレベルはかなり高い。

元々の才能があるとは言え、かなり高度なスキルが必要となる古代

魔法を使える事からもそれが言える。

そんなわけで、拔群の魔力操作と感知の能力を会得している悠にして見れば、これぐらいは簡単な作業だった。

そして、完全に流し終えると、先ほどまで淡く発光していた魔法陣の光が、その中央に集中して、光が下りてくる。

どうやら、そこから結界内に入るようだ。

もしものことを考えて、結界自体が消滅するようにはできていないのだろう。

それだけで、かなり強力な結界魔法であることが分かる。

確実に悠以上、もしかすると、キュア以上の物かもしれない。

それだけ、強力で緻密な結界なのだ。

悠は、フェルナの方を向く。

それに答えるようにフェルナは頷き返す。

『我戴くは、漆黒の翼。墮天の証。神をも裏切り破壊を尽くす銀の力。今此処に全てを放ち、我が身に宿れ。カオテッドウィング』

それを確認すると、悠は詠唱を唱え、漆黒の翼を背負う。

後から悠が聞いた話では、この『カオテッドウィング』もまた、古代魔法に入るらしい。

まあ、これだけの威力を発揮する魔法が、現代の魔法ではありえないが。

そして、二人は、光へと向かうと、結界内に入った。

第二十話 デット・オア・アライブ

中に入ると、強烈なプレッシャーが辺りを満たしていた。

結界からもれる力である程度予測していたとは言え、はっきり言って、気を抜けば失神してしまいそうなほどだ。

悠は、脂汗をたらしながら、隣にいるフェルナの方へと向き直る。

心配しての事だったのだが、案の定フェルナは顔を青くして震えている。

はっきり言って、二人の手に負えるような相手ではない。

悠は、すでに中に入った事を後悔している。

読み間違えたのだ。

ここまであからさまな差が出るとは思わなかった。

悠は、力の発生源を見る。

だらしなく体を弛緩させている、人形のような生命体。

確実に、中級魔族どころではない。

上位魔族と考えて間違いない。

練習相手どころか、無謀な挑戦だ。

とはいえ、結界の外には出られそうにもない。

目の前にいる上位魔族を封じ込めている結界の内に、もう一つ結界がはられている。

もちろん、目の前にいる上位魔族のものだろう。

「フェルナ、援護を頼む！！」

悠は、大声を張り上げると、上位魔族に向かって突進する。

引けない以上、もう闘うしかない。

『全てを終焉へと導く破壊の衝動。虚無へと導く銀の閃光。神はもうおらず、恩恵は与えられず。ただ滅びるのみ。銀の翼よ、我が前にその姿現せ！！シルバーウィング』

間合いを詰めつつ、魔法の詠唱をする。

はっきり言って、かなり精神力を磨耗する。

けれど、これぐらいの芸当をしないと、まともに渡り合えるような相手ではない。

漆黒の翼が銀色に変わり、悠の身体能力が向上する。

『神々に祝福されし破魔の光。虚構に彩られし世界を切り裂く力となりて我が剣に宿れ・シャイニングブレード』

さらに、剣に魔法を付加させる。

『シャイニングブレード』

白魔法でも、かなり上位に位置する物で、剣に強力な魔法を不可させる事によって、攻撃力を何十倍にもする。

もちろん、剣にある増幅効果で、その能力はさらに引き伸ばされる。

そして、そのともすれば、必殺と言っても間違いない袈裟斬りの一撃を未だ動きを見せない魔族に向かって放った。

悠の放った一撃は、いとも簡単に避けられた。

「ねえ、君が僕の新しいおもちゃなの？」

そして、悠の腕を掴むと、にこにこ笑いながら、そうたずねてくる。

悠は、ぞっとした。

その無邪気そうな笑みとは裏腹に、どす黒いまでも醜悪な殺気が満ち溢れているからだ。

『ウォルティッドⅡサラマンダー』

悠は、条件反射のように、魔法を放つと、手を引き剥がし、間合いを取る。

そのついでに、悠はフェルナの方を見るが、未だに魔法の詠唱をし

ている。

かなり強力なものを放つつもりなのか、それとも、悠がブラインドになっていたせいで、撃てなかったのかは、分からないが、攻撃しようと言う意思は今のところ見当たらない。

「ちょっと、ひどいなあ。いきなり、こんなことするなんて。でも、なかなか元気が良くて、おもしろそう」

それに、今はフェルナの事を構っている余裕はない。

目の前にいる魔族は全くダメージを受けてはおらず、むしろ嬉々として立っていた。

もちろん、キュアやリエラが言っていたから、ある程度知っていたので、大してダメージは与えられないことぐらい分かっていたが、やはり驚きは隠せない。

にこにこ笑う魔族は、悠とフェルナの事を値踏みするかのように、見ている。

明らかに、この状況を楽しみ、自分の勝利を疑っていない。

『ウォーターシュート』

圧倒的に不利なのは、悠は分かっている。

遊ばれているのも十分理解している。

けれど、だからこそそこから勝機が見えることもある。

魔法でけん制をいれて、間合いを詰める。

ぐっと腰を落とし、広い攻撃範囲をいかし、間合いぎりぎりで剣を薙ぎ払う。

けれど、魔族はその一撃を片手で受け止め、いなすと、滑るように間合いを締め、悠の胸に手を添え、

「これぐらいなら、耐えられるよね」

そうつぶやきながら、魔力を塊を弾けさせる。

「があ!!」

その直撃を受けた悠は、威力に押され、吹き飛ばされる。

せめてもの救いは、攻撃を受けたのと同時に、剣を床に突き立てたため、壁に叩きつけられるような事はなかった。

まあ、それでも、ダメージ量は半端ではないが。

悠は内心で、舌打ちをしつつ、もう一度、間合いをつめる。

フェルナの方から、かなり強力な圧縮されつつある魔力を感じられる。

魔族の方の意識もそっちへと向かっている。

『ホーリーランサー』

『ボルティックⅡサラマンダー』

それがちょうど良かった。

悠は、その隙をつくようにして、魔法を放つ。

けれど、その魔法はあっさりと、はじき返された。

悠は、それを内心で舌打ちしつつ、一定の間合いを取り、魔族とフェルナの直線上に立つ。

「ふむ、あの魔族の娘が君の切り札なんだ」

そこから、感じ取ったのだろう、魔族は、くすくすと笑いながら、そうつぶやく。

けれど、悠は、それに取り合わず、

『天空を満たす淡き光の精霊たちよ。我が声を聞き、我が祈りを聞き、汝らの力を今此処に具現し、光の洗礼を与えよ・シャイニング
Ⅱレイン』

新たに魔法を紡ぎ出すと、魔族に向かって、放つ。

光の雨が魔族に向かう。

これもまた、古代魔法で、上位も上位、古代魔法でも、かなりの攻撃力を保有する魔法だ。

さすがに、それを浴びるのは、まずいと思ったのだろう、さつと後退する事で、避ける。

悠は、それを追撃するように、薙ぎ払う。

今度こそ、悠は取ったと思った。

タイミングは絶妙。

けれど、それでも、まだ足りなかった。

魔族は、ぞくりとするような笑みを浮かべ、そつと手をかざすと、

『ダークネスⅡエッジ』

闇の剣を生み出し、悠に向かって放つ。

避けられるようなタイミングではなかった。

むしろ、悠はこうなるように、誘われていたのだ。

無理やり、体勢を変えると、剣でほんの少し軌道を変える。

そのまま避けると、フェルナに当たる可能性があるからだ。

とはいえ、当然、無理な体勢で、無理やり軌道を変えたのだ、魔法の余波を受け、吹き飛ばされる。

直撃は避けたとは言え、無視できるようなダメージではない。

それに、長期の『シルバーウィング』の使用のため、かなり精神力を磨耗している。

とはいえ、だからと言って、解くわけにもいかない。

そうなれば、確実に瞬殺だ。

もちろん、今だって、互角に闘えているとは言えないが。

それでも、解くわけには行かない。

それに……

悠は、また、間合いを詰めるように、魔族へと突進する。

魔族もそれに対して、いつでも迎撃できるように構える。

けれど、悠は、間合いに入るぎりぎり直前で、横に飛びのくと、

「今だ、フェルナー！」

叫ぶ。

そう、既にフェルナの魔法が完成していたのだ。

そして、フェルナは、その声に答えるようにして、

『ヘルゲートⅡジオティクス』

大気を震撼させる一撃を放った。

フェルナの放った一撃は、魔族がいる辺り一帯を飲み込むと、空間を圧縮し始める。

そして、次の瞬間はぜた。

爆音が響き、大気が震撼する。

その地響きに耐え切れず、フェルナは跪く。

けれど、それと同時に、確信していた。

両親が死ぬ間際にくれた魔術書。

その中でも最高ランクにあり、禁術にも指定されるほど強力な魔術。

自分の持つ全魔力を使って発生させる魔術。

それが完全に成功したのだ。

完璧に消滅した。

そう思った。

けれど、爆煙が消え、視界が開かれたとき、愕然とした。

結界を張り、悠然とたたずむ魔族の姿を見たからだ。

「最初から、君の攻撃が狙いだと分かっていたんだ。これぐらいの準備は当然だろう？」

そんなフェルナの姿を見て、魔族は笑いながらそう言った。

けれど、それはまさしく真理だった。

そうすることは、当然の事だった。

フェルナは、全てを諦め、うつむく。

けれど、それと同時に巨大な魔力を感じ取った。

自分が先ほどまで溜め込んでいた以上の魔力が。

悠はいつのまにかに、詠唱を済ませていた。

その手には二つの光球が浮かんでいた。

右手には、神々しいまでの白く輝く光。

左手には、禍々しく全てを飲み込み消し去ってしまいそうな暗黒の光。

悠は、脂汗をかきながら、制御していた。

古代魔術でも最高ランクに位置する魔法。

破壊力は、現存する魔法では最強。

ただし、構成から何から、全てが難解すぎて、ほとんどの人間が扱えない。

キュアが冗談で教えた魔法だった。

そして、悠は

『ラグナロク!!』

大声でそう叫ぶと、その光球を放つ。

一つは、天空に広がり、もう一つは大地に根付く。

その瞬間に、魔族を強力な結界が包み込む。

そして、広がった二つの力は一つに融合すると、それと同時に爆発した。

その一撃はフェルナが放った一撃とは比べ物にならなかった。

悠とフェルナはすぐに耳をふさいだ。

そうでもしないと鼓膜が破れてしまいそうなほどの轟音だった。

大地は鳴動し、大気は震え上がる。

魔族を包み込んでいた結界は耐え切れず、崩れ去り、光が漏れる。

その強烈な光は、一瞬にして目を焼いてしまいそうなほど強烈なものだった。

目を瞑っていても、目が痛む。

それがいかに、悠が放った魔法の桁違いの威力を有する事の証明だった。

轟音が途切れ、大地の鳴動が止まったのを確認すると、二人は目をあけた。

そして、願った。

魔族の姿がない事を。

悠は、これに全てをかけた。

フェルナの強烈な一撃を、あえて囷にする事で、自分の持つ最高の魔法を放った。

扱えるかどうかは分からなかった。

それでも、賭けに出た。

もとより、『ラグナロク』が使えなければ、勝てる要素はなかった。

フェルナの魔法が防がれることは最初から予想できた。

だからこそ、フェルナの使う魔法以上の威力を持った物を、気づかれないように放たなければならなかった。

そうしなければ、勝算はなかった。

悠は、祈った。

この魔法は、過去何度も現れた魔王を退けた魔法として、記されている。

だから、きっと効いてくれるはずだと思った。

たとえ、自分がまだ弱くても、魔王でなく、魔族ならば、そう思った。

けれど、現実はどこまでも冷酷だった。

魔族は、ずたずたになりながらも、立っていた。

その目に憎悪の光を宿して。

右腕と左足は消し飛び、左腕は焼け爛れてはいたが、それでも、立っていた。

いや、それは、間違いか。

魔族は立っていたのではない。

浮いていた。

先ほどまであった床は綺麗に消し飛び、結界だけが残っていた。

「人間があっ!!」

魔族は、悠に向かって突進する。

悠は、痛む体を叱咤し、飛びのこうとする。

けれど、それよりも早く、魔族の手が悠を捉えた。

その一撃は右胸に突き刺さる。

「がはっ!!」

その強烈な一撃に、悠は失神しそうになった。

どんどん魔力が血液と一緒に流れていく。

ただでさえ、膨大な魔力を必要とする『シルバーウィング』と『ラグナロク』を使ったというのに、これでは体が持たない。

いや、貫通された時点で、結果は見えている。

ならば!!

悠は、瞳を閉じる。

そして

「お前も道連れだ!!はぜよ、銀の翼!!」

悠は、『シルバーウィング』の力を解放した。

解放された事により、安定性のかけらのない力は、暴走し、大気を震撼させる。

そう、『シルバーウィング』の奥の手、自爆だった。

悠を中心にして、三度目の轟音がとどろいた。

強烈な光は、魔族を飲み込み、消し飛ばした。

悠は、その場に崩れ落ちた。

そのまま大量の血液が流れ出す。

もって、数分だろう。

「今度は、守った、よな？」

悠は、意識が朦朧とする中そう呟いた。

その声は、どこか満ち足りていた。

「悠さん!!」

けれど、それを見るフェルナの表情は、今にも壊れだしそうだった。

必死になって、魔法陣を描く。

魔力吸収の魔法陣だ。

もう既に、フェルナの魔力は切れている。

使うのは、結界に使用されていた魔力だ。

すでに、結界は消えてなくなっている。

よって、無駄にあまっている魔力を魔法陣に集め、その中心に立つことで、そこから魔力を供給するのだ。

『永久に続く道のりを歩く旅人よ。汝らが辿りし軌跡の後を再度振り返らんために我が求める地へと繋げ。スラルⅡゲート』

そして、フェルナは、時空の扉を呼び出すと、そのまま悠と自分を転送させる。

一瞬、辺りに闇に満ちたが、すぐに光が差し込まれる。

無事に、送り届けられた。

送り届けられた場所とは、

『フェルナよ、この男、どうしたというのだ？』

フェンリルのもとだった。

「お仕事中にやられたの！！フェンリルさん、お願い」

そう以前助けてくれたフェンリルならば、今回も助けてもらえる。

あれだけひどかった傷を癒したのだから、今回も大丈夫。

そう思った。

『分かっておる。その代わり、今回は、私だけでは無理だ。私が抑

えておくから、他の二人も呼んできてくれ』

けれど、それでも、今回ののは、以前以上にひどい。

そのための手伝いが必要だった。

「うん」

それに答えると、フェルナは急いで、二人の下へと走った。

第二十一話 フェルナの願い

フェンリルの治療の結果、悠が目を覚ましたのは、5日後の事だった。

けれど、悠自身が受けたダメージは大きく、予断は許されなかった。

実際、リエラとキュアのサポートがなければ、難しいものだった。

もし、フェンリルだけであれば、まず間違いなく死んでいた。

だからこそ、助かったときは、フェルナは大きく安堵した。

もう、二度と目の前で大切な人は死んで欲しくなかったから。

「みんな、すまないな。迷惑かけて」

目を覚まし、ようやく意識がしつかりしたところで、悠は、謝った。

「ううん、いいの。私が、足手まといだったのがいけないわけだし」

それに対して、フェルナは顔を翳らした。

フェルナは役に立たなかった。

確かに、フェルナの一撃は、役に立った。

けれど、それだけだった。

その後は、何もしてない。

いや、魔法一撃しか使えなかった。

それ以外は何もしていない。

それが心苦しかった。

「仕方ないよ、相手が相手だしね。俺の読み間違えのせいだし、むしろ悪いのは俺。だから、そんな顔しないで？」

けれど、それもやはり悠の言うとおり当然だった。

大して戦闘経験のないフェルナだ、いきなり上級魔族と闘えるわけがない。

むしろ、全滅しなかっただけでも十分なのだ。

普通の冒険者ならば、一瞬で全滅だ。

それぐらい絶望的な力の差があるのだ。

人間と上級魔族は。

もちろん、戦闘経験がなく、特別な訓練を受けていないフェルナもまた同じ。

フェルナも、魔力は高くても、そういう所は人間と全く変わっていないのだ。

だからこそ今回のギルドの依頼だったのだ。

そして、その中で、危険を察知しつつも、軽視した悠が悪かったのだ。

「ええ、そうね。悠、あなたが悪いのよ」

二人のやり取りを見ていたキュアが話しに割ってきた。

「自分の力を考えずに、明らかに勝算のない相手に勝負を仕掛けた。やってはいけないことよ」

二人は、キュアの方へと向いた。

けれど、それと同時に軽く驚く。

明らかに怒っていた。

その目は強烈な光を放っている。

「なぜ、そんなことをしたの？なぜ私たちに助けを求めなかったの
！！」

そして、その想いが爆発した。

フェルナなどその壮絶さを目の当たりにして、怯えている。

「あんたたちを信用していないから」

けれど、そんな中で、悠はぼつりとそう呟いた。

決して臆することなく。

「俺は、あんたたちの事を仲間だとは思っていない。俺達はただお互いの利害が一致しているから一緒にいるに過ぎない。俺は、何があっても始まりの魔女に会わなくてはいけない。そして、それはリエラも同じ。だから、我慢して俺達と一緒にいる。キュアもそうだろう？別にキュアだって俺達を、フェルナの事を仲間とは思っていない。フェルナがいないと俺と一緒にいないから、ただフェルナの事を受け入れて入るふりをしているにすぎない。だったら、俺は別として、フェルナは全く安全じゃない。それこそ、いつ切り捨てられるか分かったものじゃない。そんな奴をどうして信用できる？どうして、助けを求められる？今回助けてもらった事はありがたく思う。心から感謝している。だけど、それでも俺はあんたたちを信じていないし、仲間だとも思わない。フェルナを受け入れない奴を、信用して、仲間だと思えるほど、俺は甘くはない」

そう切って捨てた。

その目には明らかに憎悪がともっていた。

それに対して、キュアは何も言えなかった。

それがあまりにも的をいていたから。

キュアはフェルナの事を受けいれていない。

助ける気などさらさらない。

魔族を助ける義理なんてない。

そう思っている。

だから、悠の言っている事は全て正しい。

「けれど、それで死んでしまったら、どうするつもりなの!？」

だからと言って、素直にそう頷けなかった。

たとえば、フェルナの事をそう思っていなかったとしても、悠は違う。

悠は、仲間だ。

だから、そう簡単には死んで欲しくはなかった。

「構わない。別に、大切な者を守る結果として死んだと言うのなら、むしろ大歓迎だ」

けれど、そんな言葉に対して、悠の答えは、ひどく酷なものだった。辺りはしんとした沈黙に満たされた。

誰も、言葉を発さない。

フェンリル、リエラに関しては、元から会話に参加する気はなかった。

特に、リエラに関しては、悠が死のうがどうしようがどうでも良かった。

「話しは、もういいだろう？ 傷に触るから、出て行ってくれ」

悠は、そう言うのと、そんな感じの手振りを示す。

それに対して、キュアは一瞬文句を言おうとしたが、結局何も思い浮かばず、黙って出て行った。

それに付いていくように、リエラとフェンリルが外に出て行く。

けれど、フェルナだけは、出て行かなかった。

「悠さんのお気持ちはとても嬉しいです」

フェルナは、悠の寝ているベッドに腰をかけると、そういった。

けれど、その言葉振りに対して、その表情はとても暗い。

「でも、だからと言って、無茶をしたり、自分の立場を追い詰めた
りしないでください」

そして、その表情のまま続けた。

悲壮感を漂わせて。

「悠さんに仲間だ、そう言ってもらえるのは嬉しいですけど、自分ばかり無理しないでください。私も悠さんを仲間だと思っています。だから守られるだけじゃなくて、守りたいとも思います。自分ばかり頑張らないでください。もし、その結果で死なれたら、私、自分がどうなるかわかりません。もうこれ以上、目の前で大切な人が死ぬ所なんて見たくないんです。だから、命を簡単に捨てたりしな

いでください。お願いします」

その思いは、全てが悠の行いが原因だった。

仲間だからこそ、頼って欲しい。

仲間だからこそ、自分を犠牲にして欲しくない。

大切だから、死んで欲しくないから。

それがフェルナの想いだった。

そして、だからこそ、悠の事をとがめていた。

悠は、それに対して文句は言わなかった。

それは、かつて自分が抱いた想いだったから。

「えっと、子供のくせに、生意気言ってごめんなさい。でも、これが私の気持ちなんです。仲間だからこそ、言いたかったんです。それじゃ、私も出て行きますね」

そして、フェルナは最後にそういうと、部屋を出て行った。

悠は、完全に一人になった。

見えるのは、見飽きた天井だけ。

けれど、心の目で見ているものは、もっと別の物だった。

かつて、自分がいた世界。

そして、そこで経験して来たことだった。

第二十二話 似た者同士

翌日、悠は、目を覚ますと、宿を出た。

一応、新しく服は買いなおしておいた。

さすがに、以前使った服はもうぼろぼろで、使い物にならない。

それ以前に、自分の体も上手く使えない。

自分で自分の体を診断してみたところ、しばらくまともに魔法を使えそうにもない。

ほとんど魔力は空になっている。

小さな火種すら出せない。

さすがに、あれだけ派手に使ったせいだろう。

こんな状態でもし、戦闘になれば、確実に手も足も出せずに、終わってしまう。

けれど、そんな状態だと言うのに、悠は、街から出ると、そばにあった森に入った。

『フォルモーリストの森』だ。

密林都市のすぐ傍にある森はそこしかない。

もちろん、悠はそうだとは知らない。

中に入って数分ほど歩くと、悠はその場に座り込んだ。

街の喧騒は全く聞こえない。

静かな場所に來たかったのだろう。

さすがに、宿の中でそれを求めるのは、難しい。

すぐ傍に置いておいた剣を抜き放つと、天にかざす。

木漏れ日を浴びた剣は淡く鈍く光る。

「これで俺も人殺しの仲間か」

それを見ながら悠はぽつりと呟いた。

人殺し。

悠は、自分をそういった。

その姿はどこか自嘲的だ。

「たとえば、守るためとは言え、俺は殺した。魔族とはいえ、俺はこの手で殺したんだ」

いや、確実に自嘲しているのだろう。

悠にとって、魔族は人と同じ。

いや、そもそも生物を殺した時点で、そう思ったのだろう。

今まで殺した事などなかった。

あっちの世界のあの国ではその必要はなかったから。

だからこそ、今こうして殺した事を哀れんでいるのだろう。

「そして、俺はこれからも、殺していく。守るために殺していく。二度と失わないために。二度と後悔なんてしないために」

けれど、それ自体には後悔していない。

殺さなければ、殺されていたから。

守れなかったから。

そして、それと同時に戒めておいたのだろう。

これから、自分の為す事を。

これからの自分のあり方を。

悠は、痛む体に鞭打ち立ち上がる。

悠自身の答えは出た。

この手を汚してでも、フェルナを守る。

自分と同じ孤独な存在。

大切な存在を失った者。

だからこそ、守る。

フェルナの希望になりたかったから。

そのためには、強くならなくてはならない。

決して死んではいけない。

フェルナはそれを望んではないから。

悠と同じく失う痛みを知っている。

だからこそ、守られて、そして失うことには耐えられない。

もう耐えるすべを持たない。

悠は剣をしまうと、歩き始める。

そのためには、さっさと戻らなくてはならない。

いなくなってしまった悠の事を心配しているかもしれない。

書き置きなんてしていない。

確実に、騒ぎになっている事が思い浮かぶ。

本来なら、動いてはいけないほどの重病人扱いなのだ。

先ほど通った通りに歩き始める。

それほど深く入っていなかったおかげか、すぐに森の外に出られた。

いや、もしかすると、悠自身が鍵だからなのかもしれない。

それは、定かではないが、大して迷う事なく悠は森の外に出られた。

森を出ると、宿へと向かう。

すぐに、喧騒が辺りを包む。

それが、今の悠には心地よかった。

宿に変えると、悠はキュアから平手を一発喰らった。

重病人の癖に外に出たのだから当然だ。

フェルナは、悠に泣き付いていた。

悠は、それをあやしながら、ただ謝っていた。

自分自身が悪い事はしっかりと分かっていたから。

だから、今度は何も言わなかった。

反論もしなかった。

そのまま、だまって受け入れ、反省した。

そして、それから、三日後、悠の傷は完治した。

魔力も完璧に回復した。

いや、完璧というよりも、以前よりも絶対量が増えていた。

限界ぎりぎりまで魔力を使用した事で、成長したのだろう。

悠にとっては、ありがたかった。

命を張った甲斐があったと言うものだ。

ついでに、現在、一応常時気を練っている。

知識の宝庫であるフェンリルにたずねたら、そうしたほうが言ったからだ。

やはり、気功と言う物を扱うには、まず身体自身に慣れさせなくてはならない。

慣れさえすれば、いくらでも使いようがある。

それはさておき、悠は、宿屋を出ると、すぐに服屋に向かった。

今着ている服はやはり、微妙にサイズがおかしい。

なので、一応ぴったりの奴を選びたい。

まあ、デザインが気に入らないと言うのもあるが。

やはり、悠と他の人との感性は少々違いがある。

服屋に入ると、あれこれと選ぶ。

いろいろと種類があつて、正直ごちゃごちゃしている。

その中から二、三着選ぶと、レジに持っていく。

前回みたいにぼろぼろになったら、またいちいち買いに来なくては
いけなくなるからだ。

面倒事は一度にすませておいたほうが無難だ。

それを買えば終わると、悠は服屋を後にした。

第二十三話 悠の一日

「はっ、てい、やあ!!」

悠は、掛け声と共に、剣を振るう。

その攻撃を、フェンリルは全て、紙一重でかわす。

悠の特訓中だった。

ともすれば、魔法中心になる戦闘スタイルにもう少し幅を利かせるためだ。

「爆壊衝ばっかいしょう!!」

悠は、いったん間合いを取り直すと、剣を地面に叩きつける。

叩きつけられた地面は、瓦解し、石礫がフェンリルへと飛ぶ。

しかし、それも、フェンリルは紙一重で交わし、

『ファイアーボール』

それと同時に、火炎球を放つ。

悠は、それをなんとか、交わすと、地面を滑るようにして、進む。

そして、剣を逆手で持ち、左手を柄にそえると

「滅^{めつ}牙^が斬^{ざん}!!」

先ほどと同じく、剣を地面に叩きつける。

けれど、その蓄えられる力は、先ほどとは比べものにならない。

いったん地面に収束された力は、悠の振り抜きと同時に爆発し、力の奔流がフェンリルを飲み込む。

しかし、それよりも早く、フェンリルは悠の懷に踏み込むと、強烈な当身をする。

攻撃の瞬間は、どんな達人でも隙がある。

大して経験の無い悠も、当然ながら、隙だらけで、当身の直撃を受け、吹き飛ぶ。

『勝負あり、だな』

そして、それと同時に勝敗が決した。

「ああ、やっぱり、あんたには、敵わないよ」

悠は、体を起こすと、埃をはらう。

その顔には、苦笑が浮かんでいる。

さすがに、あっさりと負けてしまって、悔しいみたいだ。

『だが、筋は悪くない。まあ、元々の身体ポテンシャルのせいだろ

うがな』

それがありありと感じられるのだろう、フェンリルは、フォローを入れておく。

それが、フォローになっているのかどうかは、少々あやしいが。

「ありがと。さあ、そろそろ晩飯の時間だ、戻ろう？」

そんな曖昧なフォローだが、それでも十分なのだろう、悠は、フェンリルを促すと、帰る支度を始める。

今は、街の傍の平原にいる。

さすがに、街中で、どんぱちするわけにはいかない。

『ああ、そうだな。先に行っている』

フェンリルは、そう答えると、そそくさと戻る。

荷物が無いと言うのは、本当に楽だ。

悠も、剣を背負うと、フェンリルの後を追った。

宿屋に戻るとすぐに、キュアの魔法講義が始まった。

以前の悠の『仲間とは思っていない』発言のせいで、最初の内は気まずかった。

けれど、それもしばらくすると、鳴りを潜める結果となった。

最終的には、仲間ではなく、教師と生徒という関係に落ち着いたからである。

その関係でいる分には、変ないざござが起きずにすんだからだ。

教師としてのキュアを、悠は受け入れた。

今、現在は、あらゆる魔法の知識を植え込んでいる。

現在、悠が使える魔法は、100を超える。

魔法を知って一月足らずで、である。

その才能の桁外れさを、再度見せ付けた。

とはいえ、魔力はさすがに、キュアの足元にも及ばず、最大出力は低い。

もし、以前の戦いで、同じようにキュアが悠と同じように『ラグナロク』を放ったとすれば、力を十分残して、消滅させることが出来ただろう。

それぐらい、圧倒的な差が二人にはあるのだ。

今の悠は、地道に魔法の知識と最大魔力を増やしている。

魔法の知識を蓄えれば、自分自身で新しく魔法を生み出すことも可能だからである。

とはいえ、それには、それ相応の才能も必要であるが。

魔法を使う才能ではなく、魔法を理解する才能が、である。

もちろん、キュアにはその才能もあった。

使い勝手が悪く、効率の悪い魔法は構成をいじって使っている。

それも大して苦勞することなく。

魔法の知識とそれに対する理解力があるからこそ、初めて出来る事なのである。

これもまた、ある種天性のものであり、後から覚える事は難しい。

これが、キュアの一番の魔法の才能なのかもしれない。

「後、3時間ほど、ずっと魔力を垂れ流していなさい。」

そして、講義が終わると、キュアは悠にそう言った。

悠は、それに対して、文句を言うことなく、頷くと、言われた通りにする。

魔力の絶対量を増やす一番の方法は、やはり魔力の限界使用である。

限界まで使い、しっかりと栄養を取って、休養する。

それが、一番の近道である。

そうして、悠の特訓の一日は、終わりを告げる。

特訓を終えた、悠は、着替えを持って、外に出た。

行き先は温泉。

ここ最近の日課である。

やはり、疲れた体を癒すには、それが一番である。

密林都市ルツツヴィアは、温泉でも有名である。

それこそ、セフィロトの十選にも数えられる名湯でもある。

とはいえ、そんな名湯の街だが、さすがに宿には温泉は無い。

簡易的な設備が付いているぐらいだ。

そのため、わざわざ銭湯にまで足を運ばなくてはならないのである。

悠は、いつもどおりに受付で銅貨を渡しチケットをもらうと、男性浴場に向かう。

そして、ロッカーに着ていた物を脱ぐと入れる。

ついでに、愛用の剣も入れておく。

できるだけ、武器は手放さないように心がけている。

いつどこで何が起きるか分からない。

そのためにも、できる限りの事をしておく必要があると思っているからだ。

服を脱ぎ、浴場に入る。

中には、やはり老人が多い。

名湯と呼ばれるだけあって、この泉質にはいろいろな効能がある。

そのため、湯治客としてたくさん来るのだろう。

まずは、体を洗い、今日一日の垢を落とす。

そして、綺麗に洗い落とすと、かけ湯をしてから、中に入る。

その姿は、まさしく堂に入っている。

さすがは、純日本人である。

…なにが、さすがなのかは、よく分からないが。

それは、いいとして、悠は、湯につかると、目を瞑る。

それだけで、今日一日の疲れが取れそうだった。

「よう、坊主、また入りに来たのか？」

しばらくの間、ぼんやりしていると、声をかけられた。

声の主は、壮年の男性だった。

今も現役なのだろう、全身の筋肉は全く衰えておらず、力にみなぎっている。

「ああ、今日一日の疲れを落とそうと思ってね」

悠は、その男に答える。

実は、この人は、悠の温泉仲間である。

悠の入浴方法を見て、温泉通の心意気を見たのがきっかけである。

まあ、悠はいつもどおりに入っただけだが。

「そうかそうか、若いのに大変だな」

その答えを聞いた男は、がははと笑いながら、隣に座る。

悠は、それに顔をしかめることなく、すんなりと受け入れる。

そして、二人はゆっくりのんびりと、温泉を楽しんだのだった。

温泉に入った後の悠は、宿に帰り、フェルナを引き連れて食堂へと向かう。

これもまた、いつもどおりの事。

悠は意外と食に関してはうるさい。

それこそ、自分で研究するほどまでである。

とは言え、全く成果は出て居ないが。

やはり、普通の物しかつukれない。

まあ、それはそれで、十分だと言えないでもないのだが、やはりうるさい悠には納得が行かない。

と言うわけなので、かなり食べ物屋の情報はかなり持っている。

そして、ここルツヴァイアでも同じ事で、隠れた名店を知っていた。

それこそ、地元の人しか知らない隠れ家的な存在だ。

そこを教えてくれたのが、銭湯で出会った温泉仲間の人だ。

風呂上がりに誘われたのだ。

そして、そこで一瞬にして虜となったのだ。

それ以降、悠はフェルナを連れ立って行く事になったのだ。

とは言え、流れ者でしかない二人を簡単には受け入れてはくれなかった。

やはり、そういった店は馴染み客の事に重きを置いている。

そのため、冒険者と言う流れ者は受け入れてはくれない。

いつ、どんな騒ぎが起こるか分からないからだ。

とは言え、もちろん、それもすぐになりを潜める。

以前の悠の仕事振りを聞いたからだ。

やはり、強さと言うものは、誰でも憧れを抱くものだ。

しかも、一応この店の馴染みであるあの男性に紹介されたのだから、あっさりと打ち解けた。

今では、大勢に囲まれて食べている。

まあ、フェルナの方は、とても居心地が悪そうにしていたが。

それでも、しばらくすると、慣れる事は出来た。

頼れる悠の姿があったからだ。

そして、食事を終えた二人は店を出ると、そのまま就寝となった。

第二十四話 始まりの魔女のもとへ

魔族との一件から一ヶ月ほど経った。

傷は完全に癒え、体調も万全だ。

そして、それはもう休養が必要ない事を意味する。

まだまだ、悠としては、訓練が足りないような気がしている。

けれど、そんな事を言っていてはいつまでも前へと進めない。

実戦経験でどうにかするしかない。

「一応、再確認ね。出発は明日の午前9時。かなり危険な旅になるから各自でしっかりと準備する事。フォルモーリスに入るのは西側のここから」

それはさておき、本格的に旅路が再開される。

キュアは、説明しながら、森の西側にあるポイントに指を刺す。

「ここからの進入経路が一番近いし、安全・・・らしいわ。正直言って、その言葉がどこまで信じられるのかは、分からないけど、闇雲に入るよりかはましね。」

キュアのいい分はもちろん、当然の事だ。

やはり、絶対的な情報が少ない。

前人未到の地なのだから。

「それと、中に入ってから隊列だけど、私が先頭に行くわ。この中でこういう経験が多いのは私だから、ある程度応用が出来るからね」

隊の先頭。

それは、かなり危険を伴う。

ちょっとした判断ミスで命取りになる。

そのため、熟練した者がいるなら、その人に任せるのが一番いい。

「それで、二番目がリエラね。白魔法に関してはかなり精通しているみたいだから、補助魔法で私の事をサポートして頂戴」

そして、二人目。

これもまた、キュアのいう通り補助的な役割が強くなる。

あくまでも先頭の人間の支援に徹する。

ならば、そういう側面の強い白魔法が得意なリエラに鉢がまわってくるのは当然の事だ。

「そして、隊の中央は悠ね。貴方なら、何かが起きてもすぐに対応できるだろうし」

さらに、中央は悠。一番、大事になるところだ。

中央は前方、または後方からの攻撃にすばやく対応しなければなら
ない。

そのため、かなりの運動能力が必要となる。

そして、悠はそれを満たしている。

『シルバーウィング』を考慮すれば、どちらも即座に対応できる。

それだけの運動能力を持っているのだ。

「四番目はその子ね。この子の場合悠の傍にいないといけないと
言うだけで、特に理由はないわ。で、最後はフェンリルさん。危険
察知の嗅覚と強力な運動能力で、後方の敵の察知と前方の敵への最
後の詰めの一手としてお願いします」

そして、これで最後。

隊列の説明が終わる。

フェルナに関しては、かなり辛らつなものとなっているが仕方ない
だろう。

やはり、彼女はまだ受け入れていない。

とはいえ、しっかりと隊列を考えてもらえている分進歩はしている
と考えてもいいだろう。

翌日早速四人と一匹はルツツヴァイアを出た。

悠は普段着の上に薄手の耐刃素材で出来た上着を羽織っている。

やはり、普通の服では心許ないからだろう。

フェルナも同じく、悠と色違いの物を羽織っている。

森の中に入ると、すぐに目印を作る。

方向を見失わないためである。

もちろん、ただの目印ではなく、キュアが特殊な形に編みこんだ魔力でした物のため、はっきりと感知できる。

攻撃力には特化しているが、補助的な物や、そういった複雑なものには、全くの初心者である悠ですら感じられるのだから、かなりの技術のものだ。

（キュアが居てくれて助かったかな）

悠は、思わず、そんなキュアを見て、そう思った。

確実に、当初のようにリエラと二人きりだったら、不可能だっただろう。

もちろん、途中で別れたように、フェルナとフェンリルとだけでも、結果は同じだ。

いや、そもそも、命が助かっていたかどうかあやしい。

とはいえ、それはいいとして、一行は歩を進める。

森の中は鬱蒼としており、陽の光はほとんど入ってこない。

そのため、薄暗く、おまけに、ねっとりとした、湿った風が弱く吹いている。

まさしく死の樹海だ。

こんなところに入って、無事に出られるわけがない。

まず、精神的に崩れてしまうだろう。

負の空気で満たされている。

こうして、一行が無事に動いているのは、キュアと言う優秀な先導者がいるからだ。

安心していられるから、精神的に、まいってしまうことがないのだ。

本当にこういうことには頼りになる女性である。

日が落ち、あたりが真っ暗になったところで、今日の行軍は休止となった。

さすがに、暗闇の中での行軍は命取りだ。

それに、切羽詰った状況ではない。

まだ、時間はある。

ならば、できるだけ、安全に行くのがいいだろう。

まあ、夜の行軍にキュアとフェンリル以外慣れていないと言うのもあるが。

それはさておき、テントを張ると、キャンプの準備を始める。

魔法で空気中にある水蒸気を使って、蒸留水を作り出し、鍋で暖める。

その中に、ルツヴァイアの食料品店で買ってきた固形スープの素と乾物を入れて一煮たちする。

これで、スープの出来上がりだ。

そして、それに、乾パンを添えたら今日の夕食となる。

かなり質素なものだが、この際は仕方がない。

現地調達の出来ない今、持って来た物でどうにかするしかない。

とはいえ、だからと言って持っていける物には限界がある。

と言うわけなので、こういった簡易的なものしか持ってくることは出来ない。

まあ、それでも、暖かい物が食べられるだけでもマシだが。

世の中にいる冒険者の中には、暖かい物ですら食べられない者だっているのだ。

むしろ幸運に思わなくてはいけない。

とはいえ、だからと言って、嬉々として食べられるような物でもないが。

味も素っ気もない、それこそ、完全に栄養食である。

味わって食べられるものではない。

悠、フェルナ、リエラの三人は顔をしかめながら食べて入る。

特に、自称美食家な分だけ、よりいっそう険しくなっている。

ほとんど、流し込むようにして食べている。

食べ終えた後は、さっさとテントに入って寝てしまう。

無駄な体力を使わないためだ。

キュアとリエラ、悠とフェルナに別れてテントに入る。

男女一緒と言うのは少々問題あるが、だからと言って、キュアやリエラと一緒にテントにするわけにも行かない。

何をされるか、または言われるか分かったものじゃないからだ。

ついでに言うと、フェンリルは外で寝ている。

どうも、テントの中で寝るのは落ち着かないらしい。

まあ、見た目が獣な分だけ、テントで寝るより、外で寝ているほうが、しっくりくるといえば、しっくりとくるが。

翌朝、日が昇ると、朝食の準備を始める。

その役目は悠だ。

女性陣は髪が長いため、寝癖が付いている。

それを直しているため、手が空いていない。

身だしなみは、女性のたしなみだ。

もちろん、フェルナにとっても、同じ事だ。

少々、すまなさそうな顔はしているが。

まあ、そんなところが、可愛い、可愛い、と言うのは、悠の談だ。

実際問題、客観的に見ても、フェルナは可愛い。

ご飯を食べている時なんかまさしく小動物系だ。

ロリコン趣味のある人なら、さらってしまいそうなほどだ。

以前、ルツヴァイアに居た時、さらわれそうになったけれど。

素直で優しく、人を疑うことを知らない心優しいフェルナである。

あっさりと、騙されてしまい、連れ去られそうになった。

悠がぎりぎりで間に合い、助け出さなければ、大変な事になって居ただろう。

もちろん、その後、しっかりと悠が報復しておいたが。

まず、一年以上はまともに動けないだろう。

体中の骨と言う骨を粉々に砕いたのだから。

普通なら死んでしまっているだろう。

そこを死なせないあたりがすごい。

いや、何がすごいのか良く分からないが。

その後、悠はしっかりと、そのことに付いてフェルナに注意した。

もちろん、知らない人には付いていけない、などの話である。

ネタ的には5、6歳ぐらいの子供にするような話したが、まあ、フェルナだから仕方ない。

やはり、常識のない分、しかたないだろう。

と、話しはズレてきたが、朝食の準備を終えると、女性陣の準備も終わっていた。

と言うわけなので、早速朝食を食べると、いったん軽く休憩を取ってから、行軍を再会した。

第二十五話 始まりの魔女と旅の終わり

森の中に入って数日経った。

一応、キュアとフェンリルが前後から簡単な結界を張っているため、あまり魔物に遭遇する事はなかった。

とは言え、それでも、やはり運悪く遭遇した場合もあり、その時は、難なく対処した。

まあ、闘ったのは、フェルナと悠だけであるが。

実戦に慣れさせるためなのだろう。

絶対的に経験の少ない二人に少しでも、それを与えるためだろう。

これから先は、何があるか分からない。

そんなときのために、できるだけ、戦力として使えるようにしておきたいのだろう。

やはり、今のままでは戦力とは言えない。

そのための、訓練であった。

けれど、どうも、それも、今日でおしまいの様だ。

目の前に、ついに、家が見えた。

それは、しっかりと当初の予定通りに動けていたと言うことである。

一群は森の中央を目指していた。

森の中央に始まりの魔女がいると言うことだからだ。

もちろん、これは、リエラの父親。

つまり、国王が言った事なので、ある程度信憑性はあった。

悠を鍵にしたのだ。

居場所を知っていてもおかしくはない。

そして、それを信じて突き進んだ結果、無事にたどり着いた。

とは言え、だからと言って、不用意に近づくわけにも行かない。

いくら、国王に言われたからと言って、向こうが友好的に向かい合ってくれるとは限らない。

相手は、始まりの魔女である。

どんな対応をしてくるのか全く予想がつかない。

行軍を崩すことなく、玄関まで歩み寄る。

そして、一度、全員で顔を見合わせた後、

コンコン

キュアが、ドアをノックした。

「開いていますから、どうぞ」

キュアの動作から寸分の間を置くことなく、声が帰ってきた。

その声は瑞々しく、年頃の娘のようだ。

全員が全員、心の中で首をかしげたが、それを払拭すると、中に入る。

いちいち疑問を持つ事自体、意味を成さないことに気が付いたのだろう。

それに、ここにいるのは始まりの魔女だ。

いくら見た目が、山小屋のようだったとしても、中は違うかもしれない。

使用人がいてもおかしくない。

中に入ると、すぐに目に付いたのは、少女の姿だった。

年の頃は、16、7歳ぐらいだろうか、亜麻色の髪と碧眼の白皙の美貌をした少女だ。

リエラの持つ刺々しいまでの強烈な美貌でもない。

かといって、キュアのように、凛々しくも凛とした冬場の空気によ

うな美貌でもない。

フェルナのような、まだ未成熟な幼さを残すあどけない物でもない。

その場を潤す、ある種水のような美しさ。

強烈に惹きつけるのではなく、包み込むような美しさだ。

「お待ちしていました。思ったよりも時間がかかったみたいですね。おまけに、予定外に大所帯のようすし」

白皙の少女は、訪問者に語りかける。

その言葉は、あたかも、琴線が奏でる旋律のようだった。

それを前にして、誰も何も言えない。

異常なのだ。

彼女のような存在がここにいるのが。

非現実的なのだ。

「さあ、いつまでも、この場にいるのも、なんですから、奥へどうぞ。焼きたてのクッキーとおいしい紅茶の用意もちようとしていますし」

それに気づいているのかどうかは定かではないが、その少女は事を進めていく。

あくまでも、淑やかに。

決して、刺々しくない。

一番初めに復活したのは、意外にも男である悠だった。

いや、もしかすると、見慣れているだけの事なのかもしれない。

それぞれのタイプの美貌の女性を知っている分、それほど、ダメー
ジが少なかったのだろう。

まあ、それ以前に、大して始まりの魔女についてのデータがないか
らだろう。

周りはその美貌に驚いてもいるが、それ以前に噂とのギャップにも
驚いているのだ。

かなりの歳を重ねた強力な魔力を持った魔女。

それが、こんな姿をしているとは、予想だにしていなかっただろう。

それに驚いているのだ。

けれど、悠が魔女に付いていく姿を見て、ようやく我を取り戻した。

魔女についていく、悠に付いていくようにして、歩を進める。

まあ、家自体はさほど大きくはないので、数歩歩けば、居間となる。

そこには、なぜか大きなテーブルと人数分びつたりのにすがあった。

大して大きくない部屋に五人分のいすが。

「どうぞおかけになってください。」

けれど、そんな事お構いなしに進める。

誰もが、出会ってからずっと全く口を挟めないでいる。

いや、冷然としている物もいる。

フェンリルだ。

神族に連なるフェンリル一族にいるのだから、もしかすると会った事が在るのかもしれない。

たとえば、あってなかったとしても、ある程度真実の姿を知っていたのかもしれない。

だから、なんともない様子でいられるのだろう。

そして、そうでいられないのが、悠たちなのだろう。

とはいえ、だからと言っていつまでもこんな状態でいるわけには行かない。

特に王族であり、将来は王国を背負わなくてはならないリエラにしてみれば当然のことだ。

席につき、いったん深呼吸をする。

そして、落ち着きを取り戻したところで

「これが、父から貴方への書状です」

話を切り出す。

そして、バッグの仲に入っていたものをわたす。

それは、確かに書状だった。

しかも、公式の物なのだろう。

ふんだんに装飾された、煌びやかなものだ。

たかが手紙に無駄な事だが、一国の公式の物となるとやはりそうならざるをえない。

やはり、その国の威信も在るわけだし。

魔女は、それをしばらく読むと、いったんいすから立ち上がると、部屋を出た。

数分部屋を空けた後に、戻ってきた。

そして、その手にはリエラが渡した物とは別の書状が握られていた。

「これが、返事です。お渡しください」

どうやら、返事の手紙らしい。

リエラは無言でそれを受け取ると、バッグの中にいれる。

これで、用事は終わりだ。

「それでは、私はこれで失礼します」

リエラはそう言うと、立ち上がる。

それにつられるようにして、キュアとフェルナが立ち上がる。

けれど、悠は立ち上がらない。

それを見て、キュアとフェルナはいぶかしげな顔をする。

けれど、悠はまだ帰れないのである。

そう、まだ悠の用は終わっていない。

もちろん、キュアとフェルナはそんな事は知らない。

それどころか、悠が異世界から来たと言う事自体知らない。

キュアにもフェルナにもまだ、言っていない事だ。

わざわざ言う事ではないと思ったからである。

「行きますよ、キュアさん」

そして、そんな中で唯一の事情を知っているリエラが先へと進める。

キュアを促すようにして、その場を後にする。

それを見て、さらに困惑するが、キュアはそれに付いていく。

そして、その場に残ったのは、悠とフェルナ、そしてフェンリルだった。

フェルナもフェルナで、困惑している。

けれど、いつまでも突っ立っているわけにもいかず、席に着く。

悠とフェルナは、魔女と向きあうように座っている。

そして、悠は魔女に話を切り出した。

「残念ながら、私は貴方を元の世界に戻す魔法は知らないわ。」

悠の話を聞いた魔女はそう答えた。

その顔は非常に申し分けなさそうだ。

悠と言えば、かなり落ち込んでいる。

唯一の手がかりである魔女ですら知らないと言った。

これで、自分の世界に戻る事はほとんど絶望的になった。

落ち込んでしまうのは仕方がない。

フェルナはそんな悠の姿を心配そうに見ている。

悠の言った真実に少々驚きを隠せないことは、事実だが、やはり悠の事を第一に考えているのだろう。

それに、納得も出来たのだろう。

人間なのに、自分に、魔族に憎悪を抱かない。

その姿を見て、理解できたのだろう。

だから、今は、悠の心配だけをしている。

「ありがとうございます」

しばらく、呆然としていたが、ようやく気を取り直すと、礼を言う。

一応質問に答えてくれた事に対するものだろう。

悠は、それを言い終えると立ち上がる。

これ以上、ここにいる理由がない。

「それじゃあ、俺もこれで失礼させてもらいます。」

悠は、その一言を付け加えると、魔女の下を去る。

その姿は後ろから見ても分かるぐらいしよげている。

フェルナもその姿を見て、痛々しく思えた。

悠は完全に孤独なのだ。

自分と同じ存在のいない世界。

全く自分の知らない世界。

そんな世界にただ一人いるのだ。

それを考えると胸が痛くなっていた。

「待ってください、私を置いていかないでくださいよ」

フェルナは、立ち上がると、悠を追いかける。

自分が一人になりたくない。

それもある。

だけど、それ以上に、今の悠を一人にはしたくない。

そんな想いだった。

玄関のドアに手をかけ、悠は外に出る。

相変わらずフォルモーリストは鬱蒼としている。

そして、悠に付いて行くようにフェルナが出てくる。

その傍らにはフェンリルの姿もある。

キュアがないのが心許ないが、それも仕方がない。

諦めてこのメンバーで行くしかない。

フェンリルに頼りつきりになる可能性が高いが、それも弱さのせいだ。

どうすることもできない。

まずは、実力をつけるしかない。

悠たちは足を踏み出し、歩を進めた。

「ちょっと待って」

いや、そうしようとしたところで、呼び止められた。

魔女だ。

気配もたてず、いつの間にか悠たちの傍にいた。

「貴方これからどこへ行くつもりなの？」

そして、横に立つとそう尋ねる。

今の悠には手がかりも何もない。

よって、行くあてはない。

それを分かっているの事なのだろう。

悠は一瞬眉をひそめ、唸ったが

「一回王都に戻って文献でも漁ってみますよ」

一番すんなりとした答えを返した。

まあ、それ以外方法がないと言えはないのだ。

もう一度国王に会えば、また情報をくれるかもしれないが、無事に会えるかどうか分からない。

相手は国王だ。

多忙を極めているに違いない。

まともに会えるまでいったいどれだけの時間がかかるか分からない。

その間を無駄にするのは控えたい。

それに第一、悠は国王に頼りたくなかった。

あの国王の内心が全く読めない。

何を考えて、何を思って、行動しているのが全く予測つかない。

そんな人間を相手にしたくなかった。

手のひらで遊ばれるのは勘弁したかった。

だからこそ、近づきたくなかった。

「なら、ここにいればいいわ」

悠の言葉を聞いた魔女はそういった。

「言っておくけど、この国どころか、この世界どこを探しても、貴方が求める魔法は存在しないわ。そんな魔法が必要ないからよ。必要とされない魔法が生み出されるわけがないわ」

そして、そう付け加えた。

けれど、その言葉を聞いて、悠は顔色を変えた。

更なる深い絶望を顔に浮かべて。

「魔法自体必要だから生み出されたの。攻撃魔法は自分に襲い掛かる敵を倒すため。防御魔法は敵の攻撃を防ぎ、自分を守るため。回復魔法は自分の怪我や病気を治すため。それぞれ必要だから、生み出されてきたの。なら、貴方の求める魔法はどう？果たして、必要とされるのかしら？答えは否ね。残念ながら、必要とはならない。だから、生み出されるわけがないの」

それを目の当たりにしても、魔女はつらつらと言葉を連ねた。

その言葉を受けて、悠の表情に影がさした。

そんな悠の姿を見て、フェルナは魔女の事を憎々しく思った。

何もそこまで言わなくてもいいと思った。

傷口に塩をすり込むのと同じような行為だ。

けれど、魔女はそんなフェルナの視線を受け流す。

「だから、自分で作ると言うのはどうかしら？自分で自分の世界に帰る魔法を」

そして、最後にそう付け加えた。

その瞬間に悠は魔女の言わんとしたことに気が付いた。

つまり、彼女に師事しろと言う事なのだろう。

彼女は、この世界中で誰よりも魔法の知識を持っている。

既に廃れてしまった魔法の知識だって持っている。

そんな彼女に師事すれば、もしかすると、そうもしかすると、自分の手で生み出せるかもしれないのだ。

悠は、振り返り魔女の方へと向き直すと

「お願いします」

頭を下げて、そう答えた。

すでに手段はそれ以外にない。

第二十六話 悠とフェルナの日常

「ぎゃああああ!!」

鬱屈とした森の中に絶叫がこだました。

かなり切羽詰っているその必死さがこちらにまで伝わってくる。

その声の主とは、悠である。

そう、今の悠はその叫び声にふさわしく、かなり切羽詰った状況にある。

ただいまの悠の状況は……

数十匹の魔物に追い掛け回されている。

魔女の特訓のためだ。

かなり高等に位置する魔術を使うためには多くの魔力が必要となる。

そのためには、魔力の絶対量を上げる必要がある。

キュアが悠にしていた事と同じだ。

とは言え、そのレベルは全く段違いになったが。

キュアの修行はまだ優しかった。

けれど、魔女のレベルはかなり酷だ。

魔力の高さはある程度体力にも関係する。

魔力の総量を決定させるには精神力がある程度関連してくるからだ。

そして、その精神力をあげるためには、やはり体力も必要になってくる。

良く言うように健全な精神は健全な肉体に宿る。

そのため、悠は今は、肉体的なレベルアップを図っていると言うわけだ。

そして、その方法と言うのが……

耐久マラソンだ。

延々と魔女の家から森の出口、悠たちが入ってきたところを往復する。

その間全力疾走だ。

もう無茶を通り越して、虐待と言っている程のものだ。

しかも、その間魔法は使ってはいけない。

体力のみを使っの行動となる。

おかげで、今のように魔物に追いかけまわされるような羽目になる

のである。

「はあはあ」

なんとか無事に帰ってきた悠は、床に倒れこんだ。

体力を限界まで使い切ったせいだろう。

一応悠は迷わないように地図とフォルモーリスト専用のコンパスを持っている。

けれど、それでも、やはり距離の短縮ができるわけでもない。

せいぜいできるのは時間の短縮だ。

とはいえ、それでも、やはり最初の内は、片道で二日はかかった。

さらに往復しようとする五日もかかってしまった。

行きで体力の大半を使いきってしまったせいだ。

まあ、とは言え、無理をしたからこそ、五日ですんだわけでもあるが。

とは言え、修行なのだから、無理をしないわけには行かないけれど。

それに、今はどうにか慣れ始めたのか、時間は半分ほど、つまり二日ちよつとで帰ってこれるようになってきている。

それを考えると、かなりの成長ぶりだ。

「大丈夫ですか？」

そんな悠に、フェルナはタオルと水の入ったコップを渡す。

「大丈夫、ありがとう」

悠はそれを受け取ると、汗を拭い、コップの水を飲み干す。

その表情は幾分、まだ余裕があるように見える。

どうやら、慣れてきたのだろう。

先ほども言ったが、脅威の成長振りだ。

通常では考えられないほどの。

元々細い体だったが、それがさらに絞られているように思える。

体中に滑らかで、全く無駄のない筋肉をまとっている。

格闘家のように、重く邪魔になりやすい筋肉ではない。

本当の実践。

ファールのない生きるか死ぬかの戦いに適した体になっている。

耐久マラソンを終えた悠はそのまますぐに体を休める。

一応湯浴みをしてからだ。

さすがに、体を汚したままにいるわけにはいかない。

そして、その翌日は、ゆっくりと体を休めると言う意味で、魔女に魔術の講義を受ける。

限界を超えなくてはいけないが、だからと言って無理をしすぎて体を壊すわけにも行かない。

それに、たとえどんなに最大魔力が増加したとしても、知識がなければ、いざ作となるととき困ってしまう。

同時進行するしかない。

とはいえ、さすがにあれだけの運動量なのだ。

一日で回復するようなものでもない。

気功で無理矢理自己治癒能力を活性化させている。

実際、それこそかなり体に負担をかける事になるが、それもここ最近では慣れてきたように見える。

それは、やはりフェンリルの教え方が上手いからなのだろう。

さすがに、いくら始まりの魔女と言えど、気功の方は、知識程度しかなかった。

いざ、教えるとなると、やはり不備が出てくる。

それならば、やはり気功に詳しいフェンリルが教えたほうがずっと効率的だ。

だから、相変わらず気功はフェンリルに師事している。

そのおかげか、既に気功に関してはある程度の物を収めている。

しっかりと使いこなせるようになってきている。

そのため、こんなむちゃくちゃな事も出来るのだ。

日もくれ、夜の帳が森を満たすと講義は終わる。

そして、夕飯となる。

もちろん、その当番は悠とフェルナだ。

居候である二人が当然しなくてはならない仕事だ。

手馴れたようにフェルナが調理して行く。

悠はそれの補助をするだけ。

最初こそいろいろと失敗していたが、フェルナは器用にもすぐに覚えてた。

おかげで、魔女家の食卓はいつもおいしい物が並ぶ。

自称美食家の悠を唸らせるほどの物が。

第二十七話 新たなる旅立ち

悠が始まりの魔女に師事を受けてから二月経った。

その間の内容は非常に過酷なものだったが、なんとかそれに耐えた。

最大魔力も増加し、魔法のレパートリーだって増えた。

特に結界や回復、補助系を強化した。

これによって、かなりバランスの取れたものとなった。

今、悠は、久々に一日休みをもらった。

とはいえ、少々そわそわしている。

二ヶ月間、しごきにしごかれた分、逆にこうしているほうが、落ち着かないのかもしれない。

今も、愛用の大剣の手入れをしている。

とは言え、別にさほど痛んで入るわけでもないで、それもすぐに終わる。

その瞬間、もう手持ち無沙汰になっている。

諦めて、ため息をつくど、その場に寝転がる。

モンスターがうじゃうじゃいる森で、無防備に寝るのは、御法度だ。

特に、ここでは、下手したら命取りになる。

とは言え、悠ももう慣れてしまったのだろう。

すやすやと眠っている。

ぼろぼろになりながらした鬼ごっこのおかげだろう。

そのおかげで、気配とかそういうものに敏感になったのだろう。

まあ、このまま戻ってしまえば、はっきり言って不必要な物だが。

それを言えば、愛用の大剣も魔法も不必要だが。

そんな物に頼らなくても、十分生活していける。

それに、それ以上にやはり異質な物だ。

それを世界が受け入れてくれるわけがない。

下手したら、研究対象にされて、研究所行きになりかねない。

実際問題知らないものなのだ。

まあ、それでも、覚えなくてはならないものだが。

そんな事は悠だって百も承知だろう。

そして、悠の休みの日は穏やかに終わりを告げた。

翌日、たっぷりと寝た悠は、魔女に呼び出された。

どうやら、何か話があるらしい。

悠は、部屋に置いてある洗面器に水をためると、それを使って寝癖を直す。

その後、一応、新しく出した水を使って口をゆすぐ。

一応、朝起きたらする大事なマナーだ。

部屋から出ると、すぐにフェルナの姿が見えた。

彼女は、いそいそと何かを準備している。

お茶菓子だ。

お盆に載せたそれを、魔女の方へと持って言っている。

と言う事は、お茶菓子を出しているからには、おそらく来客中なのだろう。

悠は、小首を傾げながら、魔女の元に向かう。

大して大きくない家だ。

すぐに、着く。

始めて悠がここに来た時に来た部屋だ。

そこには、すでに魔女と客がそろっていた。

一人は金髪。

もう一人は黒髪。

どこかで、見たような顔振りならぬ頭ぶりである。

悠は、あいている席に座ると、客の顔を見る。

二人とも種類は違えど、絶世の美女だった。

けれど、それ以上に驚いたのは、見知った顔だからだ。

まあ、この世界に来て日の浅い悠だ。

知り合いの数は知れている。

しかも、金髪と黒髪の二人となると、決まってくる。

キュアとリエラの二人だ。

とはいえ、悠にとっては、微妙な顔どころだ。

未だに、フェルナの事で尾を引いているようだ。

まあ、ほとんど妹のように思っている少女の事を、あれだけぞんざいに扱われては、そうなくても仕方ないだろう。

それ以上に、悠がリエラの事を嫌っていると言う事もあるが。

まあ、向こうも嫌っている分どっちもどっちと言えなくもないが。

「悠、これから、この二人に付いて行って、魔王討伐に行っちゃおうだい」

悠が席に着くと同時に魔女は口を開くとそういった。

けれど、それを聞いた悠にして見れば、かなりの衝撃の言葉だった。

というか、そもそも魔王と言う単語が衝撃でもあった。

そんな存在がいるとは思わなかったからだ。

と言うか、自分がそんな物と闘うとは思わなかった。

これでは、まさしく、ゲームの展開だ。

異世界に飛ばされ、いろいろあった後、お姫様と魔法使いとパーティを組んで魔王討伐へ。

使い古された展開だ。

そんな展開に、自分自身が落とされるとは思ってもみなかったのだろう。

「一応言っておくけど、これは貴方の最後の修行でもあるんだからね？ やっぱり最後は実践ね。実践に勝る経験はないわ」

それを聞いて、少々眉間にしわを寄せて、困惑している悠に、止めを刺す。

そういわれてしまっでは、どうしようもない。

一応、魔女は悠の師匠だ。

修行となると、拒否するわけにもいかない。

諦めて、行くしかないのである。

「わかりました。行きますよ」

悠は、ため息をつきながらそう答える。

やはり、あまり気が進まないのだろう。

悠にしてみれば、ここで静かに暮らしていたかったのだろう。

まあ、魔王討伐なんて言ういかかわしき満点な物に、誰も行きたがらないと思うが。

悠は、一度、目を瞑る。

心を決めるためだ。

そして、心内で気を引き締めると

「よろしく頼む、二人とも」

キュアとりエラにそういった。

悠は、部屋に戻ると荷づくりをする。

とはいえ、元々、大して荷物は持っていないので、準備はすぐで
きる。

それを終えると、二人の下へと向かう。

居間にいる二人は、のんびりと紅茶を飲んでいたが、悠の姿を確認
すると立ち上がる。

どうやら、さっさと行くつもりなのだろう。

「では、行ってきます」

悠は、魔女の方を向くとそういう。

「ええ、頑張ってきてね」

それに、彼女は答える。

けれど、その表情はどこか暗い。

悠の事を心配してなのかも知れない。

二人は同じ家で生活して行く内に打ち解けていった。

特に悠は、魔族であるフェルナを、受け入れてくれる事を素直に喜
んだ。

彼女には、差別的な目で見る様子は全くなかった。

自分と変わらず接してくれた。

それがとても嬉しかった。

だからこそ、素直に悠は魔女の事を受け入れられた。

そして、そんな二人だからこそ、別れが惜しいのかもしれない。

「ちゃちゃっと倒してきて、ちゃちゃっと帰ってくるよ。俺にはやらなきゃいけないことがあるしね」

その暗い表情に悠も気づいたのだろう。

おどけたように、そういうと魔女の肩を叩く。

まるで、別れを惜しむ恋人のようだ。

まあ、そんな関係ではないのだけれど、そう思わせてしまうものがある。

「そうね」

そんな言葉を聞いた魔女はまだ少々暗い顔をしながらも、笑みを浮かべて見せると、

「まあ、何と言っても私がしごいたんだから、大丈夫よね」

そつと吐くようにそう言うと、立ち上がり、一度この場を離れる。

そして、数分した後に戻ってきた。

けれど、その手には、行くときには持っていなかった物がある。

「はい、これ。私からの手向けよ」

「これって、簞手？」

そう簞手だった。

魔石や金や銀で装飾されたかなりの業物と分かるそれだった。

悠は、それを手に取ると、じっくりと見る。

見れば見るほど、その装飾の美しさに見惚れてしまいそうになる。

「それを貴方にあげるわ。念には念を、てね」

そんな悠を見ながら、魔女はそう続ける。

「え、ちょっと待てよ!?! 知らないよ!?!」

けれど、それを聞いて驚いたのは悠だ。

簞手を着き返そうとする。

こんな恐ろしく、高そうな物をおいそれともらえない。

下手すれば、一生遊んで暮らせそうなほどの価値がありそうなものなのだ。

「いいえ、もらって欲しいの。貴方は私の友達だもの。それはきっと貴方を助けてくれるわ」

けれど、それを魔女はやんわりと断ると、そのまま悠に押し返す。

悠は、それに対して反論できなかった。

魔女の想いが嬉しかったから。

自分の事を思ってくれている事が。

「んじゃ、分かった。これは、借りて置くよ。そして、必ず返しに来るね」

とはいえ、だからと言って素直にもらうわけにも行かない。

だから、そうした。

もらうのではなく借りる。

そして、借りたからには返さなくてはいけない。

それは悠が絶対に生きて帰る。

言外にそういつているのだ。

魔女は一瞬驚いたような顔をした。

けれど、それをすぐに奥にしまいこむと

「ええ、待ってるわ」

悠の言葉に頷くと、笑みを浮かべる。

とてもとても、柔らかい笑みだ。

「んじゃ、行ってくるね」

それに対して、悠もまた柔らかいそれで返した。

魔女との、一時の別れを、済ませると、二人の後を付いて行くように外へと出る。

相も変わらず、森の中はどんよりとしている。

けれど、それはこの際どうでもいい。

悠は、ため息をつくと、

「フェルナ。君は来ちゃ駄目だ」

目の前にいる少女に向かってそういう。

目の前にいる少女、フェルナは悠と同じく旅姿だった。

おそらく、悠が部屋で支度をして、魔女と話しこんでいるうちに済ませたのだろう。

悠についていくために。

「リリスと一緒に留守番していてくれないか？」

けれど、悠にはそれを受け入れるわけには行かない。

これから先は、かなり危険だ。

そんな所にフェルナを連れて行くわけには行かない。

一応、補足として言って置くが、リリスとは魔女の事だ。

いくら魔女といえ、名前ぐらいはあるようだった。

それは、いいとして、悠は、いい諭すようにフェルナにそういう。

「ううん。私も行きます」

けれど、それにフェルナも頷いたりはしない。

頑固に首を振る。

「私だって、戦えます。そのために、リリスさんにいろいろと教えてもらったんです」

フェルナもまた、悠と同じく、魔女——リリスに師事していた。

守れるだけの力が欲しかったから。

いつまでも、悠に守ってもらってばかりでいないでいるために。

「それでも、駄目だ」

だけど、だからと言って、頷けるわけがない。

たとえ力を手に入れたとしても、変えられない。

これから戦う相手は魔族。

つまり、同族なのだ。

それを殺せとはさすがにいけない。

もちろん、フェルナも悠の気持ちも分かっている。

分かっているけど、それを頷きたくない。

それに……

「お願いします。行かせてください。私の居場所はこちらじゃないんです。悠さんの傍なんです」

フェルナにとって悠は家族だ。

仲間なのだ。

だから、共に戦いたいのだ。

たとえば、それが危険な事だとしても。

「分かったよ」

諦めたようにそっと呟く。

フェルナの意思は固く変えられそうにもない。

認めてやるしかないと思ったのだろう。

「ちょっと、どういうつもり？」

そのやり取りを聞いて、キュアが眉をひそめた。

相変わらず、フェルナの事を嫌っているようだ。

まあ、魔族自体を嫌っているというのが正しいが。

「うん？フェルナも一緒に連れて行くんだよ。言っておくけど、足手まといにはまずならないと思う。確実に俺よりも強いしな」

けれど、そんな様子のキュアに対して悠はあっけらかんと答える。

しかし、キュアにしてみれば、驚きだ。

特に、悠よりも強いと言うことが。

実は、キュアたちは、悠が来る前に、現在の悠の實力をリリスから聞いておいた。

現在の悠のレベルは、キュアと同レベル。

さすがに、経験においては、劣るけれど、それでも十分戦力として考えられる。

もちろん、そこまでレベルを上げられたのも、リリスの地獄の特訓の賜物ではあるが。

しかし、そんな悠以上の力を、フェルナが持っているとは、思えなかったのだ。

この目の前にいる少女が自分よりも上だとは思いたくなかったのだ。

「まあ、元々キャパシティはでかかったわけだし、そこにリリスの特訓がつけば当然の事だな。なあ、フェルナ？」

けれど、そんな事を考えているキュアなどお構いなしに続ける。

素直に、フェルナの成長を喜んでいるのだろう。

「えっと、がんばりましたから。足を引っ張る事はないと思います」

そして、フェルナはそれにうなづくようにして、答える。

もう今までの自分とは違う。

守ってばかりの自分とは違う。

これからは、もう自分で道を選ぶ。

悠と同じように。

フェルナの胸にはそう刻み込まれているのだ。

「分かったわ。人材はいくらでもあったほうがいいものね。たとえば、それが魔族だったとしても」

そして、そのゆるぎない決心は、キュアには、どうすることもできなかった。

もう、フェルナを押しつけるだけの材料は何一つとしてないのだから。

第二十八話 思い出される修行の日々（前書き）

しばらくの間は、かなり短い話が続きます。

第二十八話 思い出される修行の日々

「そういえばさ、悠。魔女に特訓してもらったらしいけど、どんな事したの？」

それは、何気ない疑問だった。

四人の旅路が始まってから、しばらく立った。

最初のうちは、少々ぎすぎすしたものもあったが、今はなりを潜めている。

キュアとリエラの二人も、少なからず、フェルナの事を受け入れ始めたからだ。

まあ、さすがに全幅の信頼を置いているわけではないが、それでも仲間としては認められているには違いない。

ちなみに、フェンリルは、今は、神界に帰っているためいない。

さすがに、長い間、あけすぎたようで、仕事がたまっているらしい。

その別れの際、フェルナは、泣いていたが。

それは、さておき、キュアの疑問だ。

一応、ここまでの旅路で、少なからず戦闘があった。

その際に、悠とフェルナの動きをチェックしていたのだが、確実に

二人の能力は、以前と比べ物にならないものとなっていた。

だから、どれほどまでの、特訓をしたら、そこまでいけるのか、疑問に思ったのだろう。

だが、その問いは二人にとっては、触れてはならない場所だった。

キュアの問いかけを耳にしたとたん、身体を震え上がらせ、その場にしゃがみこむ。

形容するならば、がたがたと言った感じだ。

もう、その特訓がどれだけの物かが、その行動で手に取るように分かる。

悠は、地獄の特訓だったと言った。

それは、掛け値なしの真実だったのだろう。

今にも、泣き出しそうな顔をしている。

いや、フェルナなんか、すでにうつすらと目じりに涙を浮かべている。

「え、えっと、ま、まあ、それはいいとして、次の街はまだかしらねえ」

その姿を見た、キュアは、脂汗をかきながら、話をすりかえることしかできなかった。

第二十九話 一行のある一日

今のところ、四人は、名目上修行の旅になっている。

本来なら、さっさと魔界に突入して、魔王を蹴散らしてくれればいいのだが、物には順序があるらしい。

まあ、いくら、成長したとはいえ、まだまだ魔王と戦えるレベルではないというのが、最たる理由だが。

それを聞いた、悠は、さらにげんなりすることになったが。

どこまでも、ゲームくさくて、いやだったのだろう。

そういうわけで、旅に出るとすぐに、冒険者ライセンスを取った。

もちろん、全員が同レベル。

本来ならば、ポイント制で、仕事をこなしていく事でレベルがあがっていくのだが、特例として、そうなったのだ。

首謀者はリエラの父親、国王である。

全員同じならば、動きやすいからだろう。

もちろん、それだけの技量を持っているからこそでもあるのだが。

そして、今四人は、仕事中だった。

仕事内容は、森の中にいる魔獣の掃討だ。

本当なら、もっと上のランクでもいいのだが、仕事自体なかったのだから仕方ない。

小遣い稼ぎも必要だ。

もちろん、ある程度送られてきてはいるのだが、できるだけ、手をつけたくなかった。

金に関してはいくらでも、持っていて損はしない。

「ぎゃああああ!!」

たとえば、苦労しようとも。

ちなみに、今の叫び声は、悠のものだ。

魔獣の掃討に来たのだが、リエラの嫌がらせによって、魔獣の群れの中心に吹き飛ばされたのだ。

仲間としてしっかり成立したかと思えば、どうやらまだまだ道のりは険しいらしい。

まあ、悠が悠で、リエラがリエラである限り、変わりそうもないが。

「てめえ、後で覚えてろよお!!」

そして、悠の怒鳴り声が森中に広がったのだった。

第三十話 鈍き男悠

四人は、その日一日の仕事を終えると、宿に帰ってきた。

その四人の中で一人だけぼろぼろの姿の人間がいるが、もちろん、悠だ。

相変わらず、リエラに目の敵にされて、小突き回されているのだ。

もちろん、実力的は、どちらかと言うと、悠の方が上だ。

王家の物として英才教育を受けたリエラだが、やはり地獄を見た分だけ悠の方が、勝ってしまう。

とはいえ、所詮は悠は男でリエラは女だ。

古来より喧嘩と言うものは女性に軍配が上がるものなのだ。

男である悠が勝てるわけがないのだ。

それはさておき、ぼろぼろ姿の悠は、フェルナを伴って、部屋に戻った。

基本的に部屋割りには、悠とフェルナ、リエラとキュアになっている。一番気兼ねしなくていい部屋割りを考えたらこうなるのだ。

まあ、年頃の男女が同じ部屋と言うのは少々問題があるかもしれないが、所詮は悠とフェルナだ。

どうなりようもない。

相変わらず部屋ではいい兄妹をしている。

部屋に戻った二人は、荷物を置く。

そして、フェルナは、下の食堂へと降り、悠はシャワーを浴びる。

さすがに、いつまでも、汚いままではいたくないのだろう。

それが分かっているから、フェルナも食堂へと降りるのだ。

さすがに、いくらなんでも、異性がシャワーを浴びていられると落ち着かないのだろう。

まあ、悠が基本的に、無頓着なせいでもあるが。

一度、上半身素っ裸で出てきた事だってあるのだ。

しかも、リリースのしごきで、かなり引き締まった身体をしている。

無駄に筋肉質ではなく、あくまでもしなやかな身体にしっかりと筋肉がついているのだ。

均整が取れていて、綺麗な身体をしているのだ。

それこそ、大人の女性ならば、素直に見惚れてしまうほどの物なのだ。

とはいえ、さすがに年頃の少女には、少々刺激が強い。

赤面したフェルナは、そそくさと逃げ出してしまったのだ。

もちろん、かなりそういうことには鈍い悠は、逃げ出したフェルナに対して

「ねえ、何で急いで出て行ったんだ？」

なんて、間の抜けた事を聞いていたが。

シャワーを浴びて、さっぱりとした、悠は、食堂へと降りた。

まだ乾ききっていないため、少々髪が湿っているが、それよりもっと重要なことがある。

のどの渇きだ。

熱めのシャワーを浴びたせいで、身体が火照ってしまったのだろう。

まあ、自分で水を作ってしまったえば、それまでなのかもしれないが、それではさすがに味気ない。

やはり、仕事あがりに、ぐいっと何かを飲みたいのだろう。

さすがに、酒を飲もうとは思わないとしても。

一応、悠も未成年なのだ。

そうそう飲むわけにはいかない。

それこそ、以前の自棄酒はあくまでも特例みたいなものなのだ。

それはさておき、食堂に降りると、フェルナの姿が見えた。

おいしそうにフルーツジュースを飲んでいる。

悠は、その隣に腰掛けると、従業員にフェルナと同じ物を頼む。

あまりにもおいしそうに飲むから、欲しくなったのだろう。

そういうところは、年相応の子供だ。

頼まれたものが来ると、早速口に含む。

甘酸っぱい果汁が口内に広がる。

確かにうまい。

悠は、一口飲んでそう思った。

王都どころか、地方都市からもやや離れた片田舎の街だ。

味の方はほとんど期待できないものだと思っていたが、どうやらそれは違ったらしい。

悠は、素直に感嘆した。

残りを一気に飲み干すと、おかわりを頼む。

そのついでにフルーツも頼んだ。

フルーツジュースがここまでおいしいのだ。

その元となるフルーツだって、それなりの物に違いない。

そう思ってたのだ。

そして、それはまさしく正解だった。

出されたフルーツはどれも新鮮でジューシーだった。

全く嫌味のない甘みをしていた。

「ほら、フェルナも食べてごらん？」

その幸せをフェルナにも感じてもらいたかったのだろう。

フルーツを刺したフォークをフェルナに口元に運ぶ。

なんだか、その光景はどこぞのカップルのようにも見えないでもない。

フェルナもそれが感じられたのだろう。

一瞬恥ずかしげに逡巡したが、邪気のない悠の笑顔を見たら、拒否することもできず、素直に食べたのだった。

第三十一話 リエラの変化

夜の帳を迎えた頃。

悠は市に出かけた。

近くで市が開かれると聞いたからだ。

さすがに暇をもてあましてしまったのだろう。

大してする事がないのだからしかたがない。

市につくと、悠は、まず出店で食べ物を買う。

一人分ではなく二人分。

そう、一人ではなく二人できたのだ。

そして、その隣にいるのは、珍しくリエラだった。

普通なら、この場合はフェルナだろう。

そうでなかったとしても、キュアぐらいまでだ。

だというのに、今日は珍しく隣にはリエラがいる。

それこそ、明日は雨や雪どころか、天が落ちてきてしまいそうなほどありえない状況だ。

とはいえ、それなりに理由もある。

まあ、単に、たまたまりエラも悠と行動が重なっただけのことだ。だから、二人で来ているわけであって、それ以上でもそれ以下でもない。

「ありがとう」

やや不貞腐れながらも、リエラは悠が渡した物を素直に受け取ると口に運ぶ。

その姿は、王女にはどうも見えない。

ここまでの旅路で、庶民臭さが移ったのかもしれない。

それは、王族としては致命的なのかもしれない。

けれど、悠やその他の仲間にとっては好ましいことだった。

やはり、距離を感じてしまうからだろう。

悠もキュアもフェルナも全員言ってしまうえば庶民だ。

だから、そういうものには、肌に合わない。

虚構に彩られたような世界観を持ち出されたくはないのだ。

あるがまま、感情は素直に出し合いたかったのだ。

「ほら、行くわよ」

そして、今のリエラはそれができる。

ほとんど普通の人と変わらず。

「分かったよ」

だからこそ、悠も素直にリエラを見る事ができるようになったのだ。

市の中央近くに行くと、見世物小屋があった。

演目を見て見れば、曲芸となっている。

「へえ、おもしろそう。なあ、入ってみないか？」

それに、興味を覚えた、悠はリエラを早速誘う。

その姿には、以前のような攻撃的な様子はない。

もう、悠には、完全にわだかまりはないのだろう。

まあ、悠にとっての判断基準がフェルナなのだ。

そうなるのも自然なことなのかもしれない。

「私は、そんなもの興味ないから、貴方一人で見てきなさい」

とはいえ、だからと言って、リエラの方もそういうふうに行くわけでもなかった。

相変わらず、悠に対しては冷たい。

こうして、一緒に歩いているが、ただ、それだけのようだ。

実際、ここに来るまでも、会話が弾む事はなかった。

もちろん、意識的にリエラが会話をとめているからだ。

ただ、それでも、悠は、続けようとはしていたが。

そういう意味では、健気な奴なのかもしれない。

まあ、男に対して使う言葉ではないが。

「まあ、いいじゃん。旅が始まってから、全然楽しそうにしてなかったじゃん？　ここで、大笑いでもしてみたら？」

それは、さておき、悠は、リエラの言葉を聞いても、くじけず、無理やり腕をつかむ中に入る。

確かに、旅が始まってから、楽しい事はほとんどなかった。

元々が、魔王討伐の旅なのだから、当然と言えば当然だが、だからと言って、堅苦しいのは滅入るだけだ。

ある程度、心にゆとりをもてないと辛い。

そのためにも、悠は笑うことが必要だと思った。

それなら、曲芸はちょうどいい。

悠にとっての曲芸は、サーカスと同じだ。

なら、きっと笑いも含まれている。

そう思っていた。

けれど、中に入って、それが間違いだということに気がついた。

見世物としての曲芸は、サーカスとは違っていた。

けれど、それでも、楽しむには十分だった。

曲芸の中身は、あくまでも技だけだった。

もちろん、その技の一つ一つは、ほとんど神業と言っているほどの物。

悠はそれを見て大はしゃぎだった。

隣でしぶしぶ見ていたリエラも、自然と食い入るように見ていた。

そして、最後には素直に感嘆していた。

まあ、さすがに、悠みたいになはしゃぎではなかったが。

それでも、二人は素直に楽しめたようだ。

普段は、さめた表情しかないリエラも、今だけは頬を上気させて

いる。

それを見ていると、年相応の女性にしか見えない。

そして、その姿こそ、似合っているようにも思える。

肩肘を張った王族らしい姿はリエラには、似合わない。

別に庶民臭いわけではない。

ただ、冷徹無比で唯我独尊的な、存在にはなりきれない。

そう思わせる何かがりエラにはある。

そして、悠もそれを感じ取っていた。

こういった人の雰囲気などを悠は読むのがうまい。

だからこそ、こうして、曲芸を見せたのかもしれない。

自分の本当の姿にあった少女の姿にさせてみたかったから。

そして、見世物小屋から出てきた二人は、今は中央のベンチで休んでいる。

お互いの手元には飲み物がしっかりと握られている。

だけど、それ以上に重要なのは、二人の雰囲気だった。

今までのような、冷たい針の筵のようなものでは、なくなっている。

心許しあった友の間に流れるそれのようだった。

それは、曲芸を見たからなのかもしれない。

心に壁を作る余裕がなくなるほど、自分の素を出されたのかもしれない。

本当のところは、わからない。

けれど、今の二人の雰囲気は、暖かいものであることには違いない。

だからこそ、悠は、この雰囲気だからこそ、悠は切り出した。

「すまないな、邪魔して」

それは謝罪の言葉だった。

隣に座って、ぼんやりとしていたりエラは、唐突なその言葉を聞いて、首をかしげた。

何について誤りたいのかが、全く分からないからだ。

もちろん、悠にだって、それぐらい分かっている。

「本当は、俺じゃなくて、ゼイオンさんに行く予定だったんだろう、旅」

だからこそ、続ける。

けれど、その言葉を聞いたリエラの表情は一変した。

顔一杯に驚愕で満たされている。

「なのに、俺が、こっちに來てしまったせいで、その相手が俺になつてしまった。ホント、邪魔して悪かったな」

だが、悠はそれをあえて無視するようにして、続ける。

「ゼイオンさんの事が好きなんだろう？」

そして、最後に、一言。

その言葉をつぶやいた。

もう、それでリエラは何もできなかった。

それが確信をつくものだったから。

そう、リエラは、悠の言う通りゼイオンの事が好きだった。

ゼイオン・キラ・ジークフィールド。

王国の近衛騎士団の団長にして、国王の右腕、そして、リエラの護衛でもあった。

生まれ素性は謎。

リエラが生まれたときから、国王の右腕としてその辣腕をふるってきた。

その采配は目を見張るもので、百戦錬磨の騎士だった。

気性は穏やかで、知性的なもの。

顔も中性的で、見る者の心を自然と穏やかにさせる。

そして、そんなゼイオンにリエラは恋をしていた。

もちろん、所詮はリエラも王族。

いくら、国王の右腕とは言え、自分とどうこうなるとは思っていない。

おそらく、適当な国の王子と結婚する事は分かっている。

それでも、思わずにいられなかった。

そして、思わずしかいられないから、一緒にいられる時間がとても愛しかった。

だからこそ、それを潰した悠を憎んだのだ。

自分にとっての唯一の時間を。

何があっても、大切にしかかった時間を壊されたから。

敏感な悠もそれに気づいたのだ。

悠も王宮にいるところに一度だけゼイオンに会った。

そして、そこでゼイオンを見ているリエラの目を。

だからこそ、謝りたかった。

邪魔して悪かったと。

リエラは全く何も言えなかった。

ただただ固まっているだけで、動こうとはしなかった。

それだけのショックがやはり彼女にはあった。

王族として自分の感情が表にでないように心がけていた。

何があっても自分自身を見られないように気をつけていた。

だというのにそれを知られた。

それが王族としてのプライドを傷つけられたのかもしれない。

または、ばれてしまった事に戸惑っているのかもしれない。

どう反応すればいいのかが全く分からないだけなのかもしれない。

けれど、どちらにしろ、リエラはただただ呆然と悠を見ることしか出来ない。

そして、そんな自分を恥じた。

自分の心の未熟さを目の当たりにして。

「まあ、話はそれだけ。このまま言わずにおいたら、絶対後悔すると思ったから。リエラは俺のことをどう思ってるか知らないけど、俺自身は仲間だと思ってる。だから、けじめはつけておきたかったんだ」

しかし、そんなリエラは悠は笑いもせず、それどころか暖かい目で見て、にこりと笑う。

その姿は、フェルナに見せる物と全く同じ。

大切な人へと向ける物だ。

それが、悠の言葉に信憑性を持たせている。

大切だから仲間。

仲間だから大切。

その思いを。

「んじゃ、俺はそろそろ帰るな？ さっさと帰らないとフェルナも心配するしな。リエラもあんまり遅くなるなよ」

そして、ぽんとリエラの肩をたたくと、立ち上がり、その場を離れる。

その表情はすっかりいつもどおり。

さつきまでの真剣さはどこにもない。

そこにあるのはのんびりとした少年らしい表情。

子供っぽい表情だけだった。

リエラは、呆然としてその後姿を見ることしか出来なかった。

悠が自分の思っていたものとは全く違うものに見えたから。

まさか、悠がそこまで考えているとは全く思いもよらなかったから。いや、そもそもそこまで深く考えるだけの頭を持っているとは思わなかった。

リエラの中での悠は、街中にいるごろつきと同じだった。

言葉遣いも行動も粗野で、上品さがない。

もちろん、悠とて、そこまで下品ではない。

ただ、リエラの価値観ではどうしてもそうなるのだ。

周りにいる貴族と比べてしまうから。

そして、ごろつきみたいな悠だからこそ、大して深い考えをもてないと思ったのだろう。

適当でがさつで大雑把。

人の事など考えるだけの教養も理性もない。

そんな本人が聞いたらまず間違いなく怒鳴り声をあげてしまいそんな評価をしていたのだ。

そんな評価しかしていない人間に見透かされた。

自分自身の価値観がある種崩れ去ったようなものだった。

リエラはため息をつくとき空を見る。

夜空にはたくさんの星がちりばめられている。

そして、そんな星に救われたような気がした。

リエラは王族だ。

よって、傲慢で尊大な態度をとる。

王族とはそうであらなければならなかったから。

けれど、実際の彼女は自分自身の小ささも知っていた。

だからこそ、その姿でいようとしていた。

自分の小ささを知られぬために。

なめられないためにも。

将来国を継ぐ者として。

リエラは大きく深呼吸をした。

自分の心を落ち着かせるために。

そして、自分自身いまだに悠を認めようとしない心を戒めるために。

リエラが宿に帰ると、悠は一人でぽつんと食堂で飲み物を飲んでいった。

どうやら、風呂上りのようで、髪がしっとりと濡れている。

リエラは、つかつかと歩くと、悠の隣に座る。

そして、従業員に飲み物を頼む。

その顔は無然としている。

けれど、それは、単なる緊張の裏返し。

悠にもそれが分かるのだろう。

あえて何も言わない。

こくこくと自分の持っている物を飲むだけ。

まあ、自分が優位にいるからそんな事も出来るのだろう。

別段、今は自分に不利になる事はない。

元々、謝った内容だって、彼自身に完全に非があるわけではない。

どちらかと言うと、巻き添えを食らった。

その感のほうが強い。

もちろん、それぐらいリエラも分かっている。

あくまでも、これは悠が譲歩しただけの事なのだ。

これからのよりよい関係を築くために。

そこで、かちりとパズルのピースが埋まった。

自分がどうすればいいのか。

従業員が持ってきた飲み物をこくりと飲むと

「まあ、許してあげてもいいわ。あなたがどうしても許して欲しが
つてみたいだからね」

えらそうにふんぞり返った。

なんだかここで殊勝になるのは悔しかった。

いくら、認めたからといって、自分が悠の下になることは考えられ
なかった。

むしろこちらのほうが正しいような気がした。

それを聞いた悠と言えば、一瞬呆然とはしたが

「あはははは！！！」

次の瞬間には大笑いし始めた。

それがあまりにもリエラしかったから。

でも、そっちが悠も正しいと思った。

やはり、これじゃないとリエラではないから。

傲慢で尊大な態度。

これこそがリエラをリエラたらしめていると思えたから。

もちろん、その中にある年相応の少女の心の存在を感じながら。

第三十二話　ロリコンな彼

「へえ、意外とでっかな街なんだな。」

街に入るとすぐに悠は、人通りの多さを目にして、思わずそう言った。

確かに人は多い。

以前の密林都市ルッツヴァイアよりも多いだろう。

それもそのはず、この街は観光地なのである。

この街の名は芸術都市カミュッセル。

文字通りさまざまな芸術が集まる都市である。

そして、人々はそれを目当てに集まるというわけだ。

特に、この街には大陸的にも有名な歌劇団があり、その歌い手たちには、かなり熱烈なファンがいる。

「んじゃ、さっそく豪華にランチと行こうか。久々に優雅に行きたいしさ」

とはいえ、そんな事は悠にとっては関係ないのだろう。

三人にそう言って促すと、一人ですたすたと進み始める。

まあ、悠らしいと言えば悠らしいだろう。

食い気を優先しているところが特に。

三人は、あきれ返ってため息をつきながらも、そんな悠を追う。

一人で勝手に行動されて、迷子になられたらたまったものじゃないからだ。

さすがにそこまでは面倒は見切れない。

なんとか、追いついた時には、もうすでに悠はレストランの中に入っていた。

しかも、ちゃっかりと四人分の席をとっている。

そういうところは、相変わらずしつかりとしている。

ついでに言うと、今四人が来ているこのレストランはこの街でトップランクの店である。

実際はかなり格調が高い。

と言うわけなので、本来フォーマルな服装以外受け付けない。

なのだが……

「ささ、殿下様一行どうぞ」

リエラがいるため、そんな事はもちろんない。

最初断られたのだが、リエラの事を言うとおっさりと認可が降りた。もちろん、証拠として、国王直筆の認証を見せるのも忘れなかった。食の事になるととことん加減のない男だ。

とはいえ、もちろん、さすがに普段着で席につくことは出来ない。

周りに対して少々失礼になる。

と言うわけなので、四人はレストラン側が用意した服に着替えることにした。

それぞれ着替えた服は良く似合っていた。

元々容姿が並みのレベルではない女性陣は当然として、意外な事に悠もしっかりとした二枚目ぶりを発揮していた。

特にリエラなど、その姿を見て、軽く驚いたものだ。

所詮は馬子にも衣装。

服に着られたような印象しかないだろうと思っていたのだが、それが以外にも似合っていたのだから仕方がない。

今の悠を見れば、確実に貴族に間違えられる。

しかも、しがない下流貴族ではなく、都会にいる華美な上流貴族に。

とはいえ

「動きづらいな、この服」

中身は大して変わっていないが。

と言うよりも、悠にとって動きやすさが服にとって最優先事項のようだ。

まあ、旅行しているわけではなく、討伐の旅なのだから、当然と言えば当然だ。

そんな物ではまともに戦闘なんてできやしない。

「それよりも、さすがだねえ。全く容姿がいい人は羨ましい」

とはいえ、それはあくまでも自分の話し。

着飾った女性を見るのは嫌ではないらしい。

そういうところは、例にもれる事はないらしい。

三種三様の美貌を鑑賞している。

まあ、確かにこの三人の容姿は観賞用としては、まさしく最高のものであるが。

現実に、着飾ってからの三人は先ほど以上に視線を集めている。

それを悠は素直に感嘆している。

特に

「うん、フェルナなんか、特に可愛いな。ちゃんと俺から離れるなよ？ 変な奴に誘拐されたらいけないしな」

フェルナなんかがお気に入りらしい。

今、彼女が着ているのは、フリルをふんだんに使った淡いピンク色をしたドレス。

まだまだあどけない少女の愛らしさが抜けてないフェルナにぴったりだ。

まさしく、ある意味危険な少女だ。

悠の心配もひとしおだろう。

『……ロリコン』

もちろん、そんな悠を見たりエラとキュアの二人はため息混じりにそう呟いた。

しかし、それもすぐに終わる。

フェルナの事を大絶賛していた悠だが、リエラにしばき倒されてそれも終わった。

しばき倒されたとは言っても、せいぜい弱い電撃を受けた程度だ。

まあ、一瞬髪が逆立ったが、そのところは気にしないでおう。

どうせ、誰も気にしてない事だし。

それに、された本人も大して気にしている様子はない。

それどころか、目の前に出された皿を見て、興奮している。

さすがに表に出して、騒がないが。

まあ、そんな事をすれば浮くこと間違いなしだ。

それぞれ、自分の皿をゆつくりと綺麗にしていく。

フェルナは少々きこちないが、そこらへんは愛嬌と言う事で。

そういう経験がないのだから仕方がない。

まあ、他の三人はしっかりと扱っている。

悠もここでも意外や意外に普通に扱っている。

宮廷作法をしつかりと習っているリエラと比べても全く遜色がない。

さすがは、自称美食家なだけはある。

行儀作法もしつかりとしている。

まさしく優雅なランチタイムだ。

まあ、普段の悠を考えると違和感があるが。

それに、悠よりも見るべきは、フェルナだ。

不慣れな場に不慣れな道具。

もう一生懸命だ。

そんな健気な姿がかわいらしい。

もちろん、それを悠は食べながら、しっかりと見ている。

その目はもう完璧に垂れ下がっており、どこかのあやしい変態おやぢと大差がない。

もちろん、そんな悠を見ている二人が

『……ロリコン』

そういうことは、当然の事だった。

腹ごしらえをし終わった一行は、宿を探すことにした。

一応、しばらくは、ここに滞在する事に決まったからだ。

そして、そうとなれば、まずは行動拠点が必要になる。

そういうわけで、探し始めたが、あっさりと決まる。

まあ、もとより冒険者用の宿が少ないのもある。

この芸術都市は、あくまでも観光地だ。

よって集まるのは、どちらかと言うと旅行者。

しかも、かなり裕福な階層に位置する人たちだ。

そうでなければ、娯楽に金をかける余裕なんてない。

そして、そんな裕福な人間が集まるからこそ、治安も良く、街の警護にもしっかりと力がそそがれている。

そんな状況となれば、冒険者が集まる事はない。

仕事がないのだから当然だ。

もちろん、ギルドはある。

あるが、入ってくる仕事はほとんどない。

たとえば、入ってきたとしても、そうとう難解な物になる。

そんなものを好んで受ける人間は少ない。

そもそも、悠たちのように魔族と互角に渡り合える人間の方がずっとずっと少ないのだ。

普通の人間では、せいぜい魔物討伐ぐらいしか出来ない。

しかも、一匹に対して数人のパーティを組んでという形で。

そんな彼らにそれを受けろというのが、酷だ。

まあ、そんなわけで、冒険者が少ないのだから、宿も少なくなる。

よって、選べるものも決まってくるということだ。

宿を決めた四人はそれぞれ別れて部屋に入る。

相変わらず部屋割りはりエラとキュアにフェルナと悠だ。

二人は部屋に戻ると、まずベッドに寝転がる。

旅路で疲れた身体を休めなくてはいけない。

まあ、悠なんかはまだまだ余力十分だが、女の子のフェルナはそうもいかない。

いくら地獄の特訓を受けたからと言って、疲れないことはない。

現に、疲れが相当たまっていたのか、ベッドに寝転がってすぐに眠り始めてしまった。

第三十三話 意外な趣味

夕暮れの街中、リエラは一人で歩いていた。

先ほどまで、この街でもっとも有名な歌劇団の舞台を見てきたのだ。

もちろん、当日券なんて物はない。

ただ、その舞台になる歌劇場には、VIP専用の個室がある。

その中には、もちろん貴族用もある。

そこで見たわけだ。

実は、リエラは以前もこの歌劇団の舞台を見た事があった。

そのときは、自分で出向くのではなく、王宮にある劇場で行われたが。

そして、その劇のすばらしさに飲み込まれたのだ。

と言うわけで、せっかく来たのだから、もう一度。

そういうわけだ。

のんびりと通りを歩く。

周りには、カップルの姿がちらほらと見える。

今回の演目は騎士と貴族の娘の恋物語。

カップルで見るような演目だったので、仕方がない。

仕方がないのだけれども、やはり釈然としないものもある。

いや、釈然としないのではなくて、ただ羨ましいのだ。

見た歌劇をどうのこうのと仲良く話すその姿が。

自分には、それができないから。

リエラは心の中で幾度と思った。

今、隣にゼイオンがいれば、どんなにいいことだろうか。

恋人として語らえればどんなに幸せか、と。

そして、現実を思い出しては、沈んだのだ。

終幕の時、思わず涙をこぼしたが、劇の内容だけではないのは確かだ。

劇場通りを抜ける。

目の前にある店にはいろいろな種類の楽器が並んでいる。

劇場通りを抜けたら、楽器やその他演奏に関係するものが売られている通りになる。

そういうところから、楽器通りと名づけられている。

まあ、そのままの気がしないでもないが、劇場通りとて、数多くの劇場があるから、そう呼ばれているだけの事だ。

そこをすたすたと通り抜ける。

いたるところにストリートミュージシヤンの姿が見える。

腕の方は本当にピンからキリまでいるが。

その中に一人見知った人間がいた。

悠だ。

楽器店で、従業員と何か話しているみたいだ。

リエラは、その店の中に入った。

悠がこんなところにいるのが不思議だったからかもしれない。

確かに、悠に芸術と言うのは全く合いそうもない。

演奏会などに行っても、始まって数分で眠りだしてしまいそうな感じさえする。

そんな悠がこんなところにいるのだ、興味をひかないわけがない。

リエラはしばらく、隠れて観察していた。

その姿はあからさまで、かなりあやしいが、誰も何も言ったりしない。

まあ、美人は何もしても絵になるということだ。

いや、だからといって、変な事には違いないが。

それは、さておき、リエラはしばらく観察していた。

けれど、それと同時に軽く驚きを感じる。

今の悠の雰囲気だ。

いつもおちゃらけで、陽気な雰囲気はどこにもない。

どちらかと言うと、落ち着きのある気品漂う青年。

そんな感じだ。

実際、その仕草や口調どれをとっても、申し分ない。

ランチの時の事も考えると、悠と言う人間が自分が思っているほど簡単なものではない事に気付いた。

「これは、この街にある最高傑作ですよ。なんと巨匠グルズが制作したと言う業物です」

そんな驚きに身を包まれているうちに、少しずつ会話が進んでいく。どうやら、なにやら商談をしているらしい。

今、悠が見ているのは、ピアノ。

どうやら、悠はピアノを見に来たらしい。

その言葉を聞いた悠は鍵盤を軽くたたき、演奏する。

その音色はしっかりとした旋律を奏で、素人ではないことが分かる。

数小節演奏したところで、手を止めると、ため息をつく。

その表情は、呆れ気味だ。

どうやら、納得行くものではなかったのかもしれない。

「これが巨匠？こんな稚拙な音しか出せない楽器が？冗談じゃない。音は割れるし、鍵盤も硬すぎる。こんなの、おもちゃじゃないか」

いや、納得言っていないのだろう。

辛口のコメントを発する。

しかも、それはどこにも、間違いはなかった。

音割れも鍵盤の硬さも、事実巨匠作の物とは思えないほど、稚拙なできでしかなかった。

「だいたい、こんな二流店にそんな高価な物が置いてるわけないだろう。自分の店の格調を考えてから、うそつけよ」

そして、そんなうそがかなり気に入らなかったのだろう。

悠は辛らつな言葉を連ねる。

しかも、当たっているからなおのこと痛い。

目の前にいる従業員は脂汗をかいている。

まさかここまで言われるとは思っていなかったのだろう。

と言うよりも、そもそもうそだと言うことがばれるとは思わなかったのだろう。

「全く暇つぶしにきてみたけど、不愉快になるだけじゃないか」

けれど、それはあくまでもそちら側の都合。

悠にとっては侮辱でしかない。

盛大にため息をつく、その場を後にする。

「あ、お待ちください」

もちろん、従業員もその後を追いかけるが、完全に無視。

もうかなりのご立腹のようだ。

すたすたと店の外に出る。

リエラはそれを呆然と見やっていたが、気を取り直すと追いかける。

悠が店を出てしまえば、もうここにいる理由などない。

悠を追いかけて、リエラも外に出る。

そして、それを見ていた他の客たちも散り散りになっていく。

少々リエラの所業に興味を持ったみたいだが、さすがにおいかけるような事はしないみたいだ。

まあ、下手に追いかけてストーカーと間違えられるのも困りものだと言うものがあるが。

それはさておき、リエラは悠のあとを追う。

途中で、追いかける事を諦めただろう立ち止まっている先ほどの従業員の脇を通る。

リエラはその従業員を見てため息をついた。

芸術都市カミュッセル。

それは格調高き都市の代名詞としても使われる。

そんな場所で詐欺をしようとしていたのだ。

そうしたくなるのは仕方がない。

カミュッセルの名を汚したのだから。

第三十四話 親と子

リエラが悠に追いついたのは、それからしばらく小走りで追いかけた後の事だった。

「あなた、音楽には詳しいのね」

そして、追いついた後、リエラはそばにあるカフェテラスに誘い、席につくと同時にそういう。

自分がそばで悠の事を観察していた事がばれている事ぐらいリエラも承知だ。

あれだけ、堂々と見ていたのだ。

察知されないほうがおかしい。

「ああ、まあ、昔取った杵柄とやらだ」

そして、悠もまた同じくリエラの考えている事が分かっていた。

だから、変に混ぜ返すようなことはせず答える。

ただ、その答えはちょっとリエラの好奇心を引いた。

悠が芸術に興味を持っているとは思えなかったからだ。

「ふうん、全くをもって似つかわしくないわね」

けれど、良くとも悪くとも、リエラはリエラ。

どうしても、皮肉になってしまう。

まあ、これ自体も本心と言えば本心だ。

悠に芸術なんて物は本当に縁遠い存在に感じられる。

今まで見てきた姿が姿なだけにどうしても違和感を感じざるを得ない。

「そうかな？むしろ、俺がこういうことに身を置いているのは当然の事だったんだけどね」

けれど、それはどうもリエラだけのようで、悠の周りは違うらしい。

「と言うか、俺がそういうことに身を置かなかったら、きっといろいろ言われてたと思うし」

悠の周りにとって悠は音楽に身を置いて当然の存在。

いや、身を置かなくてはならない義務があると思われていたのだろう。

それはつまり

「あなたの両親、もしかして音楽家？」

そう両親が音楽家だと言うことにつながる。

聡明なりエラはすぐに気がついた。

「ああ、そうだよ。父さんはピアニスト、母さんはチェロのソリスト」

そして、リエラの推測は正しく、事実悠の両親は音楽家だった。

「両親共々世界的有名な音楽家。その子供の俺が、音楽に携わらないわけがないだろう？」

けれど、それは同時に悠が制約を受ける事になる発端でもあった。

自分で自分の道を選ぶ事の出来ない制約。

けれど、悠は、それを悲観している様子はない。

むしろ晴れ晴れとしていた。

「あなたはそれで良かったの？」

そんな表情の悠を訝しがってリエラは尋ねる。

リエラは時々考える。

もし自分が王族でなかったら、と。

王族には自由はない。

こうして、旅に出られるのもあくまでも、魔王討伐と言う制約の元でだ。

それが必要ならば、こんなふうには宮殿の外には出られない。

まあ、通常なら魔王討伐なんて物に王位継承者が出る事なんてないが。

それでも、ここにいるのはリエラの申し分ない魔法の才能があるからだ。

王位継承者として王国を守らなくてはならないから。

そこには男とか女とか性別は関係ない。

王族としての責任だ。

常に王族は責任と義務を背負い続ける。

王族になって得になる事などほとんどない。

むしろわずらわしくなることの方が多い。

だから、リエラは王族でなければ、そう考えることがあったのだ。

「ああ、別にピアノは好きだったしね」

けれど、そんなリエラの想いとは全く逆の悠の思い。

「もちろん、強制されるのは嫌だった。でも、そんな人達から両親は俺を守ってくれた。だから全然嫌じゃなかった」

悠は両親から守ってもらっていた。

決して自分の意思を無視される事がないように。

だから、悠は決して自分の状況を悲観することはなかった。

リエラはそれを聞いて考える。

そして、思い至る。

自分もまたそうである事を。

確かに王族としての責務はかなり多く辛い。

だけど、自分を守ってくれている人は少なからずいた。

自分を補佐してくれる人は確かにいたのだ。

「そう」

それに気がついたリエラは自然と笑みがこぼれていた。

「それよりさ、晩飯食おうぜ」

そんなリエラの姿を確認した悠は唐突に切り出した。

もしかすると、悠自身リエラの心内の葛藤に気付いていたのかもしれない。

ゼイオンへの恋心に気付いたのだから、それもあながちないとも言

い切れない。

いや、ゼイオンへの恋心に気付いたからこそ、そっちにも目が向かったとも考えられる。

悠にもある程度はリエラの状況を分かっている。

厳格な身分社会。

リエラが王族である限りその恋が決して叶う事はない。

だからこそ、王族でなければ、そんな想いが浮かんできたのではないかと。

それに気付いたからこそ、悠はそう言ったのかもしれない。

リエラを慰める意味で。

そして、今のリエラには笑顔がある。

もう慰める必要はない。

そう思ったからこそ、いつもどおりの姿に戻ったのかもしれない。

「そうね。そうでしょうか」

けれど、リエラはそんな悠の優しさには気付かない。

気付く必要がないからだ。

そして、悠自身気付いて欲しいとは思っていないからだ。

悠とリエラは立ち上がる。

もうすでに日は暮れ始めている。

ただ、人通りは相変わらず多い。

カミュツセルの一日は長い。

朝には朝の、昼には昼の、夜には夜の、それぞれの楽しみ方がある。

そして、これからは、恋人の時間。

街には恋人であふれかえる。

二人はそんな街中をすいすいと抜けていく。

行き交う恋人とすれ違うたびに、恋人と同士に甘い言葉が耳につく。

それは幸せそうな光景だった。

思わず羨みたくなるほど。

恋人ばかりだった通りを抜けると、宿屋街に入る。

とはいえ、その区画内は非常に狭い。

宿の数が少ないのだから区画も当然狭くなる。

悠とリエラは、そこに戻ると大きくため息をつく。

やはり、甘い雰囲気ぶんぷんの場所を歩くのは独り身としては辛いらしい。

特に、リエラは相変わらずの片思い。

ずっとゼイオンの事を考えていた。

そして、すれ違う恋人たちを見ては、自分とゼイオンに摩り替えていた。

立派な恋する乙女だ。

まあ、妄想家とも言えるが、そこは愛嬌で。

それはさておき、ようやく甘い雰囲気とは無縁な区画に入った二人はようやく人心地がついたようだ。

視線もやや俯き気味だったものが、しっかりと前を見ている。

特に悠の頭の中は夕飯の事で一杯だ。

意外な素性を持った悠ではあるが、やはり団子が好きなのには変わりはないらしい。

まあ、それでこそ、悠であるが。

そして、逆にリエラは少々眉をひそめている。

先ほどの妄想を恥じているのかもしれない。

または、自分もそう出来ないことを齒がゆく思っているのかもしれない。

それは分からないがあまり機嫌がよろしくないことは分かる。

「おやおや？ 迷子かなあ？？」

そして、そんな時に、お約束のように出てくる人影がある。

いかにもチンピラ然した服装をした男たち。

もう何が目的なのかが分かりやすい。

いくら、治安がいいとはいっても、やはりこういう区画にはそれなりにこういう輩も出てくる。

特に、今の二人の服装は、冒険者然としたものではない。

二人とも正装。

悠は、昼食の時に来ていたものをそのまま来ている。

やはり楽器店に入るのだから、それなりに身形を整えたかった。

歌劇を貴賓席で見えていたりエラは言わずもながだ。

明らかに、この場には相応しくない服装でいるのだ。

鴨と思われても仕方がない。

けれど、相手が悪かった。

しかも、状況も悪かった。

悠は心内は夕飯の事でうきうき状態。

リエラは不満がたまっており機嫌がよろしくない。

そんな二人に不用意な発言等をする。

それは、つまり

「晩飯の邪魔するなあ!!」

「うるさいのよ!!」

自殺行為と言うわけだ。

悠とリエラ。

二人は、目の前にいる男たちを思いっきり殴りつける。

もうほとんど親の仇を見るような目だ。

特にリエラなんかは、夜叉のような目つきで男たちをにらんでいる。

むしろ、災難なのは男たちだ。

あまり褒められた事をしていとは言えない。

というよりは、むしろ褒められるような事では全くない。

けれど、今回は運がなさ過ぎた。

貴族の坊ちゃんだと思って、油断してみたらどうだ。

二人の凶暴な事。

顔を殴られたと思うと次はわき腹。

ひどいときには男の最大の弱点をヒールで踏み潰す。

しかもぐりぐりと。

もうほとんど悪魔の所業だ。

男たちはほとんど半泣き状態で逃げようとする。

けれど、フラストレーションの収まりきららないリエラは、魔法で動きを縛り付けると

「あんたたちみたいな単細胞生物みたいなのが元々いけないのよ」

悠から奪い取った大剣で殴りつける。

もうほとんど八つ当たりだ。

最初の内こそ、頭に血が上った悠であったが、リエラの姿を見てし

まって、あつという間にさめてしまっている。

と言うよりむしろ怯えてしまっていると言うほうが正しいか。

そのあまりの残虐さに。

今男たちに起きている事が自分の身に起きたとなるとぞっとしない。

悠は、絶対にリエウを怒らせないで置こう、そう心に誓う。

命も身体も最大の急所も大事だから。

第三十五話 仲良きことは美しきことかな

「ふう、すっきりした」

最後にめりめりと踏み潰すのにこやかにリエラはそう言った。

周りにはうめくように悶えている男たちがいるが、全く気にしているそぶりはない。

まあ、やったのはリエラなのだ。

罪悪感を感じるようならそんな事はしないだろう。

しないだろうが……

やはりやりすぎなのではないのだろうか？

悠もそう思ったが、賢明にも何も言わなかった。

自分まで巻き添えを食らうのは勘弁だからだ。

せっかくの夕飯が食べられなくなってしまったのは一大事だからだ。

まあ、そこらへんで、食べ物が出てくるのはどうかとも思うが。

「さあ、帰りましょう。」

リエラは、悠にそういうと、歩き始める。

横たわる男たちを踏みつけて。

そのたびに、くぐもった悲鳴を上げるが、ここでも全く気にしていない。

やはり悪魔だ。

悠は背中に嫌な汗を流しながら、リエラの後をついていく。

心なしか、背が縮こまって丸くなっている。

一生懸命主人の顔色を伺っている使用人のようだ。

いや、悠にして見れば、まさしくそんな状況なのかもしれない。

一生懸命リエラの顔色を伺って、自分にまで火の粉が降りかからないようにしているのだ。

やはり、あの男たちの二の舞だけは勘弁して欲しいみたいだ。

男たちからさっさと離れ、宿へと向かう。

これ以上リエラと一緒にいるのは精神衛生上よろしくない。

もう、全くと言っていいほどよろしくない。

となれば、さっさと宿に戻ってしまうのが一番だ。

もちろん、宿に帰れば、フェルナがいる。

悠にとって、フェルナこそ一番の癒しアイテムだ。

それは悠が『ロリコン』だからなのだが。

微妙ににきまずい空気の中を耐えて、悠はなんとか宿にたどり着いた。

冷や汗をかきすぎたのだろう。

顔色も優れない。

そそくさと自分が借りている部屋に逃げ込む。

もうこれ以上リエラの相手は御免こうむりたいようだ。

まあ、男なら誰でもそう思うかもしれないが。

それはさておき、部屋に戻った悠は、即座にベッドの上に倒れこむ。

かなり精神力を磨耗してしまったようだ。

その姿を見たフェルナはびっくりしたが、あえて何も言わなかった。

こんなときの悠に、話しかけたら逆に気を使わせるだけだからだ。

悠は常にフェルナに対しては兄のように振舞う。

フェルナに心配かけるような事は基本的に行ない。

よって、フェルナが心配そうに何か言うと、余計に気を張る事にな

り、逆に疲れさせてしまう。

だから、あえて何も言わないのだ。

フェルナは、疲れ果ててベッドに倒れこんでいる悠を一度確認すると、部屋を出る。

そして、階段を降りる。

行き先は決まっている。

食堂だ。

今のフェルナに出来る事はひとつ。

夕食を持って行ってあげる事ぐらいだ。

下の食堂に入り、店の主人に注文する。

周りから視線を浴びるが気にしない事にする。

気にしたところで、意味はない。

それに、向こうからちよっかいを出してくることもない。

最初に、この宿をとったときにちよっかいをかけて来た人がいたのだが、しっかりと悠にしばかれてしまったのだ。

それ以降、誰もちよっかいを出そうという気はないらしい。

まあ、誰も好き好んで痛い目を見ようとする者はいないはずだ。

それこそ、趣味が普通じゃないものをのぞいて。

第三十六話 悠とリエラとドラゴンと

悠とリエラ。

二人は、真っ暗な洞窟内を探索していた。

なんだかんだ言っただけ、最近この二人はうまくやっており、二人だけで出かけることもしばしばある。

そして、今回もまた二人きり。

ギルドでもらってきた仕事のためだ。

今回の仕事は洞窟内にいる魔物の掃討。

ランクで言えばBぐらいだ。

まあ、二人そろえば、あっという間に終わってしまう内容だ。

よって、四人全員で行く必要もないので、二人組みで行く事になった。

後の二人のうちフェルナは久しぶりに戻ってきたフェンリルと劇鑑賞に行っており、キュアは以前リリスと会った時にもらった魔術書を読んでる。

かなり稀有で高等で難解なもののため、キュアも興味を惹かれ、時間があればずっと読んでる。

己の魔術の才には強い自負を持っている分、知らない魔法は何が何でも覚えておきたいのだろう。

そして、余り者の二人であるリエラと悠にお鉢が回ってきたわけである。

二人は悠が生み出した小さな光球を光源にして、注意深く洞窟内を進んでいく。

ところどころぬめっており、空気も少々湿っている。

あまり環境的にはよろしくない場所。

まあ、そんなところだからこそ、魔物がいるのかもしれないが。

やはり、仕事を無事終えたら、さっさと宿に帰って熱いシャワーを浴びたりでもするだろう。

それぐらいまわりつくような空気なのだ。

特にリエラはかなりストレスがたまっている。

まあ、女性にしてみたら、こんな気持ち悪いところになどいたくはないだろう。

けれど、それに比べて悠は、さほど顔色を変えていない。

と言うよりも、全くかわっていないと言ったほうが正しい。

いつもどおりの能天気な顔をしている。

まあ、足場が悪いので、ちゃんと注意深く行動はしているが。

それでも、空気の悪さに辟易している様子はない。

リエラも、最初のうちこそ気にしていなかったが、いつまで経っても顔色の変わらない悠を訝しがっている。

しかし、だからと言って、何か言う事も出来ない。

愚痴を言う気力すらないのだ。

これでは、まともに戦えるのかさえもあやしい。

まあ、リエラのことだ。

しっかりと戦えるだろう。

たとえば、ベストコンディションでなかったとしても。

それはいいとして、どんどんと奥へと進む。

それに比例するかのように、肌につき刺すようなプレッシャーが当たりを満たし始める。

先ほどのよどみきった空気まで、うそのように冷めて張り詰めたもののように変わる。

元凶までもうすこしのようだ。

奥へと突き進むと、最終的にはただっ広い広場のようなところに出た。

上を見てみれば、ほんの少しだけ明かりが見える。

おそらくは、ここいらいったいの空気がよどんでいない原因もそれにあるのだろう。

けれど、それはこの際どうでも良かった。

むしろ、そんな事を気にしている余裕は今の二人にはない。

目の前にいる魔物。

いや、魔物なんて呼ぶわけにはいかない。

そこにいるのは竜族。

しかも、適当に血が混ざった亜種ではなく、真祖の竜。

その巨大さ。

肌に感じる威圧感。

それがすべてを物語る。

真祖の竜。

それは、上級魔族すら凌駕すると言われるほど強大な力を持つ一族。

そうそう簡単に相手できる物ではない。

しかも、洞窟内。

身体のかなたにしてみれば、少々落盤は楽に耐え切れるだろうが、小さな人種である悠たちには脅威でしかない。

とはいえ、依頼は依頼。

完遂するしかない。

無事生還できてから、文句を言うしかないのである。

悠は剣を抜き去り、構えを取る。

リエラもすでに戦闘準備は整っている。

まずは悠の先制攻撃。

気功術で練り上げた気を刀身と体中にめぐらせ、振りぬく。

並大抵の魔物なら必殺の一撃。

けれど、それも竜の硬い鱗の前ではただの稚拙な一撃。

全くダメージは与えられない。

けれど、それも最初から分かっていた事。

一定の間合いを取る。

即座に竜がその巨体に見合った長い尾をしならせて来たからだ。

まさしく必殺の一撃だ。

それを悠は、交わす。

絶大な威力を誇る一撃だが、悠を捉えるだけのスピードはない。

まだ、本気を出していないからなのかもしれないが。

悠の攻撃にあわせて、リエラも魔法で加勢する。

隙間ない攻勢をしかける。

けれど、それでも、竜にダメージは全くと言っていいほど与えられない。

硬い鱗にすべてはじかれてしまう。

悠は、いったん間合いを取り直すと、魔法の詠唱に入る。

いつまで経っても効果がないのでは仕方がない。

このまま続けて見たところでジリ貧だ。

ならば、賭けに出るしかないだろう。

地盤が崩れない事を祈るしかない。

『求めるは終焉への軌跡。破滅への道標。我が請うは破壊の衝動。崩壊への黙示録。全てを絶望へといざなく虚構の想い。今此処に掲げよ。全てを切り裂く虚無の刃』

詠唱と共に剣が黒く怪しく輝く。

幻影の剣を生み出す古代魔法のひとつ。

その接近戦で放たれる一撃は重い。

壁を傷つけずに、倒すだけの破壊力を手にするには、これしかない。

悠は、もう一度、間合いを詰める。

それにあわせるようにしてリエラは竜を牽制する。

あくまでもサポートに回るだけ。

まあ、魔法主体であるリエラは洞窟内ではさほど出来る事は多くない。

間合いを詰めた悠は剣を振るう。

それにあわせるようにして、

『ニヒリティブレイド』

そういつて、剣から放たれる黒い衝動。

リエラの魔法が邪魔で、よけられるタイミングではない。

完全に討ち取れるタイミングだ。

竜がいた辺りには爆音がとどろき、爆煙があがる。

悠は、飛びのき、その煙が消えるのを待つ。

リエラもまた、悠の隣に構えを崩すことなく、様子を見る。

けれど、期待は十分。

タイミング、威力共に申し分ない。

これで生き残れるわけがない。

そう思っていた。

リエラは。

けれど、それはやはり甘かった。

さすがは真祖の竜と言うべきか、全くの無傷でその場にどしりと存在していた。

リエラは愕然とした。

まず間違いなく倒したと思っていた。

けれど、現実はどうだ。

あっさりと防がれてしまっている。

そして、それが隙となった。

呆然と立ち尽くしていた彼女に向かって竜はブレスを吹きかけた。

直撃を受ければ、一瞬にして蒸発してしまうほどの高温のエネルギー。
I。

反応はとうてい間に合いそうもない。

リエラは瞬時に結界魔法の詠唱始める。

けれど、先ほどの一瞬が尾を引いた。

間に合いそうもない。

リエラは、瞬時にその詠唱を中断すると、

『ホワイトウォール』

簡易式の結界を生み出す。

直撃だけは防ごうと言うのだろう。

けれど、生み出した結界はあっさりと消滅する。

圧倒的な熱量に耐え切れなかったのだろう。

完全に誤算だった。

下手すれば死んでしまうかもしれない。

リエラは初めて恐怖を感じた。

今まで、そんな事はなかった。

今までは、あっさりと勝ち進んできた。

けれど、こんな状況は初めて。

今まで、一度として圧倒的不利な状況に立った事などなかったのだ。

反射的に目を瞑る。

そのままその場を離れば、余波を受けるだけですんでいたのかもしれない。

けれど、恐怖で混乱しきっているリエラに、それを考えるだけの余裕はなかった。

ブレスの一撃が目の前に広がる。

いつしか、リエラはその場にしゃがみこんでいた。

絶望に身を寄せて。

そして、衝撃が走った。

真正面からではなく、横から。

呆然と立ち尽くしているリエラを見て悠はあわてた。

詠唱なしで無理やり『カオデット・ウィング』を発動させた。

もちろん身体に相当な負荷がかかった。

けれど、それ以上にもリエラの事が心配だった。

一気に踏み込み、しゃがみこんだまま動かないリエラに体当たりをする。

そのときには、ブレスが目の前まで接近していた。

もちろん、リエラは無事に吹き飛ばせたけれど、今度は逆に悠自身がブレスと対面する事になる。

圧倒的な熱量。

けれど、悠はそれでも我を忘れる事はなかった。

リリスとの修行の時に学んだ事。

それはいついかなる時も冷静でいる事。

決して心を乱さない事だった。

無詠唱で出来る結界を何重にも重ねる。

一枚一枚の結界の力が弱くても、数が多くなれば、力は上がる。

そして、その時間稼ぎの間に

『我は純潔なる乙女。何人たりとも我が清き身体を傷つけるものは許さじ・メイデイン』

高位の結界魔法を唱える。

生まれでた光の結界は、熱く猛るブレスを遮断する。

けれど、さすがは真祖の竜と言うべきか、結界は少しずつ押されていく。

しかし、それも悠の予想の内。

結界を軽く操作して、ブレスの方向を変える。

決して剛の戦いはしない。

自分よりも圧倒的に敵が上にいる事は分かった。

ならば、下手にごり押しするわけにもいかない。

うまく方向を変えると、爆発に備えて、リエラのいる場所に飛び移る。

いまだにリエラは放心状態。

すっかり呆然としている。

こんな状況では、自分の身ですらまともに守れないだろう。

悠は、結界を維持しつつ、リエラに覆いかぶさる。

結界の大きさはせいぜい悠を中心にして半円で、直径は50cm程度。

二人が悠々入れる大きさではない。

ブレスの直撃を受けた壁は爆音を上げた。

それと同時に、壁が崩れ始める。

次々と岩盤が降り注いだ。

岩盤を振り払い、悠は立ち上がる。

どうやら無事に結界が守ってくれたようだ。

そして、リエラが悠に抱きかかえられるようにして瓦礫の山から出てくる。

リエラも無事のようにだ。

ただ、その表情は硬い。

情けない姿をさらしてしまったからだろう。

立ち上がると同時に魔法の詠唱に入る。

『全てを終焉へと向かう破壊の衝動。虚無へと導く銀の閃光。神はもうおらず、恩恵は与えられず、ただ滅びるのみ。銀の翼よ、我が前にその姿現わせ・シルバーウィング』

それは銀の翼の魔法。

抱きかかえていたリエラを脇に降ろすとそのまま竜に向かって突き進む。

先ほどよりももっと力強く地を蹴る。

そんな悠を迎撃するようにブレスをはきかける。

けれど、悠もそれをあつさりと交わすと、

『神々に魅入られし美しき焰化粧を纏いし炎神の娘よ。その熱く猛き炎の息吹を以って薙ぎ払え・ゲヘナマルス』

迎撃魔法を放つ。

灼熱の炎は竜へと向かって突き進む。

その熱き炎は竜の手前ではじけると、その巨体を飲み込む。

その瞬間に竜は大声で絶叫する。

その声の大きさは耳の鼓膜が破れしまいそうなほどの強力なもの。

悠は、耳をふさぎつつ距離を詰める。

まだ、息の根は確実に止まっていない。

ここで油断するわけには行かない。

少しずつ距離を詰める。

目の前にその巨体が広がる。

いまだに灼熱の炎は竜の身体を焼き尽くしている。

そして、もう一步。

もう一步進もうとしたところで、悠はいったん立ち止まった。

そして、次に考え込んだと思うと

『ゴッデスブレス』

その竜に対して回復魔法を唱えていた。

リエラは悠の姿を一瞬呆然と見送った。

けれど、すぐに気を取り直すと

「あんた何してるのよ」

這いながら悠の下へと向かう。

いまだに腰は碎けて、まともに動けないでいるからだ。

けれど、悠はそんなリエラを無視すると、

『……………』

竜に向かって話しかけていた。

それは人間が話す言葉でも、聞き取る事も、ましてや意味を取ることも出来ない言葉。

竜族が独特に扱う竜語。

それを悠は話していた。

リエラは、さらに呆然とした。

本来、人間は竜語を扱うことは出来ない。

竜語を話せるように声帯ができていないのだ。

けれど、悠はすらすらと話している。

その姿が奇異に見えたのだ。

『……………』

けれど、悠はそんな事は一切気にせず、話を続ける。

何を話しているのかは、全く分からないが、おそらく事情を聞いているのだろう。

悠が質問して、竜がそれに答えているようなそぶりを見せている。

全くついていけないリエラを放置して、話はどんどん進む。

そして、数分経った後、悠は頭を下げた。

リエラはさらに混乱した。

悠がどうして、頭を下げたのかが、まったく分からないからだ。

けれど、状況悪化はそれだけではすまなかった。

悠は、竜の傍から離れて、リエラのところに戻ってくる。

そして、リエラの傍に経つと同時に

「ギルドの依頼はこれでおしまいだ」

あたかも最後のとどめのようにそういいはなった。

唐突過ぎる悠の言葉。

「なんでよ!?!」

当然かみつかれる。

リエラがそういいたくなるのは当たり前のことだ。

「なんで、いきなりおしまいになるわけ?というか、だいたいなんであんたは竜語を話せるのよ!?!」

だから、この気を逃さず、リエラは質問をぶつける。

先ほどの戦闘で自身が揺らいだ。

ただでさえ、足元が不安定なのだ。

その状況で、分けの分からぬ状態。

しかも、自分の知らない。

届かない高みでの会話。

リエラをイラつかせるには十分だった。

リエラの王族としてのプライドを傷つけるには十分だった。

「だって、あの竜は、ただ自分の子供守ってただけなんだぜ？ 戦う理由もないだろう？ 竜語については、まあ、リリスに教えてもらった」

けれど、悠には、それは分からなかった。

悠のそれがリエラのプライドを傷つけるものだとは露とも思っていないから。

だから、呑気に答える。

「じゃあ、ギルドにはどう言い訳するつもりなのよ。竜がいるけど、あれはただ子供を守ってるだけだから、手出ししなければ大丈夫っ

て言うつもり？そんな事言ったって、あっちは信用しないわよ？大方、竜相手に怯えて逃げ帰ってきたって思われるのがおちよ」

それはガリエラには余計に齒がゆかった。

さらに自分と悠との間に距離を感じてしまつて。

だから、せめて精一杯苛立ちを抑えて対応する。

それがせめてもの抵抗。

「そんなの分かつてるよ。素直に言わないよ。フォルモーリストに移住させてから、いいに行くよ」

けれど、そんな抵抗も悠はあっさり返す。

まあ、それも当然だろう。

全く先を考えずに、答えを出すわけがない。

リエラだってそれぐらい分かっていたのだろう。

けれど、その言葉は今の弱りきったリエラの心を深くえぐるには十分な威力があった。

リエラは、もうそれ以上、悠のする事に口出しはしなかった。

できなかった。

悠は通信用のマジックアイテムを使って、すぐにリリスに、事情を

説明した。

事情を把握したりリスはあっさりと了承をした。

そこから先の悠の行動は早かった。

まずは、転送用の魔法陣を描く。

かなりの距離と物質量の物を送るのだ。

簡易的なものや、以前フェルナが瀕死の悠を連れ帰るのに使った物では到底間に合わない。

剣で岩石を削り、すらすらと描いていく。

それを描くと、詠唱に入り、竜を送る。

そして、最後にちゃんと送り届けられたかをリスに確認する。

もちろん、ちゃんと無事に送り届けられた。

それを終えた悠は、リエラと共に、洞窟外へと出る。

外に出たら、洞窟を破壊する。

証拠隠滅だ。悠は、ギルドに行くと、依頼達成を伝える。

そのときの内容は

『数十匹にのぼる魔物はしっかりと掃討した。けれど、それに際し

て、魔法の余波を受けて洞窟は崩れた』

これだった。

つまり、竜はいなかったことにするのだ。

まあ、もとより、依頼は魔物の掃討だ。

間違いはない。

とはいえ、もちろん、洞窟がそのままだったら、魔物の亡骸などが発見されず、疑われたかもしれない。

だからそのために、破壊したのだ。

金を受け取った悠たちは、そのまま宿に戻る。

これでしばらくは働く必要性はない。

悠は、宿の自分の部屋に戻るとシャワーを浴びる。

そして、それとは別に自分の部屋に戻ったりエラはぼんやりと窓の外を眺めていた。

第三十七話 悠の提案

リエラが部屋でぼんやりとしているうちに日はくれ、街は夜の帳を向かえる。

けれど、リエラ自身それは、全く気がついていない。

いまだに、考え込んでいた。

自分の弱さについて。

思い出すだけで悔しい。

自分よりも悠の方が実力あるのは分かっていた。

認めるのは癪だけど、事実には違いない。

それは旅を再開して気がついた。

扱える魔法も魔力も体術も剣術だって、目を見張るほどの成長ぶりだった。

そのスキルの高さは、この大陸中探してもそうそうは見つからない。

キュアと肩をはれるほどの実力者。

そして、次は自分を振り返ってみる。

彼女自身、白魔法の才能があった。

稀代の天才とまで言われていた。

もちろん、その言葉で慢心をしなかった。

彼女は、必死になって白魔法を習得していった。

王女だからといって、戦いに出ないわけではない。

むしろ、民を導くためには、自分が先陣をきらなければならない。

だからこそ、彼女は必死になって、習得していった。

王位継承者として。

王族として。

そして、今日まで、そんな自分自身に自信を持っていた。

けれど、現実はどうだった？

彼女は、物の役に立たなかった。

拳句の果てには足を引っ張ってしまったのだ。

リエラの自信は木っ端微塵になってしまった。

リエラは今自分自身に対する深い失望感を感じていた。

己の弱さに打ちひしがれていた。

キュアは、リエラの表情を見て、内心でため息をついた。

事情はすでに悠から聞いている。

勘の鋭い悠は、キュアにいつておいたのだ。

そして、力づけて欲しいと言ったのだ。

自分ではどうしようもないからと。

その言葉に頷いたキュアは、こうして部屋に戻ってきたのだ。

けれど、思っていた以上に、どうやら症状はひどい。

キュアには、どうしてそこまで落ち込むのか分からなかった。

彼女自身も今でもこそ、魔族を楽に屠るほどの実力を持っているが、昔はそうではなかった。

むしろ、普通の女の子と変わらなかった。

今のような実力を手に入れたのは、ひとえにも血の滲むような努力があったからだ。

だから、答えも簡単なのだ。

弱いと思うなら、努力をすればいい。

キュアは今までそうしてきたのだ。

そして、それはリエラにも同じ事が言える。

悔いるのならば、努力をすればいいのだ。

こんなところでうじうじしていたところで、何も始まらない。

キュアはリエラの傍まで歩み寄る。

「まずは、お疲れ様。相手が真祖の竜だったんでしょ？相手が悪かったわね」

まあ、何にしても、まずは話しかけなければ何も始まらない。

キュアは、あくまでもいつもどおりに話しかける。

「そうね。相手が悪かったわ。私は何も出来なかった。ただの足手まといだったわ」

けれど、リエラはいつもどおりではない。

自嘲気味さういう。

キュアはため息をつく。

こんな場面では、自分は役に立たない。

彼女には、弱っている人間の対処をした経験がない。

今まで一人で生きてきた。

誰にも頼らず、頼られずに生きてきた。

だから、どう対処すればいいのか、分からない。

「まあ、あまり思いつめないようにね」

だから、気休め程度の事しか言えない。

キュアは、そうとだけ言うと、逃げるようにして、部屋の外にでた。

そして、結局おはちがまわってきたのは悠だった。

まあ、パーティの中で一番、対人関係に関する経験が多いのだから当然だ。

もちろん、フェルナだって、ある程度はあるだろう。

だけど、さすがに、リエラとて、年下の子に慰められるのも良い気持ちはしないだろう。

ならば、残るのは悠だけなのだ。

悠は、両手に持っているグラスのうち一つを彼女に手渡すと

「ほら、アルコール。こういうときには、何も考えずに、飲むのに限るぜ?」

そう言って、にかっと笑う。

悠自身の手にもまた同じようにアルコールが含まれている。

本当は、こんな事をしているはいけないのだが、今日はまあ、愛嬌と言う事で、悠は目をつぶった。

リエラは、それをまじまじと見ると、一度深呼吸をすると、グラスに口をつける。

そして、こくりと喉を鳴らす。

その途端、雪のように白い肌に朱がさす。

悠は、それを確認すると、自分もまた同じように口をつける。

「リエラって強いよな」

そして、そのまま話し始める。

リエラは、その言葉を聞いて、反論しようとしたが、できなかった。

悠が、ずっと腕を出して、リエラを制したからだ。

まずは、自分の話を聞けとの事なのだろう。

リエラは、渋々と黙り込むと、グラスに口をつける。

悠は、それを確認すると、続けた。

「確かに、今日のはつきりいって、足手まといだった。役立たずだったことには違いない」

けれど、それはリエラにとっては耳に痛い事。

できることなら、聞きたくはない。

しかしながら、だからといって、耳を閉ざしたところで何も変わらない。

事実なのだからどうしようもないのだ。

「でもさ、リエラは、元々白魔法を得意とする、いわば後方支援。それなのに、しっかりと戦えるだけの力を持っている。あの竜だって、普通に外で戦っていれば、リエラからすれば、楽に勝てる戦いだったと思う。それを考えたら、俺はすごく強いと思う。まあ、柔軟性がないと思うけどね」

そして、今度は手のひらを返したように、リエラの事を褒める。

もちろん、そんな事を言ったところで、気休めにしか過ぎない。

リエラ自身、自分が弱い事はすでに承知の事なのだ。

当然悠だって、気がついてる。

リエラは弱い。

それは、別に実力云々の話ではない。

精神的、または戦略的に弱いのだ。

今までずっと自分の有利な場所で戦ってきた。

決して自分が不利になった事はないのだから。

だからこそ、逆境に弱い。

あつという間に弱腰になってしまふのだ。

ならば、それを打ち破るためには、どうすればいい？

答えは簡単だった。

「なあ、リエラ。明日から俺と手合いをしないか？」

悠との手合い。

今は悠の方が圧倒的に強い。

だから、そう提案したのだ。

第三十八話 悠とリエラと手合い

リエラは愛用のスピアを油断なく構えると、悠を見据える。

逆に悠は、大剣の腹を肩に乗せ、泰然とリエラを見る。

どちらの力量が上かは見ただけで分かりやすい。

油断なく構えるリエラには余裕は見受けられない。

精神を過敏に反応させている。

そうしないと、悠の動きに反応できる自信がないからだ。

「いくぞ？」

そして、悠がそう声をかけると、始まった。

今の悠は、補助魔法は何一つとしてつけていない。

完全に自分の肉体の能力のみの力で、勝負を仕掛ける。

リエラは、その逆でしっかりと補助魔法で守られている。

しかし、それぐらいのハンディがないとまともな勝負にならない。

「はあ！！！」

悠は大剣をリエラに向かって叩きつける。

その破壊力はすさまじく地面が崩れる。

慌ててリエラは、回避をして、詠唱に入る。

リエラの持っているスピアーはあくまでもかざりみたいなもの。

魔力を増幅させるための物でしかない。

実際にリエラが身につけている装飾品のほとんどがそれだ。

女の子で、しかも王女である彼女には、力はほとんどない。

王女である彼女は、あくまでも、女性らしいしなやかな身体を保たなくてはならないからだ。

そうでなくては、周りの国から嘲笑されてしまう。

野蛮な王女と。

『ホーリーランサー』

粉塵が巻きおこる空間に向けて数本の光の槍を放つ。

けれど、すぐに詠唱に入る。

これでしとめられるとは到底思えないからだ。

そして、現実には、その全てを大剣で打ち落とすと、リエラとの間合いを詰める。

けれど、その時にはすでにリエラの詠唱は済んでいる。

『ランス・ビア・レイ』

以前悠が使った古代魔法を放つ。

狙う場所は太もも。

まずは、機動力を。

そう思っただの一撃。

『ホーリーランサー』

けれど、それはあっさりと悠の放った魔法で方向が変わり、足元に突き刺さった。

リエラは軽く舌打ちすると、バックステップで後退しつつ

『フレイムドーム』

牽制を入れる。

悠は、それを交わし、同じくバックステップで後退して間合いを取る。

しかし、それと同時に、高く飛び上がる。

リエラは面食らった。

通常、高く飛ぶ事は隙を見せる事になる。

普通なら、そんな事はしない。

『ファイアーボール』

リエラは、飛び上がっている悠に向かって、放つ。

それと同時に、結界をはる。

悠の事だ、ただ無様に突っ込んでくるような事はない。

そう思つての事だ。

そして、それは真実だった。

瞬時に簡易結界で、ファイアーボールをやりすごすと、大剣をリエラに投げつけた。

リエラは、それをあっさりと交わす。

注意深くその剣から距離を取る。

その読みは正しかった。

リエラが距離を取ると同時に、

『ライトニンググレイブ』

その大剣に向かって雷の魔法を放った。

雷は大剣をつたって大地に吸い込まれると

「きゃ」

大地がうねり、爆ぜた。

その威力はすさまじく、距離を取ったリエラの結界さえも打ち破り、突き抜けた石礫が彼女を捕らえる。

もし、距離を取らなければ、その場でノックダウンだっただろう。

リエラは、息を呑み、再度悠を見据える。

ハンディを与えているとはいえ、悠は完全に手加減する気はないようだ。

それからしばらくの間、手合いは続いたが、リエラが攻撃に入る事はなかった。

悠の攻撃を致命傷にしないので精一杯だった。

悠の攻撃はかなりのレパートリーがあり、変則的。

先読みする事はおろか、回避する事すら難しい。

圧倒的な実力差だった。

いや、戦略能力の差か。

能力的には五分五分だろう。

悠の魔力は、今はリエラと同じ程度に抑えている。

身体能力の方は悠の方が上だろうが、それとて、補助魔法を使えないのだから、何の恐怖にもならない。

そんな中でもリエラが何一つとして機先を制する事が出来なかったのは戦略性のなさだろう。

確かに、リエラの能力は高い。

上級魔族とも十二分に戦えるだろう。

けれど、それもあくまでもある一定の規則の中。

力押しの勝負だけ。

だから、悠のように柔軟性のある戦いでは勝てない。

または、圧倒的な戦力差の中では、身動きすら取れなくなってしまう。

それがリエラの弱さ。

リエラがまず最初に克服しないといけない点。

「さて、そろそろ帰ろうか？」

悠は、泥だらけになり、所々服が破けてしまつて、ぼろぼろになっているリエラにそういつて手を差し出す。

リエラは、それを素直に取ると、立ち上がった。

いや、立ち上がろうとしたの間違いか。

それは叶わず、その場に崩れたのだ。

リエラの魔力はすでに限界。

それにあわせて身体も限界なのだろう。

けれど、その姿とは、逆に、彼女の表情は生き生きとしていた。

目標が出来たからだろう。

悠は、内心でくすりと笑みを浮かべると、彼女の傷を一つずつ治していく。

そして、自分の着ている上着を彼女にかぶせると、彼女を背負つて、帰途へと着いた。

第三十九話 宮殿での一コマ

王城のとある一室。

華美で豪華な王宮では珍しく、装飾などはなくひどく質素な部屋。

その中に、国王はいた。

その脇には、国王の右腕であるゼイオンの姿もある。

ゼイオンは壁についてある燭台に明かりをつける。

とたんに薄暗かった部屋に光がともる。

「お待ちしておりました」

そして、それと同時に国王は口を開き、頭を下げる。

彼の目の前には人がいた。

おそらく、最初からいたのだろう、若い男と女が一人ずついる。

男は、硬質な銀色の、まるで鉱物のような印象を与える髪と深い緑の瞳を。

女は、若草のように生き生きとした緑の髪とはしばみ色の瞳を。

それぞれしている。

「それよりも、事は順調に進んでいるのか？」

そのうちの一人、男が国王の言葉を聞き流し、尋ねる。

どうやら、これが本題らしく、その目は真剣そのもの。

「はい。無事にリリスの元を離れ、目的地へと向かっております」

そして、答える国王の方も真剣そのもの。

その額にはうっすらと汗が出ている。

「そうか。まあ、いくらでも、代えは利くものだ。別にどうってこともないが、早めに済ませるに越した事はないからな。くれぐれも、失敗はないように」

「承知しております」

どうやら、完全に立場は国王が下らしい。

会合は常に男優位に進んでいる。

それに対して、国王は下手になって答えている。

「話は、それだけだ。これで失礼させてもらう」

そして、最後にそう言うと、あっさりと姿を消す。

そこに残るのは、国王とゼイオン、そして女だけ。

「私もこれで失礼させてもらいます。後の事をよろしくお願いします。」

しかし、その女も男に従うように消える。

最終的に残るのは国王とゼイオン。

そして、その国王は、軽くため息をつく

「ついに動き始めたか。絶望へのシナリオが」

そう呟いた。

その表情はとても暗い。

言葉どおり、絶望だけが表情にうかんでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9078p/>

憂愁の旅人

2011年6月5日15時21分発行